

あき
た
の
た
の
か
り
ほ
の
い
ほ
の
あ
ら
み
を
あ
ら
み
わ
が
い
し
は
つ
ゆ
に
ぬ
れ
つ
つ

てん
ち
てん
ち
皇



秋の田に作った仮小屋の、その苦ぶきの屋根の目が粗いので、夜の番をしている私の衣の袖は、洩れしたたる露に濡れそぼっているよ。

◇後撰和歌集 卷六・秋中・三〇二 詞書「題しらず」

天智天皇 第三十八代の天皇。推古三十四(六二六)

年?天智十(六七二)年十二月三日。四十六歳か。父は舒明天皇、母は皇極天皇(重祚して斉明天皇)。諱は中大兄。皇太子時代、大化の改新を断行。都を近江に移し近江令を定めた。また漏刻(水時計)を作って時報を行うなど、文武に広く活躍した。「万葉集」に長歌一、短歌三首がある。勅撰集は「後撰和歌集」に初出。

■秋の田のかりほの庵 秋の爽りを鳥獣の害などから見守る小屋のこと。「かりほ」は「仮庵」の二重母音がつまった語。これに稲などの刈り取った穂を意味する「刈穂」を掛けているとする説もある。■苦(苦)は、菅や茅などの草で編んだ蓆状のもので、仮庵の囲いや屋根を葺くのに用いた。■苦をあらみ「ををみ」は「くがくなので」の意を表す。「を」は間投助詞、「あら」はク活用形容詞「あらし」の語幹、「み」は接尾語。「くみ」の「く」には形容詞の語幹(シク活用の場合)は終止形)が入る。

■衣手 袖のこと。

秋の田濃

か里本

能の

い本乃

苦を

あらみ

わ可衣

手は

徒ゆ

耳ぬ速

川つ



農民を思いやる帝王の歌

飯庵で夜の番をするつらさを詠んだこの歌は、本来、田守（田の番人）の労苦を嘆いた、読人しらずの歌だったのである。次のような類歌が存在することも、その想定を裏づける。

秋田刈る飯廬を作り我が居れば衣手寒く露ぞ置きにける

〔万葉集〕卷十 二二七四

秋田刈るかりほを見つつこきくれば衣手寒し露置きにけり

〔古今六帖〕第二 かりほ 一一二四

この歌が、『後撰集』で天智天皇御製とされた背景には、農民の辛苦をわがものとして共有する理想の帝王像への思いが潜んでいるのではないだろうか。苦ぶきの屋根をしみとおった夜露が、ぼとりぼとりと落ちる秋の夜の静寂が、身にしみるような歌である。

はるす
春過ぎて夏来にけらし白妙の
ころもほ
衣干すてふ天の香具山

持
統
天
皇



春が過ぎて夏が来たらしいよ。白妙の衣を干すという
天の香具山、あの山に真白に衣が干されている。

◇新古今和歌集 卷三・夏歌・一七五 詞書「題しらず」

持統天皇 第四十一代の天皇。孝徳元(六四五)年?

大宝二(七〇二)年十二月二十二日。五十八歳。『百人』

一首二番歌の作者天智天皇の第二皇女。母は蘇我遠智娘。叔父天武天皇(大海人皇子)の妃として壬申の乱にも行軍を共にし、その崩御後帝位に着いた。草壁皇子(文武天皇の父)の母。『万葉集』に、長歌一、短歌五首がある。勅撰集は『新古今和歌集』初出。

■夏来にけらし 「けらし」は「けるらし」の約。 ■白妙の衣

「白妙」は「白栲」とも書き、栲(楮の繊維)で織った白い衣のこと。また、白妙は白い意をかけた枕詞。香具山を齋き祭る人たちの斎衣と考える説もある。 ■干すてふ 「てふ」は「といふ」の約。

■天の香具山 畝傍山・耳成山とともに大和三山の一。

天から降ってきたという伊与風土記(逸文)に見える古い伝説により「天の」と冠する。奈良県橿原市と高市郡の境にある。標高一四八メートル。

春過はるすぎて天

夏なつ

きに爾

けらし

志呂多しろた

盈えいの

天あま

乃の

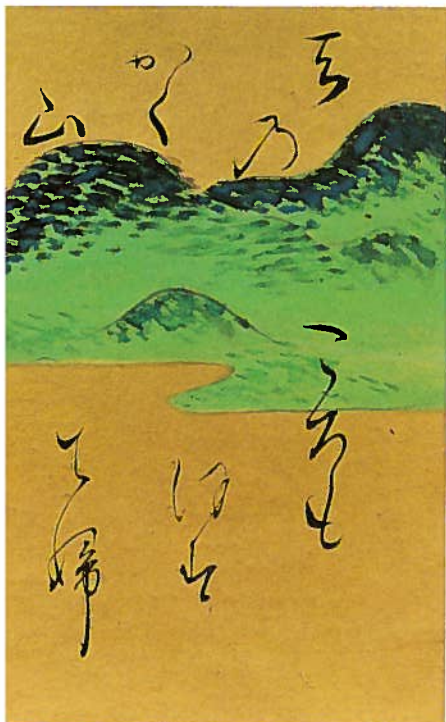
かく

山やま

て婦ふ

保春ほす

ころも



春から夏への季節感

この歌の原歌は、『万葉集』巻一、二八番で、「春過はるすぎて而なつ夏なつ来良きたら之の白妙しろたへ能の衣乾ころもほしたり有あり天あま之の香来山かぐやま」とあり、三十六人集の『家持集』にも「夏歌」として、「春はるすぎて夏なつぞきにけるし
ろたへの衣ほしたりあまのかご山」という形で見える。原歌は、二句・四句で切れ、実景に即した躍動感のある詠みぶりである。これが、「来きたにけらし」と柔かな口調に変わり、以下末尾までつづけて詠み下されるようになったのは、平安時代も終わり近くのことであつたらしい。「衣干ほすてふ」という伝聞表現への転化は、すでに香具山の麓での生活実感を失つて久しい王朝人の、この山に寄せる憧あこがれが育はぐんだものであるうか。青々とした初夏の香具山に白衣はくが干ほされているという、色彩の対照も鮮明な、春から夏へという季節の変わり目には、ふと想おもい起おこさされる歌である。

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜をひとりかも寝む

柿本人麻呂
かきものひとまろ



山鳥の長く垂れた尾、そのように長い長い夜を、わたしはひとりさびしく寝るのであろうか。

◆拾遺和歌集 卷十三・恋三・七七八 詞書「題しらず」

柿本人麻呂 生没年未詳。持統・文武天皇に仕えた。

石見国で没したか。『万葉集』第二期の歌人として、長歌二十、短歌三百三十四、旋頭歌三十五首を残す。『万葉集』に引かれている「柿本人麻呂歌集」は、人麻呂が記録・編纂した撰集とみられる。後世、山部(辺)赤人と並び称され、平安後期以降、歌聖・歌神として仰がれた。三十六歌仙の一人。なお『三十六人集』のうちの『柿本集』は人麻呂以外の平安初期ごろの読人しらすの歌を多く含んでいる。勅撰集は『古今和歌集』左注の伝承を除けば『拾遺和歌集』初出。

■あしびきの山鳥の尾のしだり尾の 「あしびきの」は「山」に掛かる枕詞。「山鳥」はキジ科の鳥。夜は雌雄が峰を隔てて寝ると考えられていた。「しだり尾」は長く垂れ下がっている尾の意。ここまでが「ながながし」を導き出すための序詞である。■ひとりかも寝む 「かも」は疑問・詠嘆・反語などの意を表す係助詞で、ここでは詠嘆の意。

あし引びき

の

山鳥やまどり乃尾の

能の

し堂たりお濃おの

な可かく

し

よを

ひ止と里りかも

ねむ



山鳥に寄せる独り寝のわびしさ

この歌の原歌は、『万葉集 卷十一 古今相聞往来歌類之上の寄物陳思(物に寄せて思いを陳べたる)歌に見出される、二八〇二番歌の異伝「足日木乃 山鳥之尾乃 四垂尾乃 長永夜乎 一鴨将宿」である。この寄物陳思の歌群のうち、二七九九番から二八〇七番までの「物」はすべて鳥で、鶺鴒、鶏、大海の荒磯の渚鳥、たかべ、鶴、鴨、千鳥などが詠み込まれており、鳥の組歌を読むような面白さがある。「あしひきの…」という序詞は、下句でかこつ独り寝の苦しき、わびしさの比喻ともなっている。夜の時間の長さを、長く垂れた山鳥の尾を通して、具象的・視覚的に表現している。四度繰り返される「の」の音にも、夜の長さの趣きを感じられる。後鳥羽院が藤原俊成(百人一首八三番歌の作者。藤原定家の父)の九十の賀のために詠じた、

さくら咲く遠山鳥のしだり尾のながながし日もあかぬ色かな
(『新古今和歌集』春下 九九)

は、この歌の本歌取りである。

田子の浦にうち出でて見れば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ

山辺赤人

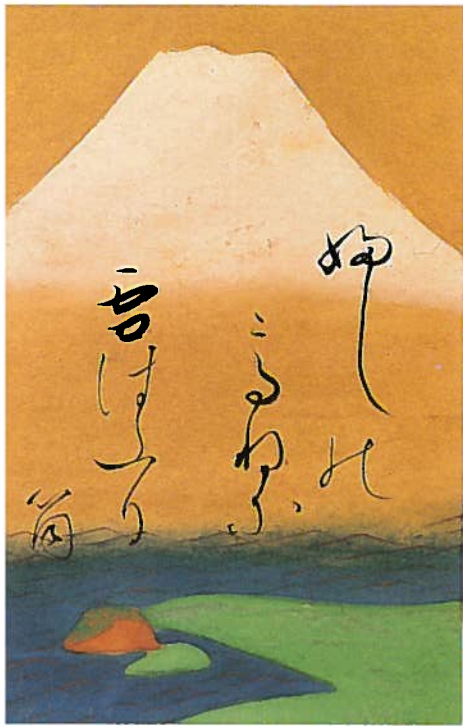


田子の浦に出て、仰ぎ見ると、真白な富士の高嶺に雪が降りつつづいていよ。

◇新古今和歌集 卷六・冬・六七五 詞書「題しらず」

山辺赤人 生没年未詳。「万葉集」では「山部」と表記され、「山部宿禰赤人」と称される。元明・元正・聖武天皇の時代の人で、一説に、天平八(七三六)、九年ころ疫病のために没したかといわれる。「万葉集」第三期の歌人として、長歌十三、短歌三十七首を残している。「古今和歌集」仮名序などで柿本人麻呂と並び称され、「二聖」とも呼ばれる。三十六歌仙の一人。なお、「三十六人集」のうちの「赤人集」は「柿本集」と同じく、赤人以多の読人しらずの歌を多く含んでいる。勅撰集は「拾遺和歌集」初出。

- 田子の浦 静岡県富士市の南、駿河湾の海岸で、駿河国の歌枕。
- 白妙の ここでは「富士」に掛かる枕詞として用いられている。
- 富士の高嶺 富士山。現在の行政区画は山梨県と静岡県にまたがるが、歌の世界では駿河国の歌枕とされる。
- 雪は降りつつ



田子のうら

に

婦し能

高ね爾

打出天

三れハ

白多衣乃

雪はふり

筒

古今を通じての富士山の名歌

「つつ」は動詞型活用語の連用形をうけ、反復・継続の意を表す接続助詞。「降る」ということが反復される意になる。

原歌は「万葉集」巻三、三一八番の「田児之浦從 打出而見者 真白衣 不尽能高嶺余 雪波零家留」で、「山部宿禰赤人の不尽山を望める歌一首」という長歌に付された反歌である。原歌と、百人一首の歌のちがいを考えてみよう。原歌の「田子の浦」であれば、「ゆ」は「ヨリ、カラ」の意の格助詞で、田子の浦を通じて、の意と解されるが、「田子の浦に」では、静止したイメージになる。また末句は、原歌の「雪は降りける」では、見上げた山頂に雪が真白に降り積もった状態を詠嘆したことになるが、「降りつつ」では、今しも山頂に雪が降り続けていることになる。「新古今集」で冬の歌とされているのは、このように、雪が今まさに降っていると解釈したためであろう。冬の冴え渡った青空を背景にした、真白な富岳を仰いでいるのである。「伊勢物語」九段、いわゆる東下りの段で在原業平と思われる「男」が見やつた五月つごもりの富士の山の、「時知らぬ山は富士の嶺いっとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」といった姿とはまた別の、冬の富士の厳しい美しさがある。

おくやま もみぢふ
奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の

声聞く時ぞ秋は悲しき

猿丸大夫



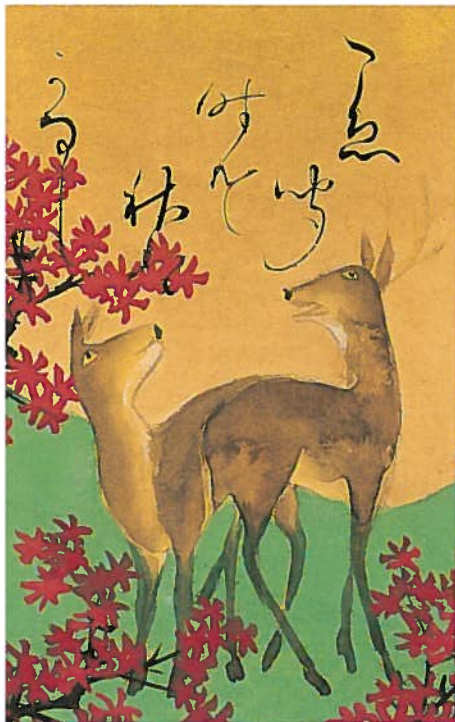
奥山で、紅葉を踏み分けて鳴く鹿の声を聞くととき、秋はものがない季節と思われるよ。

◇古今和歌集 卷四・秋上・二一五 詞書「是貞親王の家の歌合の歌（読人しらす）」

猿丸大夫 生没年未詳。實在の疑わしい伝説的人物である。「古今集」真名序に六歌仙の一人大友黒主を論じて「大友黒主之歌、古猿丸大夫之次也」とあり、黒主よりも古の人と考えられていたらしい。天武天皇の皇子弓削皇子の異名とする説もあった。三十六歌仙の一人。「猿丸大夫集」は、後代のものであろう。勅撰集には入集していない。

■奥山に 「奥山」は人里離れた山。「深山」に同じ。 ■紅葉 楓の紅葉とも、秋の黄葉とも解される。「古今集」の歌の排列から見ると、「鹿」と「秋の黄葉」を取り合せた仲秋の歌と解される。

■鹿 妻を求めて鳴く牡鹿と考えられる。 ■声聞く時ぞ秋は悲しき 「ぞく悲しき」の「ぞ」は強意の係助詞。係り結びにより、「悲しき」と連体形になる。「秋は」の「は」は係助詞で、他と区別して指し示す意を表す。



おく山耳やまに

紅葉もみぢ

鳴し閑なぐりか
の

ふ三分みわけ

こゑ

聞きく

時楚ときそ

秋盤あきは

可奈しかな

支え

紅葉を踏み分けるのは「我」か「鹿」か

この歌の解釈上の問題点は、「紅葉踏み分け」の主語が、歌い手である「我」か「鹿」かということである。『新撰万葉集』において、この歌に、「秋山寂々として葉零々たり、麋鹿の鳴く音数処に聆ゆ 勝地尋ね来つて遊宴するところ 朋無く酒無く意は猶し冷し」という漢詩訳が配されていることから、「奥山の紅葉を踏みわける人」が、鹿の声をきいて悲哀を感じている、という解釈もできる。しかしまた、歌の調べに即して詠むと、「紅葉踏み分け」は「鳴く鹿」に掛かっていくのが自然である、とも考えられるのである。ここでは、後者の「鹿が紅葉を踏み分ける」という解釈に従った。秋色に包まれた秋の深山、散り敷いた紅葉を踏み分けて、鹿が鳴いている。秋は、鹿の妻恋いの季節であり、その鳴く音には哀切な響きがこもる。その声を聞くと、秋の悲愁の思いが、ひとしお身にしみるのである。鹿の映像という視覚的要素と聴覚的要素とが、「秋は悲しき」という主情的な詠嘆によって一つに結びつけられている。

かかさぎ
鵲の渡せる橋に置く霜の

白きを見れば夜ぞ更けにける

ちゅうなごんやかもち
中納言家持



かかさぎ
鵲が翼を連ねて天の川に渡した橋に、置いた霜が真白
なのを見ると、ああ夜が更けたのだなあと思われる。

◇新古今和歌集 卷六・冬・六二〇 詞書「題しらず」

中納言家持 大伴家持 養老元(七二七)年、ある

いは養老二年誕生。延暦四(七八五)年八月二十八日没。
六十八歳または六十九歳。大納言旅人の息子。中納言從
三位に至る。死後、藤原種継暗殺事件に関わっていたと
見なされて除名されたが、そののち復位した。『万葉集』
の編纂に深く関わり、自身同集第四期の歌人として、長
歌四十五、短歌三百九十二首、連歌一句を残す。三十六
歌仙の一人。『三十六人集』のうちの『家持集』は家持の
作以外の読人しらずの歌を多く含んでいる。勅撰集は
『拾遺集』初出。

■鵲の渡せる橋 「かささぎ」は鵲、カラス科の鳥。「鵲の渡せる
橋」は、七夕の夜に鵲が羽翼を連ねて天の川に橋をかけ織女を渡
すという、中国の書『白孔六帖』に見える古伝承にもとづく。

■更けにける 「更け」は下二段動詞の連用形。「に」は完了の助

かさ、さぎの

渡わた

世留せりゅう

者はしに

置霜おきしも

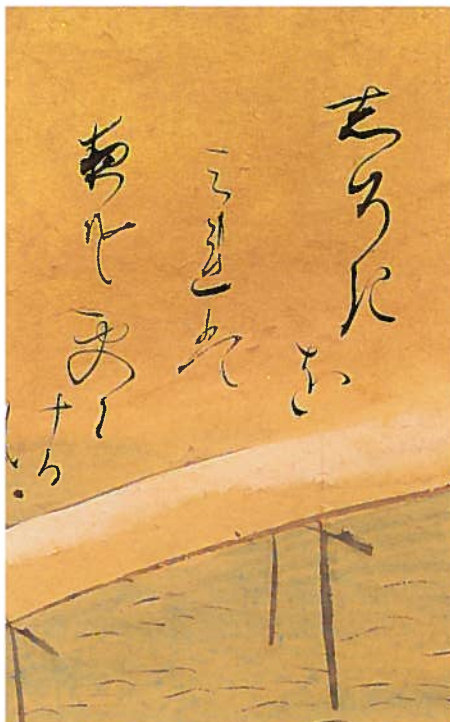
能の

志しろ起き

を

夜楚よそ更み爾れは

ける



動詞「ぬ」の連用形。「ける」は詠嘆の助動詞の連体形。係助詞「ぞ」の結びである。

天上の「鵲の橋」の幻視

七月七日の夜、すなわち七夕に牽牛けんぎゅうと織女しよくじよとが天の川で会う時、かささぎがその翼で天の川に橋をかけ織女を渡すといひ、これを烏鵲橋かかさぎばし、鵲の橋かかさぎと称した。「鵲の橋」は、多くの和歌に詠まれ、この歌にも、

かささぎのはねに霜降り寒き夜をひとりぞ寝ぬる君を待ちかね
(古今六帖ここんろくじょう 第五・ひとりね 二六九八)

のような類歌がある。七夕伝説が人々に愛されたのにつれて、「鵲の橋」も和歌の世界に定着したのである。さて、宮中関係のことばには、「雲の上」「月卿雲客げいけいうんかく」など天上にちなむ呼称が多いが、「鵲の橋」も、宮中の御階みはしの意にも用いられる。この歌の場合も、直接には宮中の御階を見ながら、天空の鵲の橋を幻視したと考えられる。もとより、これを大伴家持の作とするのは「家持集」に見出されることにもとづくのであり、現在では彼の作と見なすことはできない。「大和物語」一二五段に、壬生忠岑みぶのただみねが詠んだ次の歌がある。

かささぎの渡せる橋の霜のうへをよはに踏み分けことさら
にこそ

あま
 天の原ふりさけ見れば春かすが日なる

みかさ
 三笠の山に出でし月かも

あべ
 安倍仲麿



大空を振り仰いで見ると、月が見える。ああ、あれはその昔、故国日本の春日にある三笠の山に出るのを眺めたのと同じ月かなあ。

◇古今和歌集 卷九・巖旅・四〇六 詞書「もろこしにて月を見てよみける」

あべのなまろ
 安倍仲麿 大宝元(七〇二)年〜宝龜元(七七〇)年
 一月。唐において客死した。七十歳。船守の息子。遣唐留学生として、養老元(七一一)年入唐し、玄宗皇帝に仕え、朝衡(晁衡)と呼ばれた。李白、王維らの詩人も親交があつた。その詩は『文華秀麗集』に収められている。勅撰集は『古今集』初出。この歌のほか『続後拾遺和歌集』に一首入集するが、これは真作かいなか疑問である。

■天の原 広大な天空の意。 ■ふりさけ見れば 「ふりさけ」は「振り放け」で、振り向いて遠くを望む意。 ■三笠の山 大和の春日にある三笠山。「春日」は大和国の歌枕。「三笠の山」は現在の奈良市の山。「御蓋山」とも書き、「春日山」ともいう。標高二九三メートル。 ■出でし月かも 「かも」は疑問の意を含んだ詠嘆の助詞。平安時代には「かな」にとって代られ古語と意識されるようになった。

天あまの者はら

ふり

さけ

三連みれはハ

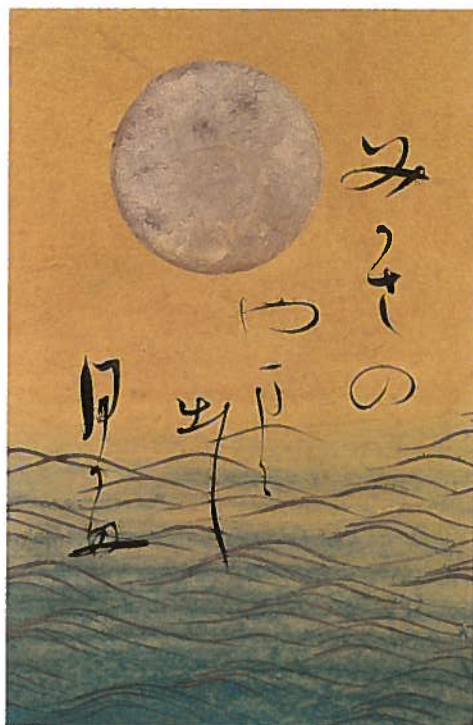
春日かすがが
な類なる

み可かさの

や万爾まに

出いでし

月可つきかも
母も



唐土の月、大和の月——望郷の歌

この歌は『古今和歌集』巻九・葛旅歌の巻頭歌である。「もろこしにて月を見てよめる」という詞書ことばがきのもとにこの歌を掲げ、次いで長文の左注さだめがある。「この歌は、昔仲麿なかつまろを唐土たうどに物習はしにつかはしたりけるに、あまたの年を経て、え帰りまうでござりけるを、この国よりまた使ひまかり至りけるにたぐひて、まうできなむとて出で立ちけるに、明州めいしゅうといふ所の海辺にて、かの国の人むまのはなむけしけり、夜になりて月のいとおもしろくさし出でたりけるを見てよめるとなむ、語り伝ふる。」仲麿が帰国の途に就く際、唐土明州の海辺で唐の人々が送別の宴をした時、おりから昇ってきた月を見て詠んだというのである。「三笠山」は春日大社の東側にあり、平城京へいじょうの東に位置するため、「春日なる三笠の山に月も出でぬかも佐紀山さきやまに咲ける桜の花の見ゆべく」（『万葉集』・巻十・一八八七）など、東の空に出る月とともに詠まれることも少なくなかった。平城京の官人であった仲麿が唐土においても、海上に出た月を見て、とつさに「春日なる三笠の山に出でし月」を思い浮かべたのは、極めて自然である。異国にあって、故国の人も眺めているに違いない同じ月を仰ぎ見、澎湃ほうはいと起こった望郷の思いを歌って、永遠に新しい。

わが庵いほは都の辰巳たつみしかぞ住む
世をうち山と人はいふなり

喜き撰せん法ほ師し



わたしの草庵そうあんは京の都から東南の方角にあつて、このように心安らかに住んでいる。それなのに、世を憂うく思しう宇治山うじやまと人は言いつていようだ。

◇古今和歌集 卷十八・雑下・九八三 詞書「題しらず」

喜き撰せん法ほ師し 生没年未詳。「古今集」仮名序にも「言

葉かすかにして、初め終り確かならず。……よめる歌多く聞えねば、かれこれを通はしてよく知らず」とあり、伝説的人物である。歌学書「喜撰式」(倭歌作式)の著者とされるが仮託であろう。勅撰集は「古今集」初出。ただし「玉葉集」の一首は疑わしい作である。

■都の辰巳 「都」は京の都。「たつみ」は「辰巳」(巽)と書き、東南の方角をいう。 ■しかぞ住む 「しか」は副詞「然」で、そのように、とか、このようにの意。「鹿」を響かせているという説もある。 ■世をうち山 「世を憂う(し)」から「宇治山」へと続けた掛詞。「宇治山」は山城国、現在の宇治市東部の山。標高四一六メートル。この歌などから「喜撰山」とも呼ばれる。 ■人はいふなり 「なり」は伝聞の助動詞。終止形(ラ変活用の語の場合)は連体形)に接続する。

わ可い本盤都

の多徒三

志可楚

須無

よを

う知

山と

人は云

奈里



宇治山の閑居

第三句「しかぞ住む」に問題がある。「このように住んでいる」とは、どのような様子をいうのだろうか。古来、二通りの解釈がある。一つは、「心安らかに住んでいる」という説。宇治山を世間の人々は「世を憂く思う山」というが、自分はそのような取り沙汰とは無縁に、悠然と出家生活を営んでいることを表明した歌、と解するのである。もう一つは、「このように憂く、わびしく住んでいる」という説で、近世の歌人、香川景樹らの唱えたものである。ここでは、通常行われている前者の説に従って口語訳した。

喜撰の住みかの跡は、宇治の御室戸の奥にあつたらしい。鴨、長明の歌学書『無名抄』には、「家はなけれど、礎など定かにあり」といい、歌人必見の場所である、とする。藤原為家（定家の息子）の息子、慶融法眼に、

宇治山の昔の庵のあと訪へば都のたつみ名ぞふりにける

（『玉葉集』雑三 二二五四）

という歌がある。彼は庵の跡を訪ねてみたのであろう。

花の色は移りにけりないたづらに
わが身世にふるながめせしまに

小野小町



美しかった花の色はむなしくあせてしまったのですね。長雨が降りつづいていたあいだに。わたしの容色も衰えてしまったこと。むなしく世を過ごして、物思いにふけていたあいだに。

◇古今和歌集 卷二・春下・一一三 詞書「題しらず」

小野小町 生没年未詳。小野氏の出で出羽国の人という伝えがあるが、明らかではない。仁明天皇のころの人か。小野貞樹・安倍清行や文屋康秀らと歌の贈答を交わしている。美女だが驕慢であつたという伝説は、弘法大師に仮託された『玉造小町辻衰書』の記述に基づく。三十六歌仙の一人。家集『小町集』がある。勅撰集は『古今集』初出。

■花の色は移りにけりな 「花の色」に自身の容色をなぞらえているという説と、そのような寓意はないという説と、両説がある。ここでは前者に従う。「移りにけりな」の「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「けり」は回想の助動詞、「な」は詠嘆の終助詞。■

いたづらに 形用動詞「いたづらなり」の連用形。むなしく、無駄に。■わが身世にふる 「ふる」は、「降る」と、時を過ごす

意の「経る」の掛詞。「経る」は、下二段動詞「経」の連体形。し

者那の色

盤は

うつ里爾

けりな

い多
徒らに

我身

よ爾

布る

な可め

せし

ま兒



まに「ながめ」は「長雨」と、じつと見つめて物思いにふける意の「眺め」の掛詞。この「長雨」は、いわゆる菜種梅雨。「せし」の「せ」はサ変動詞の未然形。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。

人生の無常を歌う名歌——美の悲しみ

「古今集」では、春歌下の「散る花の歌群」の中に入る歌だが、作者小野小町のイメージとあいまって、花の色のうつろうことに自身の容色の衰えを重ね、嘆息した歌として読まれている。「降る」と「経る」、「長雨」と「眺め」の掛詞も、その解釈を支えている。第三句「いたづらに」は、文法的には第三句以下に掛かると見るのが適当だが、倒置的に第二句に掛かるとも見られる、遊離性の強い句である。春の長雨に降りこめられるうちに色あせてしまった花も、物思いに費やされてしまった若き日々も、今はむなししいものとして感じられるのである。

春立ちて我身ふりぬるながめには人の心の花も散りけり

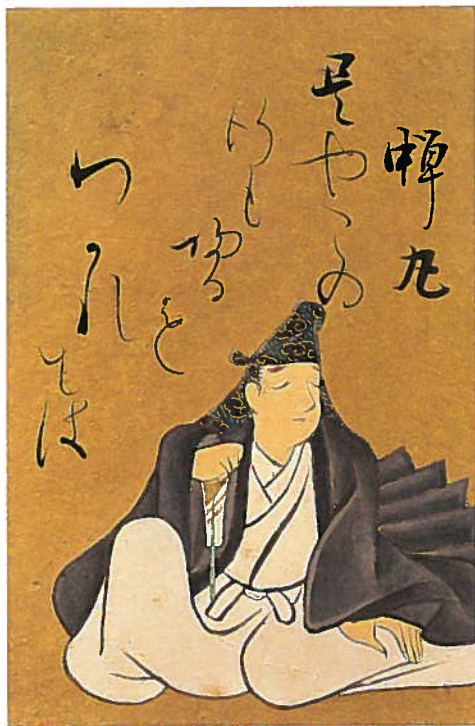
という類歌がある。

〔後撰集〕春上 二二 読人しらす

これやこの行くも帰るも別れては
知るも知らぬもあふ坂の関

蟬せみ

丸まる



これがまあ、旅立つ人も旅から帰ってくる人も、知っている同士も知らない人同士も、逢っては別れ、別れては逢う、その名も逢坂の関なのだなあ。

◇後撰和歌集 卷十五・雑一・一〇八九 詞書「逢坂の関に庵室を作りて住み侍りけるに、行きかふ人を見て」

蟬丸 生没年未詳。『今昔物語集』『江談抄』『無

名抄』『平家物語』等に語られるが、実像の明らかでない、伝説的人物である。『無名抄』では良岑宗貞(遍昭)の出家以前の俗名)が和琴を習ったとし、『今昔物語集』等では村上天皇時代の源博雅が琵琶の秘曲を伝授してもらうために通つたと伝える。いずれの伝承でも逢坂の関のほとりに住み、死後、関の明神として祀られたという。勅撰集は『後撰集』初出。

■これやこの これがまあ、あの…であるのか、という感嘆の意を表す。この句があると末の句はしばしば名詞止めになるとされる。『これや』の「や」は疑問の意を含む詠嘆の係助詞。■行くも帰るも 「行く」「帰る」は連体形で、下に「人」が省略されている。「も」は並列の係助詞。「知るも知らぬも」も同様の語法。

■知るも知らぬもあふ坂の関 「知るも知らぬも逢ふ逢坂の関」

是これやこの

行ゆくも

帰かへる

毛も

わ可かれ

ては

知しるもし

らぬ

母も

あふ坂さかの

関せき



の関せき」は、山城やましろの国と近江おうみの国との境にある逢坂山あふさかに設けられていた古関である。鈴鹿すずかの関・不破ふわの関とともに三関の一つ。

逢あえば別わかれあり、行きかう人生じんせいの歌——ことばあそび

「行く、帰る」「知る、知らぬ」「別れては、逢う」と、一首の中に対立する言葉を三組も組み合わせた、凝こった作りの歌なのだが、複雑な感じはしない。逢坂あふさかの関は、古来、京から東海・東山・北陸へと通じる要衝ようしゅうであった。そこで展開される、会う者もやがて別れ、別れた者もいずれまためぐり会う人間模様は、まさに人生の縮図の名にふさわしい。『源氏物語』関屋せみやの巻にも、夫の任国ひたらちの常陸ひたちから上京してきた空蟬うつせみと石山詣いしやまゆきのために京を出て、関山を越える源氏とが逢坂の関で邂逅かいじゅうすることが語られている。この歌は、こうした関のあり方を、軽妙な声調にのせて、飄々ひょうたうと詠み下し、「逢坂の関」という体言止たいげんどめで歌い終えている。「これやこの」という初句にも、口頭語的な軽やかさが感じられる。

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと
人には告げよ海人の釣舟

参議 高村 篁



あの篁は、大海原のたくさん島々を目ざして船を漕ぎだしていったと、親しい人には告げておくれ、漁師の釣舟よ。

◇古今和歌集 卷九・羈旅・四〇七 詞書「隠岐の国に流される時に、舟に乗りて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける」

参議 高村 小野篁、延暦二十一年(八〇二年)仁寿二(八五二)年十二月二十二日。五十一歳。参議岑守の息子。参議従三位に至り、野相公・野宰相と呼ばれる。承和元(八三四)年遣唐副使に任ぜられたが、遣唐使藤原常嗣と船を換えられたことを憤って乗船を拒んだため、隠岐へ配流された。しかしながら、朝廷はその才を惜しんで、同七年二月十四日、篁を召還した。「野相公集」という漢詩集があつたらしいが、現在伝わらない。また「篁集」(「篁物語」)は後人の作である。勅撰集は「古今集」初出。

■わたの原 大海原。「わた」は海の古語。 ■八十島かけて「八十島」は多くの島々。「八十」は「八十神」など数の多いことをいう。「かけて」は、心にかけて、めざして、の意。 ■漕ぎ出でぬ

和^わ田^たの者^はら

八十嶋^{やそしま}

可^かけ天^て

こき出^{いで}ぬ

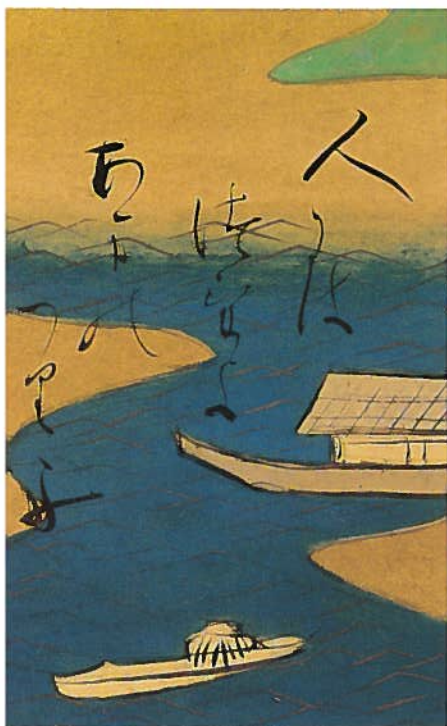
と

人^{ひと}爾^には

徒^つ気^けよ

あ万^ま能^の

つ里^り舟^{ふね}



と 「ぬ」は完了の助動詞の終止形。■人には告げよ海人の釣船。「は」は他と区別して取り立てていう係助詞。海の景物としてよく詠まれる。「海人の釣舟」に、呼びかけているかたちである。

はるかなる配所への旅立ち

作者小野篁が、勅勘に触れて隠岐に流される時の歌である。隠岐流罪は、陸路をとらず、難波から船に乗り、瀬戸内海・関門海峡を通って、日本海を北上したらしい。今まさに出航しようとする眼前には、茫洋とした海原があり、かなたに島々が点在する。大海の波間には、小さな釣舟がはかなく揺れている。篁はその釣舟に、伝言をたくす。「自分は、海のかなた沢山の島々をめざして漕ぎ出していくのだ」と。未知の世界へ一人旅立つ者の不安と孤独感の投影された歌だが、不思議に、湿っぽい感じはしない。豪快なしらべの歌である。この歌に先立つ類歌として、次のようなものをあげることができる。

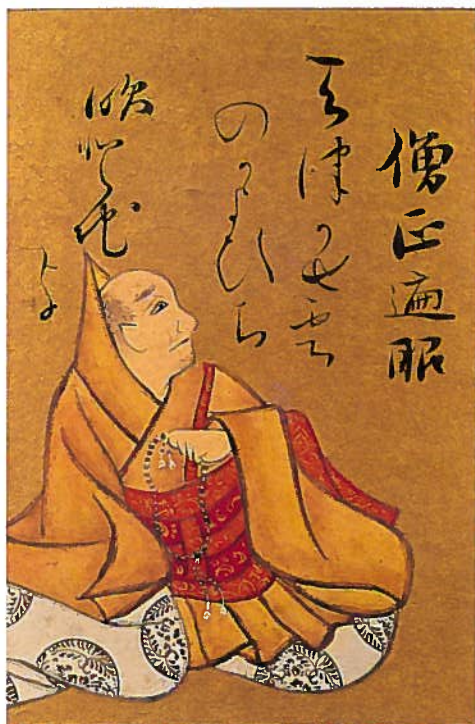
海原を八十島隠り来ぬれども奈良の都は忘れかねつも

〔万葉集〕卷十五・三六一三 遣新羅使人

あま
天つ風雲の通ひ路吹きとちよ

をとめ
乙女の姿しばしとどめむ

そう
僧正
じゃう
遍昭



空を吹く風よ、雲の中の通り道をふさいでおくれ。天に昇つていこうとする乙女の姿をしばらくとどめておこうと思うので。

◇古今和歌集 卷十七・雑上・八七二 詞書「五節の舞姫を見てよめる（良岑宗貞）」

遍昭 弘仁七（八一六）年〜寛平二（八九〇）年

一月十九日。七十五歳。「遍昭」と書くこともある。俗名は良岑宗貞、大納言安世の息子。安世は桓武天皇の御子で良岑姓を与えられた。宗貞は左近衛少将に任ぜられ、仁明天皇の藏人頭に補されたが、嘉祥三（八五〇）年三月二十一日天皇の崩御後、同二十八日出家した。天台宗の円仁・円珍らを師として、僧正に至った。元慶寺座主となり、花山僧正と号せられる。仁和元（八八五）年十二月十八日には仁寿殿で七十賀を賜った。三十六歌仙。「遍昭集」は他撰で、物語的部分も含まれている。勅撰集は「古今集」初出。

■天つ風 空吹く風よ。「つ」は格助詞「の」の古い形。■雲の通ひ路吹きとちよ 「雲の通ひ路」は、雲の切れ間の天上へ通じる道。ここでは天女（舞姫）が天上へ帰っていく道。■しばし

あまつか
天津可せ雲

の可よひち

かきと
吹登地

よ
与

おと免

の

す
須か多

し
志はし

と
登

めむ

とどめむ 「しばし」は副詞。もうしばらくのあいだ。「む」は意
志の助動詞。

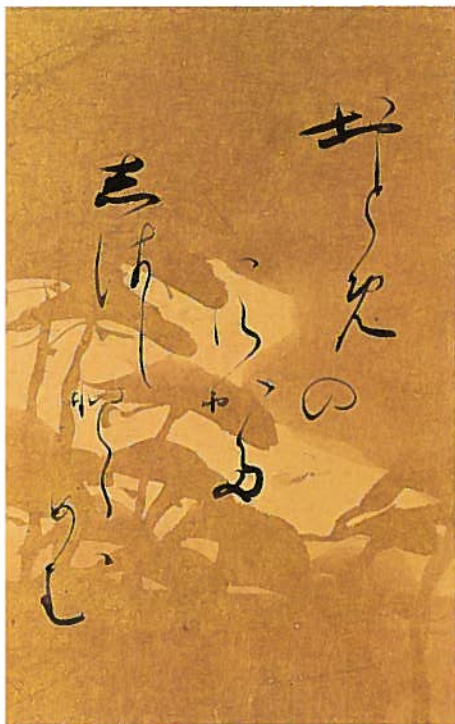
天上の舞姫への憧れ

五節の舞姫を、天女に見立てた歌である。「五節」は、新嘗
会や大嘗会に際し舞姫が舞う公事で、例年、陰曆十一月、中
の辰の日に行われた。これは、天武天皇が吉野の宮で琴を弾
いたとき、天女が舞い降りて袖を五度翻したという故事に基
づくものである。舞姫には、公卿・国司の家の姫四人が選ば
れ、その美しい姿を見ることは、人々の格別の喜びであった。
一首は、空吹く風を擬人化し、これに呼びかける形で始ま
り、美しい天女（舞姫）の姿を、もうしばらく地上にとどめ
ておきたいと歌う。舞姫の美しさを、幻想的な天女の舞い姿
を想像させることを通して、表現している。風に呼びかける
手法は、遍昭のやはり在俗時の作である、

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

〔古今集〕春下 九一 良岑宗貞

の歌にも見られる。



筑波嶺の峰より落つるみな川の
恋ぞ積もりて淵となりぬる

陽成院



筑波山の峰からしたたり落ちる滴が集まって水無川の淵となる、そのようにあなたを恋いそめた心が積もり積もって、こんなにも深いものになったのです。

◇後撰和歌集 卷十一・恋三・七七六 詞書「釣殿の御子につかはしける」

陽成院 第五十七代の天皇。貞観十(八六八)年(天曆三(九四九)年五月二十九日。八十二歳。諱は貞明。清和天皇の第一皇子。母は二条后藤原高子(長良の娘、基経の妹)。「百人一首」二十番歌の作者元良親王はその皇子である。常軌を逸した行動が多かったと伝えられ、そのためか、関白基経によって、元慶八(八八四)年二月四日廃されて、仁明天皇の皇子時康親王(光孝天皇)に譲位した。勅撰集は「後撰集」にこの一首が採られているのみ。

■筑波嶺 常陸国(現在の茨城県)にある筑波山。山頂は、西の男体、東の女体の二峰に分かれている。古代の歌垣の場として知られる。 ■みな川の川 「男女川」「水無川」の字をあてる。筑波山から流れ、桜川となり龜ヶ浦に注ぐ。 ■淵 水の深くよどんだところ。ここでは、恋の深さをたとえる。(逆に浅いところは「瀬」という。) ■なりぬる 「なり」はラ行四段動詞の連用形。

徒く者ねの

峯より

落類

三奈の川

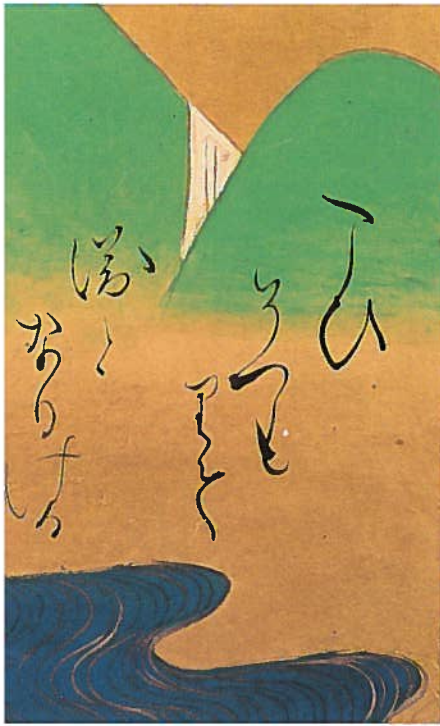
こひ

曾つも

淵と

里天

なりける



深々とたたえられた恋の心

詞書に見られるように、陽成院が、「釣殿の御子」すなわち、光孝天皇（百人一首十五番歌の作者）の第三皇女綏子内親王に贈った歌である。峰からしたたり落ちる滴が細い水脈となり、やがて川となって、気がついたときには深い淵になつていたという。そのように、自分の恋も積もり積もつて、今や淵のように深々と湛えられている、という歌である。これに似た歌として、古来「万葉集」の次の歌が指摘されている。

筑波嶺の岩もとどろに落つる水世にもたゆらにわが思はな
 く
 〔万葉集〕 卷十四 三三九二・東歌

ただし、陽成院がこの歌を知っていたかどうかは、さだかではない。「釣殿の御子」綏子内親王は、のちに陽成院の妃となつたが、院より二十四年も早く、延長三（九二五）年に没したという。

陸奥みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに
乱れみだれそめにしわれならなくに

河原左大臣かはらのさだいじん



陸奥名産みちのくの信夫しのぶもぢぢりぢりが乱れているように、あなた以外の誰だれのために思い乱れようとするわたしではないのに。他ほかならぬあなたのために心乱れているのです。

◇古今和歌集 卷十四・恋四・七二四 詞書「題しらず」

河原左大臣かはらのさだいじん 源融みなもととのとむら 弘仁十三こうにん(八二二)年かんげ寛平七かんへい(八九五)年八月二十五日。七十四歳。嵯峨天皇の皇子だが、源の姓を与えられて臣下となり、左大臣従一位に至った。河原院を営んだので河原左大臣と呼ばれる。陽成天皇が藤原基経によつて廃された際、皇位に野心を抱いていたとか、のち宇多院が京極御息所を伴つて夜、河原院を訪れたとき、融の亡霊が現れたなどという説話が伝えられている。勅撰集は『古今集』初出。

■陸奥 現在の東北地方東半部。 ■しのぶもぢずり 奥州産

の摺り模様すりの布のこと。忍ぶ草で摺り染めたからとも、信夫しのぶの郡ごほの産だからともいう。その模様の乱れていることから、「乱れ」を導き出す。 ■乱れそめにし 「伊勢物語」や「百人一首」の別

系統の写本では「乱れそめにし」のかたちになるが、古今集では「乱れむとおもふ」のかたちになる。 ■われならなくに わた

しではないことなのに。「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形。「なく」は、打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」に接尾語「あ

みちのくの

忍ふ

もち

す里

誰ゆへ耳

見堂連

所め爾し

我なら

奈九兒



く」がついて母音が変化したかたち。「あく」がついた語は体言化する。このような語法をク語法という。「に」は「:のに」と逆接確定条件を表す接続助詞。

陸奥の風情に寄せる恋

『古今和歌集』のほか、『伊勢物語』の初段にも見える広く知られた歌である。一首は、初句「陸奥の」から同国の地名「信夫」を起こし、さらに「信夫もぢずり」と続き、ここまでは、「たれゆゑに」をとびこえて「乱れ」にかかる序詞となっている。この序詞は、恋に思い乱れる心模様を具象化するとともに、遠くはるかな陸奥の情緒をも歌の中に持ちこんでいる。陸奥の塩釜の風情を愛して、これを模した庭を邸宅に作らせたといい河原左大臣源融に、ふさわしい歌である。

君がため春の野に出てて若菜摘む
わが衣手に雪は降りつつ

光孝天皇



あなたにさしあげようと、早春の野辺に出て若菜を摘むわたしの袖に、雪はしきりに降りかかっていました。

◇古今和歌集 卷一・春上・二一 詞書「仁和の帝親王におましましける時に、人に若菜たまひける御歌」

光孝天皇 第五十八代の天皇。天長七（八三〇）年仁和三（八八七）年八月二十六日。五十八歳。小松の帝とも称せられる。諱は時康。仁明天皇の第三皇子で、母は藤原総継女沢子。元慶八（八八四）年、陽成天皇を廃した藤原基経に擁立されて即位した。家集「仁和御集」が「代々御集」の中に収められている。勅撰集は「古今集」初出。

■若菜 早春の野に生える若草のうち食用になるもの。これを食べると邪気を払い病気を除くとされた。 ■わが衣手 「衣手」は着物の袖のこと。 ■雪は降りつつ 「つつ」は反復継続の接続助詞。この雪は春になってから降る淡雪である。



川む

出天わ可奈

我ころも

手耳

の野に

ゆき盤

きみ可為春

ふりつ

徒

手づから摘んだ若菜——早春の香氣——

『古今集』の詞書によれば、光孝天皇が即位する以前の早春、人に若菜を贈った時の歌である。人に物を贈るとき、それにふさわしい歌を添えるのが当時の習慣であった。この歌も、「あなたのために、私自身が野に出て摘みとった若菜です。どうぞご賞味下さい。」という挨拶の意をこめたものである。もとより、親王その人が野に出て摘んだわけではなかったろうが、若菜とともに、早春の野の香氣や贈る人の厚情が届く歌であるといえよう。贈られた「人」が誰であるかは不明で、古来、親交の深かった藤原基経であるとも、寵愛の女性であるとも考えられている。後者であるとすれば、細やかな愛情のこもった歌である。「若菜」は、春の訪れを知らせる景物で、『古今集』にも、

春日野の飛火の野守出でて見よいまいく日ありて若菜摘みてむ
 (『古今集』春上一八 読人しらず)

のような歌がある。また『万葉集』の

君がため山田の沢にゑぐつむと雪消の水に裳の裾ぬれぬ

(『万葉集』卷十一 一八三九)

にも、この歌の表現に通うものがある。

立ち別れいなばの山の峰みねに生おふる
まつとし聞かば今こ帰り来む

中納言行平
ちゆうなごんゆきひら



あなたにお別れして因幡国いんぱんこくにに行つてしまつても、その国の稲羽山の峰かみねに生はえている松、その松のようにわたしのことを待っていると聞いたならば、すぐにでも帰つて来ましよう。

◇古今和歌集 卷八・離別歌・三六五 詞書「題しらず」

中納言行平 在原行平。弘仁九(八一八)年(寛平五(八九三)年七月十九日。七十六歳。平城天皇の皇子阿保親王の息子。業平(百人一首)一七番歌の作者)の異母兄かと考えられている。『古今和歌集』雑下に、「田村の御時に、事にあたりて津の国の須磨といふ所に籠り侍りけるに、宮の内に侍りける人につかはしける」として、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」(九六二)とあるように、沈淪したこともあつたらしいが、中納言正三位に至っている。現存最古の歌合である『在民部卿家歌合』の主催者でもある。勅撰集は『古今集』初出。

■いなばの山 「いなばの山」は因幡(鳥取県)の稲羽山。あ
るいは一般的に因幡の国の山のことともいう。「往なば」(ナ変動
詞「往ぬ」の未然形に仮定をあらわす接続助詞「ば」がついた形)

立ちわか
れ

い
奈者なは

の山やま
濃の

三み
ね耳に

生類おふる

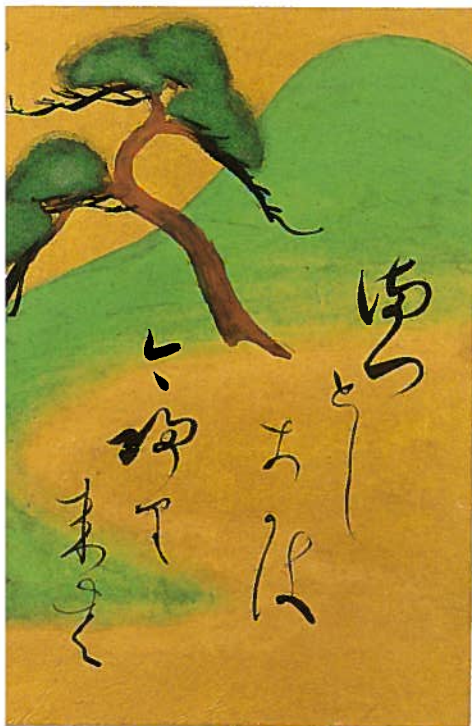
満ま
つ

とし

支可きか
は

今いま
帰里かへり

来無こむ



との掛詞かけことば

■まつとし聞かば

「まつ」は「松」と「待つ」の

掛詞。「し」は強意の副助詞。

■今帰り来む 「今」はすぐに、

じきに、の副詞。「来」は力変動詞の未然形。「む」は意志の助動

詞の終止形。

再会を誓う―「松」と「待つ」の掛詞

行平が因幡守になつたのは、斉衡二(八五五)年のことである。この歌は、赴任する際見送りの人々の前で詠んだ別れの挨拶と考えられている。一首は、「往なば」と「稻羽」、「待つ」と「松」の二つの掛詞を用い、「立ち別れ往なば」と続いたあと、「稻羽(あるいは因幡)の山の峰に生ふる松」という任国因幡の景物を詠みこみ、さらに「まつとし聞かば」と自らの心情を歌いつく形になつている。遠国赴任に際し、やがて帰来し再会するという願いを詠じた歌である。謡曲「松風」で、この歌が効果的に用いられている。

ツレ立ち別れ。いなばの山の峰に生ふる、待つとし聞かば、いま帰り来ん。シテそれは因幡の、遠山松、地これは懐かし、君ここに、須磨の浦曲の、松の行平、立ち帰り来ば、われも木陰に、いざ立ちて寄りて、磯馴れ松の、懐かしや。

ちはやぶる神代も聞かず竜田川
 からくれなゐに水くくるとは

ありはらのなりひらのあそん
 在原業平朝臣



いろいろな不思議なことがあったという神代にも聞いたことがないよ。竜田川の水をこのようにからくれないにくくり染めにするということは。

◇古今和歌集 卷五・秋下・二九四 詞書「二条の後の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に竜田川にもみぢ流れたるかたをかけりけるを題にてよめる」

在原業平朝臣 天長二（八二五）年〜元慶四（八八

〇）年五月二十八日。五十六歳。阿保親王の息子、母は桓武天皇皇女伊都内親王。行平の異母弟と考えられる。右馬頭などを経て、左近衛権中将、従四位上に至り、「在五中将」と称された。清和天皇の後藤原長良の娘、高子（二条の后）、文徳天皇の皇女伊勢斎宮恬子内親王などと恋をし、また東下りの旅をしたといわれるが、これを伝説ないしは創作とみる立場もある。「伊勢物語」の主人公とされる。三十六歌仙の一人。家集『業平集』は他撰。『古今集』初出。

■ちはやぶる 「神」にかかる枕詞。 ■神代も聞かず 人の世

はもちろん不思議なことの多かった神々の時代にあっても、の意。

「神代」は単に遠い昔の意ではない。 ■竜田川 大和国（現在

千早振 ちはやぶる

神代も かみよ

支可春 きかす

龍田川 たつたかは

から

くれ

なるる に

水具、類 みづぐ

と盤 は



の奈良県生駒郡を流れる川。紅葉の名所。 ■からくれなる大陸から渡来した紅。真紅。 ■水くくるとは「くくる」は括り染めにする意。今の絞り染め。川の面を布に見立て、紅葉の流れる様を「括り染め」といった。「とは」で「聞かず」に返っていく倒置法である。

絢爛たる紅葉の見立て

『古今集』の詞書のとおり、屏風の絵を見て詠んだ歌である。屏風・衝立の類には、中国風の唐絵が描かれ、漢詩が添えられるのが通例であったが、九世紀半ばから、日本風の大和絵と和歌に変わりつつあった。この場合も、紅葉の名所竜田川を描いた和風の屏風だったのであろう。『伊勢物語』一〇六段では、「昔、男、親王たちの逍遙したまふ所にまうでて、竜田川のほとりにて」詠んだと語られている。

この歌は、在原業平の数々の歌の中で、必ずしも代表作とはいいがたい。しかし、水面に紅葉の流れゆく図柄を「くくり染め」と一言でとらえ、二句切れ・倒置法で詠んだ手法は、華麗、かつ大胆であり、『百人一首』の中でも印象的な一首であらう。

すみ
住の江の岸に寄る波よるさへや
かよ
夢の通ひ路人目よくらむ

ふぢはらのとしゆきのあそん
藤原敏行朝臣



住の江の岸边に寄る波、その「寄る」ではないが、あ
の人は、夜に見る夢の中の通り路までも、人目を避けて、
逢つてくださらないのだろうか。

◇古今和歌集 卷十二・恋二・五五九 詞書「寛平御
上皇さまのあやうなあわせ」
時后宮の歌合の歌」

藤原敏行朝臣 生年未詳。一説に昌泰四(九〇二)年
没。藤原南家真作流、按察使富士麿の息子。母は紀名虎
の娘。右兵衛督従四位上に至つた。能筆で、また好色で
あつたという説話が伝えられている。三十六歌仙。家集
『敏行集』がある。勅撰集は『古今集』初出。

■住の江 摂津国(今の大阪府)の歌枕。大阪市住之江区を中心
とする一帯。住吉大社があり、岸边の松原が有名であつた。■
よるさへや 「さへ」は添加の意の副助詞。昼はいうまでもなく、
その上人に見とがめられる心配のない夜までも、の意。■夢の
通ひ路 夢の中で逢いに行く道。■人目よくらむ 「人目」は
周囲の人の見る目、人の視線。「よく」は下二段動詞の終止形。避
ける、憚るの意。「らむ」は、理由・原因推量の意の助動詞。恋人
が夢にもあらわれない理由を考えている。

す見^みの

江^え

乃^のきしに

よるなみ

予^よ留^るさへや

ゆ免^めの

乃^の

か余^よ飛^ひ

路^じ

人^{ひと}めよ具^ぐ

ら牟^む



夢の中でも逢えない人

— 寄せては返す波

女の立場に身を置いて、「忍ぶ恋」の嘆きを詠んだ歌である。上二句の「住の江の岸に寄る波」は、同音で「夜」を導き出す序詞であるが、美しい住江の岸に寄せては返す波の無限の繰り返しには、恋の物思いのイメージも見てとられよう。現実には様々な障害があつてなかなか逢うことができない、せめて夜の夢の中では逢いたいものなのに、それさえもかなわない、という苦しい恋の思いが、なめらかな調べにのせて歌われている。

夢においてさえ逢えないことを嘆く歌には他に次のようなものがある。

直に逢はずあるは諾なり夢にだに何しか人の言の繁けむ

〔万葉集〕卷十二・二八四八

うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくと見るがわびしさ

〔古今集〕恋三・六五六 小野小町

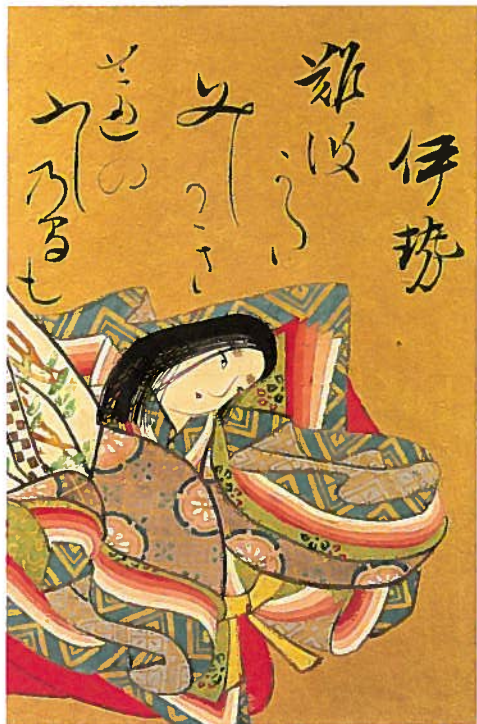
古人には、相手が自分を思ってくればその姿が夢に現れる、という考え方があつた。夢に現れないのは、相手の愛が不足している証拠ともなり、嘆きは一層深まるのである。

難波瀉短き蘆のふしの間も

逢はでこの世を過ぐしてよとや

伊勢

勢



難波瀉に生えている蘆の短い節と節との間—そのように短い時の間もお逢いしないでこの世を過ぐせよと、あなたはおつしやるのですか。

◇新古今和歌集 卷十一・恋一・一〇四九 詞書「題しらす」

伊勢 生没年未詳。天慶三(九三八)年以降の没か。大和守・伊勢守藤原繼蔭の娘。宇多天皇の后藤原温子(七条后)のもとに出仕した。温子の弟仲平との恋に破れたのち、父の任地大和国に身を寄せていたが、やがて再出仕し、宇多天皇に愛されて皇子を生んだ。この皇子は夭折したという。その後、天皇の皇子敦慶親王に愛され、女流歌人中務を生んだ。三十六歌仙の一人。家集「伊勢集」は、冒頭部分が日記的・歌物語的なかたちになっている。勅撰集は「古今集」初出。

■難波瀉 今の大阪湾の一部。蘆の名所であった。 ■短き蘆のふしの間 「短き」は「ふしの間」にかかる。蘆の節と節のあいだはつまついていて短い。アシはイネ科の多年草で「芦」「葦」とも書く。葦は中空で葭質の材となる。 ■逢はでこの世を 「で」は、未然形に接続する打消の接続助詞。「ずて」のつまつた語。

「世」こは吉や才の節と節の間をいう「よ」を對する。「吉」「節」

難波なみは

可多かた

みし可かき

蘆あしの

ふし乃のま間ま

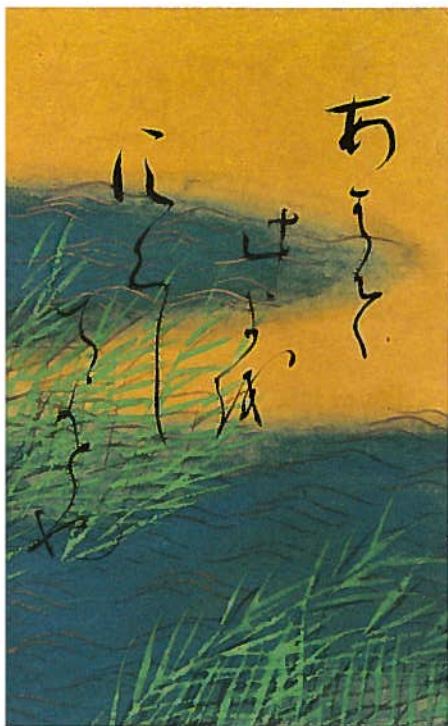
も

あ者はて天て

此このよ越を

須すくし

てよとや



「よ」は縁語。 ■ 過ぐしてよとや 「てよ」は完了の助動詞「つ」の命令形。「とや」は引用の格助詞「と」と疑問の係助詞「や」。

熱情を歌う女歌

「難波瀉短き蘆の」は、「ふしの間も」を起こす序詞である。初句の難波瀉から水辺の蘆へ、さらにその短い節の間へと、視点が次第に絞られ、微細なものに移っていき、この三句めまでが、「ほんの短い時の間」の比喩となっている。また「水辺の蘆」の姿には、女性の姿態のイメージも重ねることができよう。このような上三句を受ける下二句は、一転して激しく、「逢はでこの世を過ぐしてよとや」と、男に情熱的に訴えかける趣となっている。花山院の、

津つの国のながらふべくもあらぬかき蘆あしの世にこそ
ありけれ
〔新古今集〕雑下 一八四八

という歌は、この伊勢の歌の比較的早い時期における影響作であろう。

わびぬれば今はたおなじ難波なる
みをつくしても逢はむとぞ思ふ

元良親王



恋心に堪えかねた今となつてはもう同じこと、難波にある落標のように、この身を尽くし破滅させてでもあなたに逢おうと思います。

◇後撰和歌集 卷十三・恋五 九六〇 詞書「事いできのちに京極御息所につかはしける」(拾遺和歌集) 卷十二 恋二 七六六にも入集する。」

元良親王 寛平二(八九〇)年〜天慶六(九四三)年七月二十六日。五十四歳。陽成院(第一三番の作者)の第一皇子。母は主殿頭藤原遠長の娘。三品兵部卿に至った。色好みの皇子として知られていたらしい。家集「元良親王集」がある。勅撰集は「後撰集」初出。

■わびぬれば 「わび」は上二段動詞の連用形。「ぬれ」は完了の助動詞「ぬ」の已然形。「ば」は確定条件を表す接続助詞。 ■今はたおなじ 「はた」は「どう思つてもやはり」の意の副詞。 ■難波なる 難波にある。 ■みをつくしても 「みをつくし」は「落標」(航海する船々に水脈を知らせる標識)と、「身を尽くし」(身を破滅させる)の掛詞。 ■逢はむとぞ思ふ 「む」は意志の助動詞。「思ふ」は「ぞ」の結びで連体形。

佗ぬ連わび

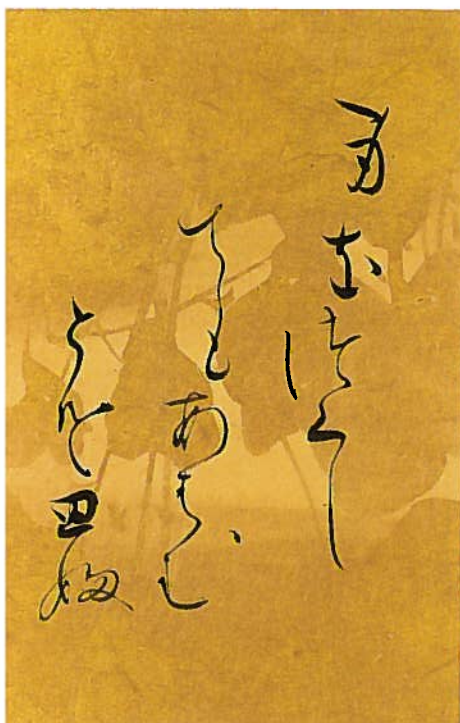
今者多いまはたは

な丹には成なる 同おなし

身を

徒つくし

てもあ者はむ
と楚思婦そおもふ



身を尽くす恋——激情の恋歌

『後撰集』の詞書に見える「京極の御息所」とは、左大臣時平の娘斐子で、父時平が醍醐天皇に入内させようと考えていたのに、宇多上皇が「これは老法師賜りぬ」と言つて横取りし、女御にしてしまったと伝えられる女性である。上皇の寵愛をうけ、三皇子を生んでいる。志賀寺の上人に恋されたという説話も残っている。そのような魅力的な貴婦人と、風流好色の貴公子として知られる元良親王の恋において詠まれたのが、この歌である。「事いできてのち」とは、二人の恋愛がすでに露顕してしまつた後、の意である。

解釈上問題になるのは、第二句「今はたおなじ」で、何と何が同じなのか諸説がある。ここでは、逢つても逢わなくても身の破滅は同じこと、という意にとつた。逢えば、世間の人々に糾弾され身のおきどころもなくなるだろう、しかし逢わずにいたら、恋いこがれて死んでしまふ、同じことなら身を尽くしても逢おう、というのである。身の破滅をも辞さない情熱的な恋歌である。

今来むといひしばかりに長月の
有明ありあけの月を待ち出いでつるかな

素性そせい法師ほふし



あなたが「すぐ行くよ」と言ったばかりに、今か今かと待ち続けて、九月の有明ありあけの月が出るまで待ち通してしまいました。

◇古今和歌集 卷十四・恋四・六九一 詞書「題しらず」

素性そせい法師ほうし 生没年未詳。俗名は良岑よしみね玄利げんじ。遍昭へんじょう

(良岑宗貞・第一番歌の作者)の在俗時の息子で、左近将監さきみねのしょうかんに至り、清和天皇の殿上人とのうぢだったが、法師の子

は法師がよいとの父の言で出家させられたと伝える。

大和国石上の良因院りょういんに住み、昌泰元しょうたいげん(八九八)年十月

の宇多上皇の宮滝御幸みやたきのみぎゆきの際には良因朝臣の名を与えられて随行している。三十六歌仙の一人。家集「素性集」がある。勅撰集は「古今集」初出。

■今来む 「今」は、すぐに、じきに。「すぐ行く」「すぐ行く

よ」という恋人の言葉である。使いなどに託して恋人が伝言してきたという状況が想定される。 ■長月 陰曆九月。 ■有明の

月 夜が明けてからも空に残る月。特に、月の出の遅い陰曆二十日以後の月についていうことが多い。 ■待ち出でつるかな 「待

ち出で」は複合動詞下二段活用の連用形。恋人の来訪を待っている間に、待ちもしない月の出に違ってしまった、という気持。「つ

る」は完了の助動詞「つ」の連体形。「かな」は詠嘆の終助詞。

今こむと

いひし

計爾ばかりに

な可月かつき

の

あり明乃あけの

月つきを

待出まちいで

つる可奈かな

あつる

月乃

待出

つるる

来ぬ人を待つ女——有明の月が出るまで

作者そせい素性せいせう法師ほうしは男性であるが、女の立場に身をかえて詠じた「待つ恋」の歌である。この当時は、男性が女性のもとに通う「通い婚」が普通で、女性はずねに待つ側にあった。一首は、「すぐ行くよ」という一言に期待をかけて待ちつづけるうちに、さしもの晩秋（陰暦九月）の長夜も白みはじめ、待ち人ならぬ有明の月に逢ってしまった、との意で、期待と焦燥に胸をこがしつづ一夜を明かした女の心が、巧みに表現されている。待つ恋のあわれさの中にも、「恋人ならぬ月に逢ってしまった」という機知のおかしみが含まれている。これとは別に、秋三か月の間不実な男を待ちつづけ、とうとう九月の有明の月の出る季節になってしまった、と解する説もあるが、一言を頼りに「今か、今か」と待つ心の動きは、一夜に凝縮してとらえた方が、より生彩を帯びるのではないか。

竹久夢二（一八八四—一九三四）の「待てどくらせど来ぬ人を宵待草のやるせなさ 今宵は月も出ぬさうな」は、この歌の本歌取りではないかと思われる。



吹くからに秋の草木のしをるれば

むべ山風やまかぜをあらしといふらむ

文屋康秀



吹きおろすとすぐさま秋の草木が凋しおれてしまうので、なるほど山風のことを嵐あらしというのであろう。

◇古今和歌集 卷五・秋下・二四九 詞書「是貞親王の家の歌合の歌」

文屋康秀 生没年未詳。縫殿助宗子の子、「百人一首」三七番歌の作者朝康の父。「古今集」真名序では文琳

と呼ばれる。貞観二（八六〇）年三月刑部中判事に、後、三河掾、山城大掾に任ぜられ、元慶三（八七九）年五月二十八日には縫殿助となっている。二条后藤原高子（百人一首）三番歌の作者である陽成院の母）のものと出入りしていた。小野小町とも交際があり、三河掾として赴任する際、同行を誘いかけている。六歌仙の一人。「古今集」初出の勅撰歌人。

■吹くからに 吹くとすぐ。「…からに」は接続助詞。「…トスグ」

「…トタンニ」の意。 ■しをるれば 「しをるれ」は下二段動

詞「しをる」の已然形。 ■むべ 「なるほど」と肯定する意味

の副詞。「うべ」に同じ。 ■山風をあらしといふらむ 「山風」

は山から吹きおろす風。「あらし」は「嵐」と「荒し」の掛詞。

「らむ」は理由を推量する助動詞。

吹可らにふか

秋のあき

草木くさき

能の

し本留連ハほんるれは

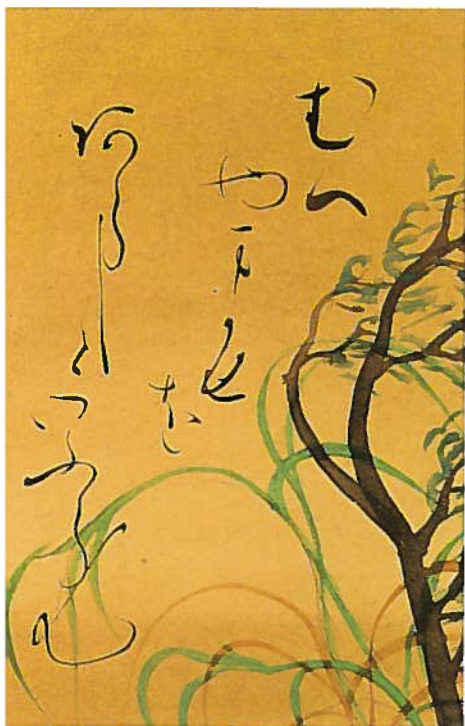
むへ

や万可せまか

を

阿らしあ

といふら无む



「山」と「風」は「嵐」——字の謎遊び

吹きおろす山風で、秋の草木が枯れしおれていくことをとらえた歌だが、下句に趣向が凝らされている。「山風をあらしといふらむ」は、「山」と「風」の二字を組合せると「嵐」という一字となる点に注目したものだ。さらに、その「嵐」に山風の吹きすさぶ様子を形容する「荒し」という言葉を掛けている。このような字の謎遊びを、中国では瘦語とか瘦辞などといった。『古今集』冬にも、同様の趣向をもった、紀友則の歌がある。

雪降れば木毎まごに花ぞ咲きにけるいづれを梅うめとわきて折らま
し
（『古今集』冬 三三七）

「木」と「毎」を組合せると「梅」になるという洒落である。なお、『古今集』の伝本の中には、この歌を「文屋康秀」ではなく息子の「朝康」の作とするものがある。この伝えが正しいとするなら、百人一首中には、朝康の歌が二首撰入されたことになる。

月見ればちぢにもものこそ悲しけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど

大江千里



月を見ると心も千々に乱れて物悲しいよ。私一人のために訪れた秋というわけでもないのに。

◇古今和歌集・卷四・秋上・一九三 詞書「是貞親王の家の歌合によめる」

大江千里 生没年未詳。参議音人の息子。大学の学生で、昌泰四（九〇二）年三月十五日中務少丞、延喜二（九〇二）年二月兵部少丞に任ぜられ、同三年三月二十六日兵部大丞に転じたという。従六位上に至ったか。家集「句題和歌」（別名「千里集」）は、白楽天などの漢詩句を和歌に翻案したものを中心とし、寛平六（八九四）年四月宇多天皇に献上された。「古今集」初出の勅撰歌人。

■ちぢに あれこれとさまざまに。形容動詞「千々なり」の連用形。下句の「ひとつ」と数の対を形成する。 ■ものこそ悲しけれ 「悲しけれ」は形容詞「悲し」の已然形。係助詞「こそ」の結びである。 ■わが身ひとつの秋にはあらねど 「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。私一人の秋ではないけれど、「そのように思われる」といった内容が省かれた、言いさした形で終わっている。

月三つきみれ八は

千々ち々に

ものこ楚そ

かなし

け連れ

わ可か三み

悲ひと徒つ

の

秋あき爾には

あらねと

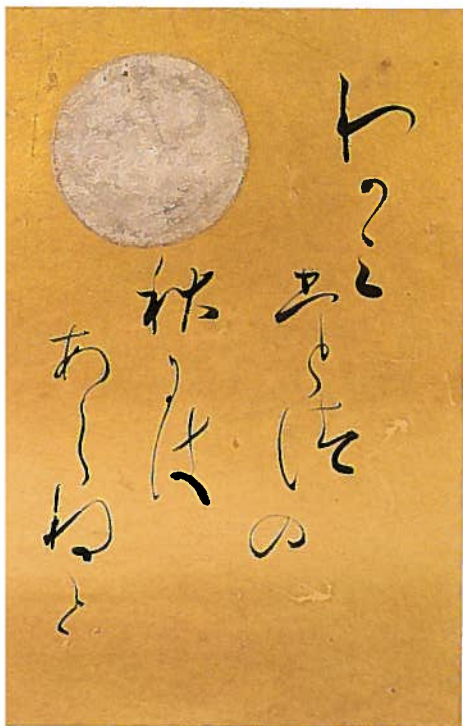
悲愁の秋——漢詩文の影響

この歌は、『白氏文集』中の「燕子楼三首」の第一首めの「燕子楼の中霜月の夜、秋来たりてただ一人のために長し」を踏まえたものとする説がある。この詩は、徐州の刺史（県知事）であつた張氏の愛人盼盼が、張氏の死後もその愛情を忘れず、燕子楼という邸にわびしく住んでいた心情を詠じたもの。引用した箇所は、燕子楼にも秋が訪れ、月光がさしこみ霜の置く夜一夜、まんじりともせず悲哀の情をかみしめる盼盼を詠じている。千里が、この詩に影響された可能性は大きいだろう。

秋を悲愁の季節とする感覚は、さかのほれば中国に由来するものであるが、和歌の世界では『古今集』において鮮明になつた。『古今集』秋上には、

おほかたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ
(一八五 読人知らず)

などの類想の歌が見える。



このたびは幣も取りあへず手向山
紅葉の錦神のまにまに

菅

家



このたびの旅は急なことでしたので、幣帛の用意もできませんでした。手向山の神よ、この錦のように美しい紅葉を御心のままにお納めください。

◇古今和歌集 卷九・羁旅・四二〇 詞書「朱雀院の奈良におはしましたりける時に、手向山にてよみける」

菅家 菅原道真。承和十二(八四五)年、延喜三

(九〇三)年二月十五日、五十九歳。文章博士参議是善の息子。貞観四(八六二)年五月十七日文章生に補され、兵部少輔、文章博士、讃岐守、藏人頭、参議、左大弁、権大納言、右大将などを経て、昌泰二(八九九)年二月十四日には右大臣に至ったが、左大臣藤原時平の讒言により、同四(九〇一)年正月に大宰権帥に左遷され、大宰府において没した。没後天神として尊崇され太政大臣正一位を贈られている。詩集「菅家文章」「菅家後集」がある。勅撰集は『古今集』初出。

■このたびは「たび」は「度」と「旅」の掛詞。■幣 祈る際の捧げ物。布や紙を小さく切つて作る。■手向山 道の安全を祈って峠の神に幣を供える山の意で普通名詞。道真が詠じた「手向山」がどこにあたるかは不明。だが、奈良の東大寺の

此堂このたひ

八は

もみちの

爾にしき

ぬさと

取阿とりあへ寸す

手むた希山けやま

神能かみの

末まにくまに



東に手向山神社たむけやまがあり、ここをこの歌が詠まれた手向山だとする伝承がある。 ■神のまにまに 「まにまに」は「…ノママニ」「随意に」の意。「まにま」ともいう。

全山の紅葉を神に捧ぐ

『古今集』の詞書に見える、朱雀院すざくいん（宇多上皇のこと。朱雀院を邸としたことからこう呼ばれる）の「奈良におはしましたりける時」とは、昌泰元（八九八）年十月の宮滝への御幸をさす。この遊覧の旅に道真も供奉し、「宮滝御幸記」という記録を記し、和歌・漢詩の作品も残している。

紅葉を錦もみぢにたとえるのは、平安時代の和歌の常套的な表現であるが、幣ぬさとして神に捧げるという着想には独特なものがある。全山を彩る華麗な紅葉の錦を、そのまま天然自然の幣として神にご嘉納かのういただく、という氣宇壮大な歌である。紀貫之のりつらねの一首

秋の山紅葉をぬさと手向くればすむ我さへぞ旅心地する

（古今集 秋下 二九九）

は、道真の歌を知って詠まれたものであるうか。道真が左遷されるのは、この御幸からわずか三年後のことであった。

名にし負はば逢坂山のさねかづら
 人に知られで来るよしもがな

三條右大臣



逢坂山のさねかづら、これが「逢う」「さ寝」という名前を持っていてのならば、そのさねかづらを手繰るよう
 に、他の人に知られないであなたのもとに訪ねて来る手
 だてがほしいものです。

◇後撰和歌集 卷十一・恋三・七〇〇 詞書「女につかはしける」

三條右大臣 藤原定方。貞観十五(八七三)年、承平二(九三二)年八月四日。六十歳。内大臣高藤の息子、母は宮内大輔宮道弥益の娘。寛平四(八九二)年三月内舍人、その後右少将、備前守などを経て、延喜九(九〇九)年四月参議となり、さらに中納言、大納言、右大将を歴任、延長二(九二四)年右大臣、同四年従二位に即位した。邸宅が三條にあつたため三條右大臣と呼ばれた。家集『三條右大臣集』。『古今集』初出の勅撰歌人。

■名にし負はば 名として負い持っているならば。「し」は強めの副助詞。 ■逢坂山 山城国(京都)と近江国(滋賀県)の境の山。近江国の側に、「逢坂の関」がある。恋人に逢う、の意で歌に詠まれる歌枕。 ■さねかづら モクレン科の常緑の蔓状をなす低木。今の「ピナンカズラ」。初夏、淡黄色の花を咲かせ、のち赤い実をつける。「さ寝」は接頭語。「さ寝」を料する。

名爾しお者なにしおは

相坂山あふさかやま

の

さね

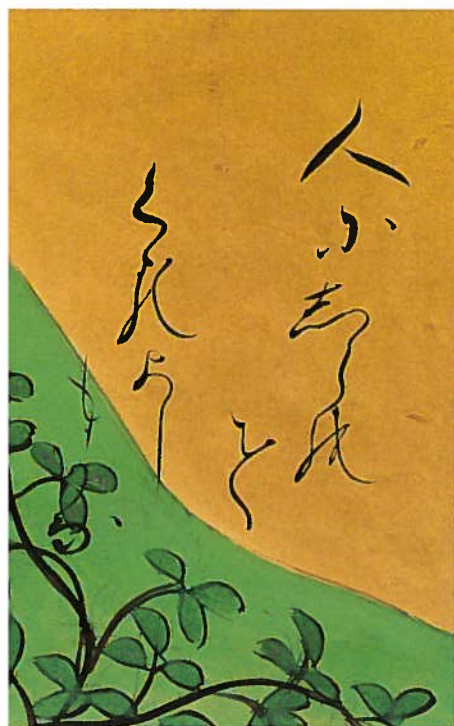
かつら

人爾志ら禮にししれ

天て

く類よしる

も可奈かな



■来るよしもがな 「くる」は「来る」に、かつらの縁語「繰る」を掛ける。「よし」は方法・手段。「もがな」は願望の意をあらわす終助詞。

「さねかずら」に付けた恋の歌

平安時代、人に歌を贈る時には、折節おりせつにかなう草花や木などに添えるのがエチケットであった。これは、さねかずらに付けて贈った歌なのだろう。一首は、「逢坂山おうさかやま」「さねかずら」という山の名、植物の名から、それぞれ「逢ふ」「さ寝」ということばを導き出し、さらに「来る」と「さねかずら」の縁語の「繰る」が掛詞になる、という趣向に富んだものである。一つのことばが次のことばを呼びおこしていくような、連なりの面白さがある。「名にし負はば」という初句を持つ歌には、『古今集』や『伊勢物語』で有名な、在原業平ありわらのなりひらの次のような歌がある。

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと
（『古今集』・鞍旅あそり 四一・在原業平）

をぐらやまみね
小倉山峰の紅葉葉心あらば

いまひとたびのみゆき待たなむ

貞信公



小倉山の峰の紅葉よ、もしもそなたに心があるならば、このまま散ららないで、もう一度の天皇の行幸を待っていておくれ。

◆拾遺和歌集 卷十七・雑秋・一一二八 詞書「亭子院大井川に御幸ありて、行幸もありぬべき所なりと仰せたまふに、事の由奏せむと申して」

貞信公 藤原忠平。貞信公は諡（死後、生前の徳や行ないに基づいて送られる称号）。元慶四（八八〇）年（天曆三（九四九）年八月十四日。七十歳。関白従一位基経（昭宣公）の息子、母は人康親王（仁明天皇皇子）の娘。『百人一首』四十五番歌の作者伊尹の祖父、同五〇番歌の作者義孝の曾祖父になる。寛平七（八九五）年八月正五位下に叙され、侍従、参議、左大将、左大臣などを経て、摂政関白太政大臣従一位に至る。小一条殿と号した。日記『貞信公記』がある。勅撰集は『後撰集』初出。

■小倉山 山城国の歌枕。京都市右京区嵯峨にある山。この歌などから紅葉を組合せて歌うことが多い。「小暗し」というイメージを伴った歌い方もなされる。『百人一首』の撰者・藤原定家の山荘もここにあった。 ■みゆき待たなむ 「みゆき」は、天皇の行

おくら山やま

三年みね

の紅葉もみぢ

こゝろ

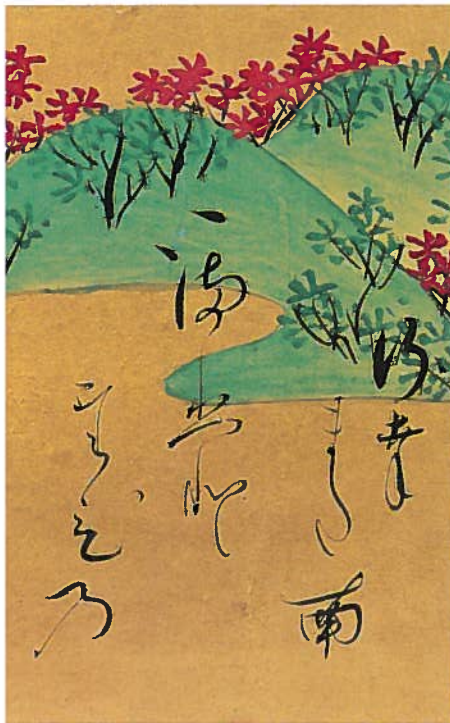
あらは

行幸みゆき

ま多南たなむ

い満悲登まひと

堂飛乃たひの



幸。上皇・法皇の場合は御幸ごきょうという。(訓読みすれば双方ともに「みゆき」)「待たなむ」は、待つてほしい。「なむ」は他者にあつらえ望む意の終助詞。

小倉山の紅葉——行幸を待つ山川

『拾遺集』の詞書に見える、亭子院ていじのいん(宇多法皇。百人一首二四番歌の詞書に見える朱雀院すざくいんの別称)の大井川御幸おおいがわごきょうとは、一般に延喜七(九〇七)年九月十日のことと考えられている。宇多法皇が大井川に御幸し、その美景に感動して、「今上帝さむじょうである我が子(醍醐天皇)にもぜひ見せたいものだ」と仰せられた。その言葉を、供奉くわんぶしていた忠平ただひらが耳にして、「ことの次第を帝に奏上みましましょう」と申し上げ、小倉山の紅葉にむかつて詠みかけたのがこの歌である。このことは、『大和物語』九十九段や『大鏡』巻六昔物語にも語られている。『大和物語』では第二句を「峰みねのみみぢし」、「大鏡」の古本では初句を「大原山」、第一句を「もみぢの色も」と伝えている。あるいは、後日小倉山の紅葉の枝などに添えて、この歌が帝に奏上されたのかもしれない。非情の物である草木に対して「心あらば」と訴えた歌としては、上野峰雄かみのねのなむねの、
深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け

などの例もある。
(古今集 哀傷歌・八三二)

みかの原わきて流るるいづみ川がは
いつ見きとてか恋しかるらむ

中納言兼輔
ちゅうなごんかねすけ

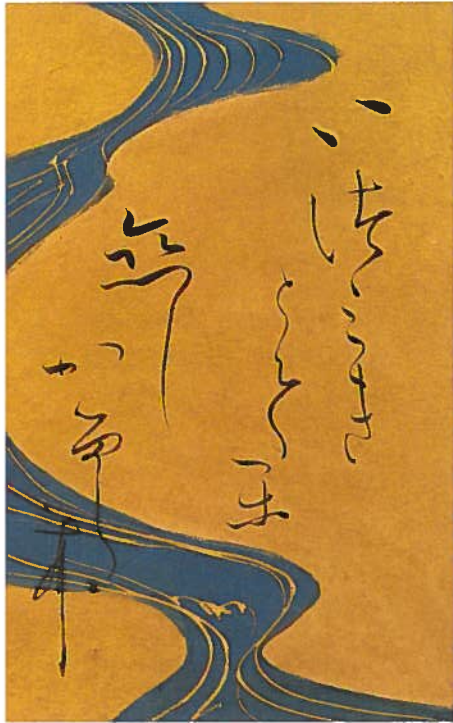


みかの原を分けて湧き返り流れる泉川、その「いつ」ではないが、あの人を「いつ」見たというのでこんなにも恋しいのだろうか。

◇新古今和歌集 卷十一・恋一・九九六 詞書「題しらす」

中納言兼輔 藤原兼輔。元慶元（八七七）年、承平三（九三三）年二月十八日。五十七歳。右中将利基の六男、母は伴氏。寛平九（八九七）年七月昇殿、内蔵助、左近少将、藏人頭、参議などを経て、延長五（九二七）年正月中納言従三位に至った。鴨川の堤防のほとりに邸宅を構え、堤、中納言と呼ばれた。紀貫之や凡河内躬恒の庇護者の存在であった。子孫に紫式部がいる。三十六歌仙の一人。家集「兼輔集」。勅撰集は「古今集」初出。

■みかの原 山城国の歌枕。京都府相楽郡。「三日原」「三香原」「廻原」などと表記される。天平の末年、この地に恭仁京が建設されたが、廃都となった。 ■わきて 「分き」と「湧き」の掛詞。
■いづみ川 現在の木津川の、加茂町から木津町にかけての部分。ここまでが「いつ見」を起こす序詞。 ■いつ見きとて



美可みかの

者はら

王わき天てん

な可かる、

泉河いづみがは

い徒つみ三き

と天閑てんか

恋こひし

か留るら

舞む

かいつ見たといつてか。「き」は過去の助動詞。

未だ見ぬ人を恋う

この当時の恋は、未だ見ぬ人に憧憬を抱くことから始まる。人伝づてに聞く評判や、歌の筆跡、漏れきいた琴ことの音などによって、見ぬ人の姿を思い、恋心を育てていくのである。

この歌の下句「いつ見きとてか恋しかるらむ」は、気がつく、逢あったこともない人の面影を抱きしめ恋い焦がれているわが心の不思議さを、自ら問うたものである。「いつ見」を導き出す上三句の序詞じごは、「みかの原」「いづみ川」の二つの地名を含む。この二つをともに詠みこんだ歌には、

都出でてけふみかの原泉川風さむし衣かせ山

〔古今集〕 鞍旅・四〇八 説人しらず

がある。みかの原を分けて、湧き返り流れていくはずみ川の形姿に、募る恋心のイメージを重ねて味わうことができよう。なお、この歌は『古今六帖』第三「かは」に見える作者未詳の歌で、現存する『兼輔集』には見出されない。兼輔の作ではない可能性の高い歌である。

やまざと
山里は冬ぞ寂しさまさりける
ひとめ
人目も草もかれぬと思へば

源
宗于朝臣



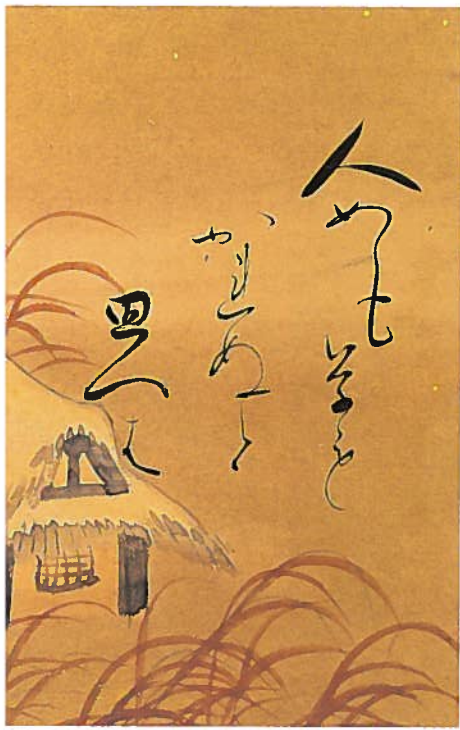
山里は、冬になるとひとしお寂しさがまさって感じられたよ。人の訪れもとだえ、草も枯れてしまうと思うと。

◇古今和歌集 卷六・冬・三一五 詞書「冬の歌としてよめる」

源 宗于朝臣 生年未詳。天慶二(九三九)年十一月

二十三日没。光孝天皇(百人一首一五番歌の作者)の皇子是忠親王の息子。寛平六(八九四)年正月従四位下に叙され、丹波権守、兵部大輔、右馬頭、相模守などを経て、承平三(九三三)年十月右京大夫に任ぜられ、天慶二年正四位下に叙されたが、同年没した。三十六歌仙の一人。家集「宗于集」。勅撰集は「古今集」初出。

■山里は 「は」は他と強く区別する係助詞。 ■冬ぞ寂しさまさりける 「ぞ」は強意の係助詞。「ける」は「ぞ」の結びで連体形になる。 ■人目 人の訪れ、出入りをいう。 ■かれぬ 人が訪れなくなるという意の「離る」に草が「枯る」を掛ける。「ぬ」は完了の助動詞の終止形。



山やま里さとは

冬ふゆ曾そ

寂さびしさ

満まさり

ける

人ひとめも

草くさ毛も

か連れぬと

思おもへ者は

山里の冬の寂寥せきりょう

「山里」には、俗世間から離れたわびしい世界のイメージがある。この歌は、山里の冬を詠んだものだが、秋の山里に ついても、

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつ
つ
（『古今集』秋上・二一四 壬生忠岑みぶのたかみね）

のような歌が見られる。山里とは、いつの季節も、人界から隔たつた寂寥の世界なのである。しかし、寂しいとはいえ、春から秋までは、花も咲き、鳥も鳴き、紅葉も彩りを添えて、それらを愛でる人が訪れることもあるだろう。冬の山里には、人の心をなごませる景物もなく、草も枯れ、人の訪れも途絶えてしまうのである。その後は雪に降りこめられ、

白雪の降りてつもれる山里に住む人さへや思ひ消ゆらむ
（『古今集』冬・三二八 壬生忠岑）

のような、白一色の世界となるのであろう。技巧の面では、「人目も草も」と人事と自然を並列してのべ、「かる（離る・枯る）」という掛詞でこれを受けるところがおもしろい。「枯る」と「離る」の掛詞には次のような例もあげられる。

わが待たぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人は訪れもせず

（『古今集』冬・三三八 凡河内躬恒おほしうらのみつね）

心あてに折らばや折らむ初霜の
置きまどはせる白菊の花

おほしかふちのみつね
凡河内躬恒



もし手折るとするなら、あて推量に折ってみようか。初霜がまつ白に置いて、見る者を惑わせている中の白菊の花を。

◇古今和歌集 卷五・秋下・二七七 詞書「白菊の花をよめる」

凡河内躬恒 生没年未詳。寛平六（八九四）年二月甲斐権少目、延喜七（九〇七）年正月丹波権大目、同十一年正月和泉権掾、その後淡路掾に任ぜられたことが知られる。『古今集』撰者の一人。その歌才は後代紀貫之と並び称される。三十六歌仙。家集『躬恒集』。『古今集』初出の勅撰歌人。

■心あてに あて推量に。「折らむ」にかかる。 ■折らばや折らむ 「もし折るとするならば折ってみようか」の意。「ば」は未然形に接続する接続助詞で、仮定を示す。「や」は疑問の係助詞。願望の終助詞「ばや」ではない。「折らむ」の「む」は、意志を示す助動詞の連体形。 ■置きまどはせる 初霜が置いて、人を惑わせる、の意。「る」は完了の助動詞「り」の連体形。くシテイルの意。

心あてて

爾

おら

者や

折ん初し

もの

置まど

者世類

志ら菊

の花



初霜が演出する白い世界

菊は中国渡来の植物で、『万葉集』には見えず、『古今集』になって和歌に登場してくる。平安時代の歌物語の一つ『平中(平仲とも記す)物語』には、主人公の男が庭に丹精をこめ、美しい菊を沢山植えており、その様を女達が見に来たり、貴顕に所望されたりする話が見える。現代に置きかえるなら、温室を持ち洋ランを咲かせているようなものであろうか。

この歌は、白菊の咲く前栽(庭の植えこみ)に初霜がおりた晩秋の景を詠むのだが、それを単純には歌っていない。白菊の上にさらに白い霜が加わった美しさを、いづれが花か霜か見分け難いほどである、と誇張してとらえ、しかも、その見る者を錯覚させるような様は、「初霜」の演出によるのだ、と表現している。人は菊を手折ろうとし、霜はそれを妨げている。「心あてに」という初句を持つ有名な歌に、『源氏物語』「夕顔」巻の夕顔の女が光源氏に詠みかけた一首がある。心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花
これは、この『百人一首』の歌を踏まえたものであろう。

ありあけ
有明のつれなく見えし別れより
あかつき
暁ばかり憂きものはなし

壬生忠岑



有明の月が無情に照り、あなたも冷淡なそぶりであった別れからこのかた、暁ほど我が身がすらく思われるものはなくなりました。

◇古今和歌集 卷十三・恋三・六二五 詞書「題しらず」

壬生忠岑 生没年未詳。散位安綱の息子。「百人一首」

四一番歌作者忠見の父。右衛門府生、御厨子所定外膳部 撰津権大目などの官歴がある。泉大将と呼ばれた藤原定国（百人一首二五番歌の作者三条右大臣定方の兄）の隨身であった。歌字書「和歌体十種」は「忠岑十体」とも呼ばれ、その著書と考えられてきたが、仮託書かとする説もある。「古今集」撰者の一人。三十六歌仙の一人。家集「忠岑集」。「古今集」初出の勅撰歌人。

■有明の 有明の月が。「有明の月」は夜更けてから出、夜が明けても西の空に残る頃の月。下弦の月である。「の」は主格を示す。

■つれなく 「つれなし」は、物に動じず無表情、無愛想、そっけないの意。 ■暁ばかり 「あかつき」は夜明け前のまだ暗い

ころ。一夜の逢瀬のあと、男が帰っていく時刻である。「ばかり」は、程度を示す副助詞。くぐらい、くほどの意。 ■憂き つらい、切ないの意。類義語「つらし」が、他者のせいでつらく、恨

む気持であるのに対し、「うし」は自分自身のせいでつらいとなげ

有明ありあけのつ連れ

なく

み衣え

し

わ可か連れ

よ里り

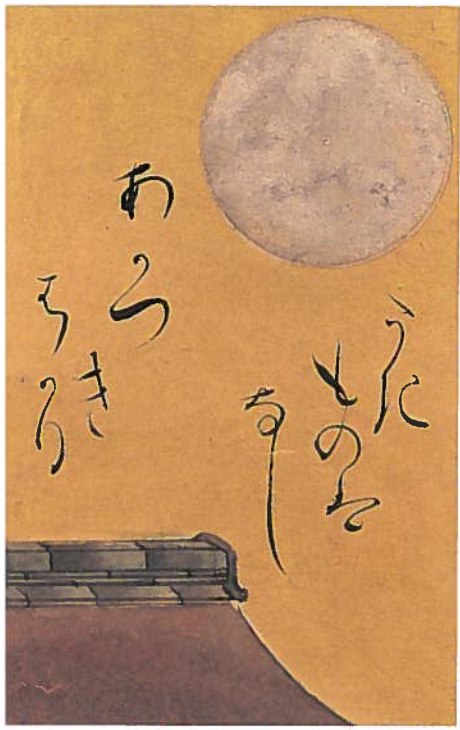
う起き

もの盤は

なし

あ可かつ

者は可かり



き思う気持である。

来れども逢はず——無情に照る月

『忠岑集』のある伝本には、「ある女に」と詞書が付され、「古今六帖」では「来れども逢はず」の項目の中に収められている歌である。訪れても、ついに逢つてくれなかつた恋人の無情を嘆いた歌と解される。「つれなく見えし」が、月のことを言ったのか、相手の女のことか、月と女双方のことなのか、解釈がわかるが、ここでは、無情に照る月に女の冷淡さを重ねたものと見ておく。傷心を抱いて帰る男を、そ知らぬ顔で照らす月も、恋人同様に「つれない」ものといえるだろう。その有明の別れからこのかた、暁の時刻になると特に、恋を成就できない我が身のつらさが痛感されるのである。『百人一首』の撰者藤原定家は、この歌を評して、「これほどの歌一つよみ出でたらん、この世の思ひ出に侍るべし」といい、これを本歌取りした、五月雨の月はつれなきみ山よりひとりも出づるほととぎすかな
（『新古今集』 夏・二三五 藤原定家）
という歌を詠んでいる。

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

よしの
吉野の里に降れる白雪

さかのうへの
坂上
是則



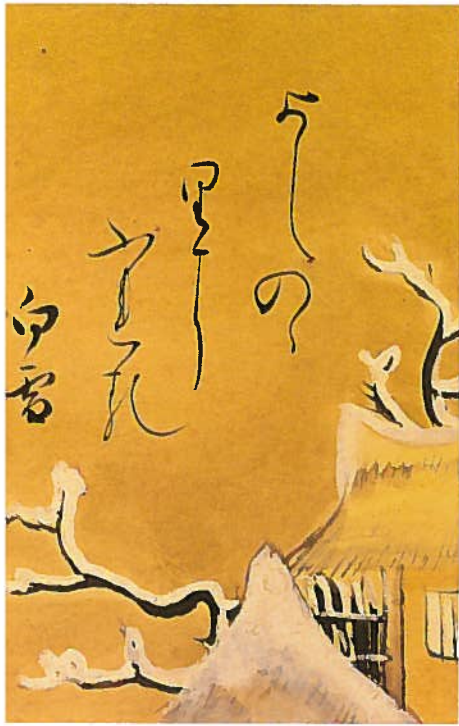
夜が明け初めるころ、有明の月の光かと思まうごうばかりに、吉野の里に降り積もっている白雪よ。

◇古今和歌集 卷六・冬・三三二 詞書「大和の国にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめる」

坂上是則 生没年未詳。好蔭の息子。坂上田村麻呂の子孫。『後撰集』の撰者の一人。坂上望城の父。延喜八

(九〇八)年正月大和権少掾に任ぜられたのち、大和権掾、大内記などを経て、延長二(九二四)年正月加賀介に任ぜられ、従五位下に叙されている。三十六歌仙の一人。家集『是則集』。勅撰集は『古今集』初出。

■朝ぼらけ 夜がほのぼのと明け、物がほのかに見える状態。春は「曙」というのに対し、秋・冬に多くこの語を用いるといわれる。「暁」の次の段階。 ■有明の月 夜が明けてからも空に残る月。 ■見るまでに 「まで」は程度を表す副助詞。「に」は格助詞。 ■吉野の里 大和国の歌枕。奈良県吉野郡の町村。吉野山の麓の里なので、寒く雪も多いとされる。 ■降れる白雪 「る」は完了の助動詞「り」の連体形。こゝは、存続の意を示す。



朝本あさほらけ

有明ありあけ

の

月つきと

三みる

万天まてに

よし

の

里耳さとみ

ふ連類れんる

白雪しらゆき

雪明りを月と見る——吉野の里の冬

作者 坂上是則さかのうえのこれのりは、大和権少掾・大和権掾に任ぜられた

こともあり、公務を帯びて大和の地を旅することも多かったものと思われる。この歌のほかにも、吉野の雪を詠んだ、

み吉野の山の白雪積もるらしふるさと寒くなりまさるなり

〔古今集〕冬・三二五 坂上是則

のような歌を残している。これらの作が、実際大和権掾の時代に詠まれたかどうかはともあれ、大和下向の体験が作歌に影響を与えていることは確かであろう。

この歌は、早朝の吉野の白雪を詠んだものである。白々とした明るさに、有明ありあけの月が出たのかと見たところ、それは薄く降り積もった雪明りであった、というのである。雪の早朝の、ほの白い明るさとともに、快くさえある寒気まで感じとられる歌である。雪の白さを月光かとする歌には、紀貫之きのつらぬの夜ならば月とぞ見まし我が宿の庭白妙しろたまに降れる白雪

〔拾遺集〕冬・二四六 紀貫之

などもある。

やまがは
山川に風のかけたるしがらみは

流れもあへぬ紅葉なりけり

はる
みちの
つら
き
春道列樹



山の中の川に風がかけたしがらみ、それは流れようと
して流れきれないでいる紅葉であったのだ。

◇古今和歌集 卷五・秋下・三〇三 詞書「志賀の山越
えにてよめる」

春道列樹 生年未詳。六位、文章生を経て延喜二十

(九二〇)年正月三十日老岐守に任ぜられたが、任地に
赴く以前に没したという。主税頭新名の息子。「古今集」
初出の勅撰歌人だが、「古今集」「後撰集」に五首の歌を
留めるのみである。

■山川 「やまがわ」と濁って読む。山の中を流れる川のこと。

■風のかけたるしがらみ 風は擬人化されている。「たる」は完了
の助動詞「たり」の連体形。ここは存続の意をあらわす。「しがら
み(柵)」は、四段動詞「しがらむ」の連用形から転じたと考えら
れる名詞。流れをせき止めるために杭を打ち並べ、横に木の枝や
竹を架け渡したものだ。 ■流れもあへぬ 流れようとして流れる
ことのできない。「あへ」は、下二段動詞「敢ふ」の未然形。「ぬ」

は打消の助動詞「ず」の連体形。「動詞の連用形+敢へず」で「し
きれない、できない」の意になる。 ■紅葉なりけり 「なり」

は断定の助動詞の連用形。「けり」は詠奠の助動詞の終止形。

やまがわに
山川二

か
可せ

か
の可け

た
多る

し
志可らみ

は
盤

か
な可れも

あへぬ

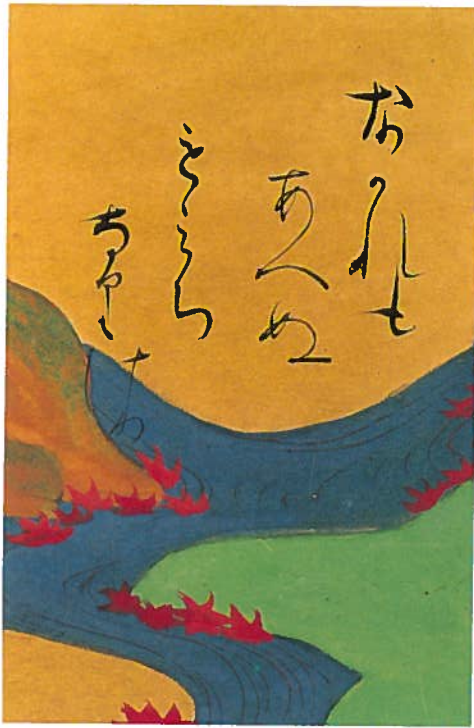
もみ
毛三ち

な
奈里けり

「しがらみ」は紅葉なりけり——山川の秋

『古今集』の詞書に記される「志賀の山越」とは、京都の白川（のちの荒神口）から志賀峠を越え近江（滋賀県）の坂本に抜ける山道のことである。この道を行く途次に見た山間の川、その、溪流の上に、紅葉が散りつつ歩いていく。散り落ちた紅葉は、流れのままに下流に向かっていくのだが、なかには、岩場に滞り、浅瀬に吹き寄せられなどして、残っているものもある。このような紅葉を、人間ならぬ「風」がかけ渡した「しがらみ」と見たのが、一首の趣向である。これを、上句で謎を掛けて、下句で解いてみせるかのように「：しがらみは：もみぢなりけり」と歌った点にも面白みがある。『百人一首』の撰者藤原定家は、この歌を本歌取りして、次のような歌を詠んだ。

木の葉もて風のかけたるしがらみはさてもよどまぬ秋の暮
かな
（『拾遺愚草』中・一三五五）



ひさかたの光のどけき春の日に
しづ心しずこころなく花の散るらむ

紀きの
友とも
則のり



大空の日の光がのどかな春の日に、どうして落ちついた心もなく桜の花が散っているのだろうか。

◇古今和歌集・巻二・春下・八四 詞書「桜の花の散るをよめる」

紀友則きのとものり 生没年未詳。宮内権少輔有朋の息子。紀貫之の従兄弟に当たる。寛平九(八九七)年正月土佐掾、同十年正月少内記、延喜四(九〇四)年正月二十五日大内記に任ぜられた。『古今集』の撰者の一人であったが、完成以前に没した。三十六歌仙の一人。家集『友則集』。『古今集』初出の勅撰歌人。

■ひさかたの 光・日・月・天・空などにかかる枕詞。■光のどけき 「のどけき」は形容詞の連体形。ゆつたり落ちついたさまをいう。ここは陽光のやわらかくうららかなさま。■しづ心なく 落ち着いた心もなく。■花の散るらむ 「らむ」は原因推量の助動詞。「どうして…だろう」の意。「静心なく花の散る」光景を見て、その原因・理由に思いをはせているのである。

光の中の落花

ひさかた
久方の
ひかり
日可利

しつこく
志徒心

の
能とけき

なく

はな
者那

の

のひに
乃日耳

ちるらむ



散る桜を惜しむ歌は、王朝和歌に数多く見られるものであった。この歌に似た心を詠んだ歌に、次のようなものがある。うちはへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらむ
（『後撰集』春下 九二 清原深養父）

ことならば咲かずやはあらぬ桜花見るわれさへにしづ心な
（『古今集』春下 八二 紀貫之）

深養父の作、貫之の作と比べることによって、友則のこの歌の特徴が明らかになる。深養父の作は景よりも理に重きを置いており、貫之の作は、「見るわれ」の理知を前面に出した詠みぶりである。それに対し、友則のこの歌は、暖かく風もない空に光の満ちあふれる春の日に、あわただしく、しかし音もたえずに桜の花が散る、という景を歌いあげている。そして、桜を惜しむ心は、花を「しづ心なく」と擬人化し、散る理由を推し量ることを通して表現されている。自然と人の心が分かち難く融けあつたところに、この歌の魅力があろう。なお、初・二・三・五句の頭に八行音が置かれ、「の」も四回繰り返されることから、独特の快い調べが生み出されているのも、この歌の特徴といえよう。

誰たれをかも知る人にせむ高砂たかきの

松も昔の友ならなくに

藤原興風ふらはらの おき かげ



年老いた私は、いつたい誰だれを知友としたらよいのだから。あの高砂たかきの松も昔からの友ではないのだから。

◇古今和歌集 卷十七・雜上・九〇九 詞書「題しらず」

藤原興風ふらはらの おき かげ 生没年未詳。藤原氏京家の相模掾道成の

息子。歌学書『歌経標式』の著者参議浜成の曾孫に当た

る。昌泰三（九〇〇）年正月相模掾、延喜二（九〇二）

年二月治部少丞、同四年正月上野権大掾、同十四年四

月二十二日下総大掾に任ぜられた。正六位上に至る。三

十六歌仙の一人。家集『興風集』。勅撰集は『古今集』初

出。

■誰をかも 「かも」は疑問の係助詞。 ■知る人にせむ 「知

る人」は自分を理解してくれる人。 ■高砂たかきの松 播磨国高砂はりまのくに たかき 現

在の兵庫県高砂市）の老松。松は長寿の象徴である。 ■友なら

なくに 友であるというわけではないのに。「なら」は断定の助動

詞「なり」の未然形。「なく」は「ないこと」の意で、打消の助動

詞「ず」の連体形。「ぬ」に接尾語「あく」がつき母音が変化した

もの。このような語法を「ク語法」という。「に」は「…のに」と

逆接確定条件を表す接続助詞。「ならなくに」は「百人一首」一四

番歌にも既出。



誰を可も
たれをか

志る人
しひと

せん高砂
たかき

の

満川も
まが

む可し
むか

友なら
とも

な具
なぐ

雨に
あめ

の

高砂の長寿の老松

百人一首の中では珍しい老を嘆く歌である。年老いて、知己旧友も次々に世を去り、自分一人が取り残されてしまった。他にあるものといえは、長寿で知られる高砂の老松くらいのものだが、それとても昔を共有しあえる友ではない、というのである。興風のこの歌や、『古今集』でこの歌の前におかれる、

かくしつ世をや尽くさむ高砂の尾上に立てる松ならなく
に (『古今集』雑上・九〇八 詠人しらず)

という歌によって、長寿を象徴する「高砂の(尾上の)松」が、文学の中に定着したらしい。後に、源俊頼(百人一首七四番歌の作者)が播磨国に下向した時も、人々がここで歌を詠み、その時、藤原義定という人が、

われのみと思ひこしかど高砂の尾上の松もまた立てりけり
(『後拾遺集』雑三・九八六)

と詠んで、同席の人々を感嘆させたという逸話が知られる。興風のこの歌は謡曲「高砂」に引かれている。現在、兵庫県を走る山陽電鉄には「尾上の松」という駅がある。

人はいさ心も知らずふるさとは
花ぞ昔の香かに匂にほひける

紀きの
貫つら
之ゆき



人はさあどうでしようか、あなたの心の内はわかりません。しかし、昔なじみのこの土地では、花だけは昔のままの香で匂っていることです。

◇古今和歌集 卷一・春上・四二 詞書「初瀬にまうづるごとに宿りける人の家に、久しく宿らで、ほど経てのちに至れりければ、かの家のあるじ、「かく定かになむやどりはある」と言ひ出だして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる」

紀貫之 生没年未詳。天慶九(九四六)年没か。望行の息子。「紀氏系図」に伝える「内教坊の阿古久曾」という幼名から、母は内教坊の伎女か倡女であったかとする説がある。御書所預、土佐守などを経て、従五位上木工権頭に至る。「古今集」の撰者の一人で、同集撰進に当たっては、自ら仮名序を執筆するなど、中心的役割を果たした。また同集の秀歌選である「新撰和歌」を編んだ。「土佐日記」は土佐守の任期が満ちて帰京する際の旅日記である。三十六歌仙。家集「貫之集」。「古今集」初出の勅撰歌人。

人盤ひとばんいさ心こころも

志しら

寸す

布ふる郷さと

盤ばん

花楚はなそ

む可かし

香耳かみ、に

保日ほひ

ける

の



下に打消の語を伴うことの多い副詞。 ■花ぞ 「花」は『古今集』の詞書から梅と知られる。「ぞ」は強意の係助詞。

昔と変わらぬ梅の香——旧交を暖める

一首の作歌事情は『古今集』の詞書に詳しい。實之が、大和の長谷寺に参詣することに宿泊した家に、しばらく御無沙汰した後を訪れたところ、その家の主人に「私の家はこのようなにちゃんとするのに、あなたは随分お見限りでしたね」と、皮肉っぽい恨み言を言われた。そこで、傍らの梅の一枝を折って、この歌を贈ったというのである。「かく定かになむやどりはある」という主人のこぼを受けて「なるほど家はあるけれども、そこに住むあなたの心がどうなっているか、わかったものではありません」と、皮肉で応酬している。しかし、このやりとりは決して悪意のあるとげとげしいものではない。互いに心を許しあつた間柄であるゆえに成り立つ、当意即妙の挨拶なのである。正保版本『實之集』にはこの歌に對する、
花だにもおなじ心に咲くものを植ゑたる人の心知らなむ
という家あるじの返歌も収めている。このやりとりは恋の恨み言めいた情緒をほのかに感じとり、宿の主人は女性であつたかと想像することもできよう。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいづこに月宿るらむ

清原深養父



夏の短か夜は、まだ宵のくちのままに明けてしまったが、沈む暇もない月は、いったい雲のどのあたりに宿っているのだろうか。

◇古今和歌集 卷三・夏・一六六 詞書「月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる」

清原深養父 生没年未詳。豊前介房則の息子。『百人一首』四二番歌の作者元輔の祖父で、六二番歌の作者清少納言の曾祖父。延喜八(九〇八)年正月内匠大允、延長元(九二二)年六月内藏大允に任ぜられ、同八年十一月二十一日従五位下に叙された。晩年は洛北の静原のあたりに補陀落寺を創建したと伝える。中古三十六歌仙の一人。家集『深養父集』。勅撰集は『古今集』初出。

■夏の夜は 「は」は係助詞。他と区別して取りたてていう意。他の季節とは違って夏の夜というものは、と夏の短夜を強調している。 ■宵ながら 宵のうちのままに。「ながら」は継続を表わす接続助詞。 ■明けぬるを 「ぬる」は完了の助動詞「ぬ」の連体形。「を」は逆接の接続助詞。 ■雲のいづこに月宿るらむ 雲のどのあたりに月は宿をとっているのだろうか。「月」は擬人化されている。

夏のよ盤なつ よばん

万多また

宵な可よひ かな

あけぬる

を

くもの

い徒いつ

こ爾こに

月つきや

登とるら

ん

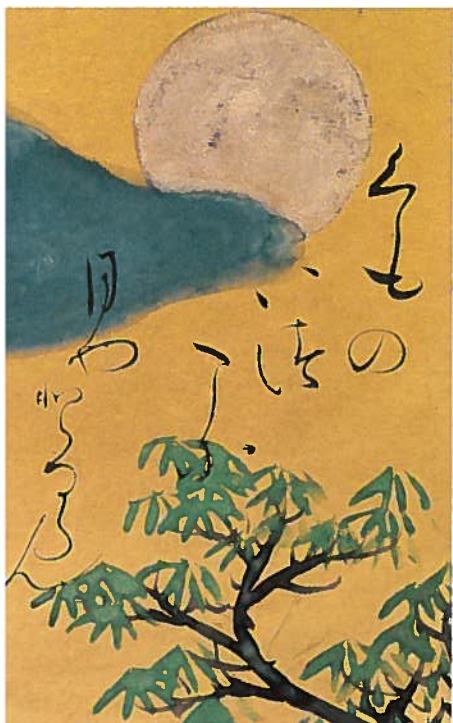
夏の夜空を渡る月

月明つきあかりの美しい夜、明け方近くに詠よまれた歌である。月を眺めていようちに、夏の短夜かぢやはあつけなく明けてしまった。そのことを「宵ながら明けぬる」と誇張して表現している。そして、夜明けとともに姿を隠した月を、雲のどの辺に宿をとっているのだろうか、と思いやつている。夏の夜のあまりの短さに、月も山の端はに入る暇がなかっただろう、というのである。夏の短夜を惜しみ、月を賞美するところを、俳諧風はいかいに詠みなした一首である。「後撰集」夏歌の終わり近くに、

宵ながら屋にもあらなむ夏なれば待ちくらすまのほどなかるべく
(『後撰集』夏・二〇五 読人しらず)

夏の夜の月はほどなく明けぬれば朝の間をそかこちよせつる
(『後撰集』夏・二〇六 読人しらず)

が見える。
夏の永日えいじつを嘆き、夏の夜の月を惜しむ歌だが、深養父ふかやぶの一首の内容を、二首で分かち持ったような感がある。



白露しらつゆに風の吹きしく秋の野は

つらぬきとめぬ玉ぞ散りける

文屋朝康



白露に風がしきりに吹きつける秋の野は、さながら緒を通してつなぎとめていない珠玉しゆぎよくが乱れ散ったようだ。

◇後撰和歌集 卷六・秋中・三〇八 詞書「延喜の御時歌めしければ」

文屋朝康 生没年未詳。『百人一首』二番歌の作者康秀の息子。寛平四(八九二)年駿河掾、延喜二(九〇二)年二月二十三日大舍人大允に任ぜられている。六位大膳少進に至ったか。勅撰集は『古今集』初出。

■風の吹きしく 風がしきりに吹くの意。「の」は主格の格助詞。「吹きしく」は四段動詞の連体形。「しく」は「しきりにくする」の意。■つらぬきとめぬ 緒を通してつなぎとめていない。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。■玉ぞ散りける 「玉」は珠玉。白露のたとえとしては真珠。「ぞ」は強意の係助詞。「ける」は詠嘆の助動詞「けり」の連体形。

志ら徒ゆ

耳に

可せ

の吹し具

秋能の

は

つら

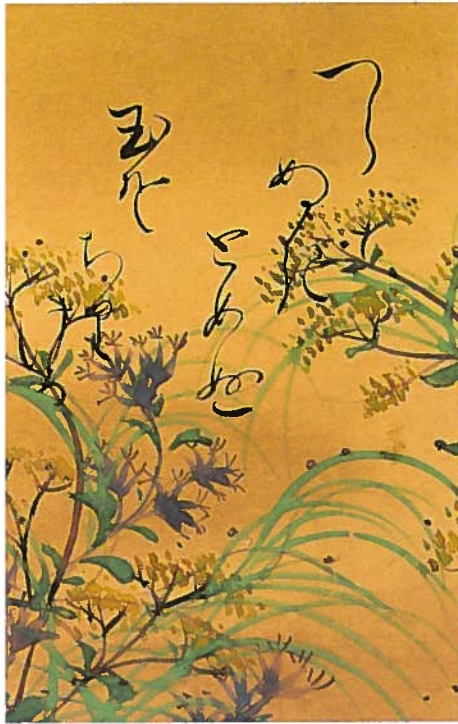
ぬ起

とめ怒

玉楚

ち里

ける



秋の野に乱れ散った真珠

秋草の咲き乱れる野辺に、清らかな白露が降りている。この露を吹きしきる秋風がはらはらと散らしている。その様子は、まるで紐を通してつなぎとめていない真珠が乱れ散ったように見える。秋の野の清艶な美しさを詠んだ歌である。露を玉にたとえるのは、『万葉集』以来見られる和歌の常套的表現である。この歌の作者である文屋朝康も、次のような歌を詠んでいる。

秋の野に置く白露は玉なれやつらぬきかくるくもの糸すぢ

(『古今集』秋上・二二五 文屋朝康)

『古今集』の「秋の野に」の歌は、くもの糸に置いた白露の繊細で静的な美を詠んでいる。それに対し、『百人一首』の「白露に」の歌は、風の吹きしきる動的な美しさを詠んだものである。『源氏物語』「野分」巻の、

花どものしをるるを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひ騒がるるを、まして、草むらの露の玉の緒乱るるままに、御心まどひもしぬべく思したり。

という一節には、この歌に通うものがある。

忘らるる身をば思はず誓ひてし
人の命の惜しくもあるかな

右

近



忘れられるこの身の不幸は何とも思いません。それよりも、「忘れまい」と神かけて誓ったあなたの命が、神罰により失われるのではないかと、惜しく思われてなりません。

◇拾遺和歌集

卷十四・恋四・八七〇 詞書「題しらず」

右近

生没年未詳。交野少将と呼ばれた、南家真

作流の右少将藤原季繩の娘であるとも、木工頭千乗の娘

で季繩の妹であるとも伝える。醍醐天皇の后穂子(藤原

基経の娘に仕えた。「大和物語」によれば、元良親王(百

人一首二〇番歌の作者)、藤原敦忠(同四三番歌の作

者)、同師輔、同朝忠(同四四番歌の作者)らと恋をした

らしい。勅撰集は「後撰集」初出。

■忘らるる 「忘ら」は四段動詞の未然形。「るる」は受身の助動

詞「る」の連体形。■身をば思はず 「ば」は強意の係助詞

「は」。格助詞「を」に続くときは連濁で「ば」となる。「ず」は

打消の助動詞の終止形。ここで二句切れになる。■誓ひてし

「て」は完了の助動詞「つ」の連用形。「し」は過去の助動詞「き」

の連体形。■人の命の 「人」は恋の相手を指す。■惜しく

もあるかな 「ある」はラ変動詞「あり」の連体形。「かな」は詠

わすら

留る、
る

身みを盤は

おも

者は寸す

ち可か日ひ

てし

人ひとのいのち

濃の

おしくも

有ある可かな那



不実な恋人を憐む——破られた誓い

この歌は『大和物語』八十四段にも、「おなじ女うづえ（右近のこ）と、男の忘れじと、よろづのことをかけて誓ひけれど、忘れにけるのちにひやりける」として見える。この男は藤原敦忠あつちかであると考えられている。

この歌は、どのような思いから詠まれたもののだろうか。例えば、『伊勢物語』二十三段の女が、他の女を訪ねるために竜田山を越えていく男を気づかって、「…夜半にや君がひとりこゆらむ」と詠んだように、不実な恋人の身を心配する献身的な歌なのだろうか。それとも、私は構わないが、あなたにはきつと罰ばちがあたりますよ、という痛烈な皮肉の歌なのだろうか。どちらと解するかによつて表情が変わる歌である。「惜しくもあるかな」という語調の強さには、後者の解釈がふさわしいのではないか。勝気な才女の面影が彷彿ほうぼうとする歌である。

あさぢふをのしのはら
 浅茅生の小野の篠原忍ぶれど
 あまりてなどか人の恋しき

参議等



あさぢふをのしのはら
 浅茅の生えた野辺の篠原、その「しの」ではないが、
 忍びこらえているものの、思い余ってどうしてこんな
 もあなたが恋しいのだろう。

◇後撰和歌集 卷九・恋一・五七七 詞書「人につかはしける」

参議等源等。元慶四(八八〇)年(天曆五
 (九五二)年三月十日。七十二歳。嵯峨源氏、中納言兼
 民部卿希の二男。昌泰二(八九九)年正月近江権少掾
 に任ぜられ、参河守、大宰大貳、右大弁、勘解由長官な
 どを経て、天曆元(九四七)年四月二十六日参議となり、
 同五年正月正四位下に叙された。その作品は『後撰集』
 に四首入集するのみで、そのうち三首が恋歌である。

■浅茅生 丈の低い茅葺が生えているところ。

■小野 「小」

は接頭語。単に野辺というほどの意。 ■篠原 篠(細い竹)の

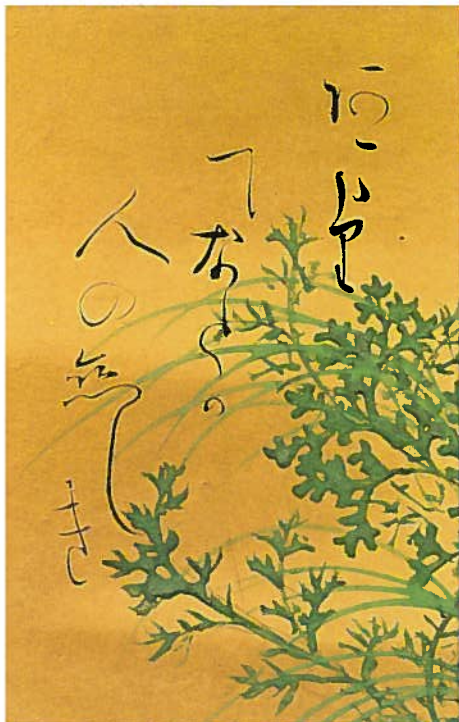
生えている原。ここまでが「しのぶ」を起こす序詞。 ■忍ぶれ

ど 「しのぶ」は、じつとこらえるという意。「しのぶれ」は上二

段動詞の已然形。「ど」は逆接の接続助詞。 ■あまりてなどか

「など」は疑問の副詞。「か」は疑問の係助詞。 ■人の恋しき

「人」はあなたの意。恋の相手をさして「人」ということは少な



あさちふ
の能の
し濃原
志のふ
連と

阿万里
てなと可
人の恋し
き

恋心を忍ぶ——浅茅生の小野の篠原

この歌は『古今集』の読人しらす歌、

浅茅生の小野の篠原しのおとも人しるらめやいふ人なしに

(『古今集』恋一・五〇五 読人しらす)

の上三句を、ほとんどそのままに踏まえたものである。「浅茅生の小野の篠原」は、同音で「しのぶ」を導き出す序詞となつてゐるが、風にそよぐ篠原の映像は、恋に波立つ心の象徴のようにも思われる。また「浅茅生の小野の篠原」は、身を忍ばせることもできる場所である。そのように視覚的に「忍ぶ」ことから、恋心を「忍ぶ」という内面的なことへと転じている序詞である。こうした上句を受け、『古今集』歌の方は、素朴なしらべにのせて忍ぶ恋の嘆きを洩らしている。一方、『百人一首』の等の歌は、「忍ぶれど」のあと一転して、「あまりてなどか」「人の恋しき」と小刻みな口調で、わが身をいぶかしみ、慕情を訴えていく。「忍ぶれどあまりて」と転じていくあたりの曲折ある表現が、藤原定家の好みにあつてゐるのかもしれない。

忍ぶれど色に出でにけりわが恋は
ものや思ふと人の問ふまで

平たひらの
兼かね
盛もり



こらえ忍んでいたけれど、とうとう素振に表れてしま
ったことだ、私の恋心は。「物思いをしておいでですか」
と、人が尋ねるまでに。

◇拾遺和歌集 卷十一・恋一・六二二 詞書「天曆
御時の歌合」

平兼盛 生年未詳。正暦元(九九〇)年十二月没。
光孝平氏、大宰大貳筑前守篤行の息子。篤行は是忠親王
の孫で、「古今集」の中の作者の一人。兼盛は天慶五(九
四二)年五月従五位下に叙され、越前権守、山城介、
大監物などを経て、康保三(九六六)年正月従五位上、
天元二(九七九)年八月駿河守となった。「百人一首」五
九番歌の作者赤染衛門の実父と伝えられる。三十六歌仙。
家集「兼盛集」。勅撰集は「後撰集」初出。

■色に出でにけり 「色」は顔色、素振。「出でにけり」の「に」
は完了の助動詞「ぬ」の連用形。「けり」は詠嘆の助動詞の終止形。
■ものや思ふと 何か物思いでもしているのですか、と。「思ふ」
は係助詞「や」の結びで連体形。 ■人の問ふまで 「人」は他
人、第三者。「まで」は程度を示す副助詞。

志しのふ禮れと

色いろに

出いでに

け利り

わ可かこひ

八は

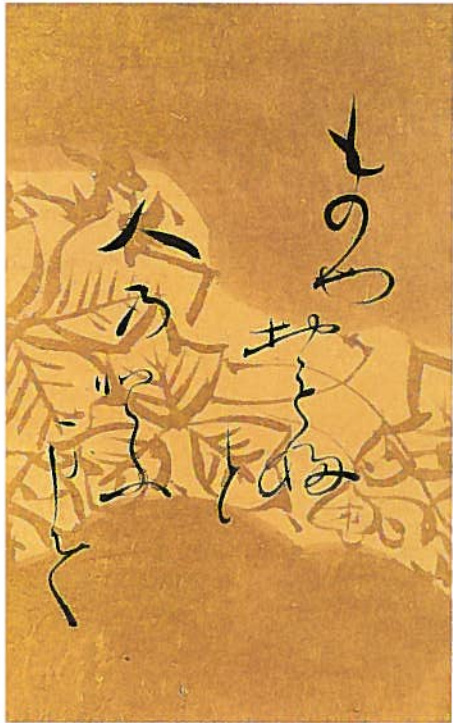
ものや

お毛も婦ふ

と

人ひと乃の登とふ

万ま天て



色に出づる恋——歌合の恋歌

『拾遺集』の詞書にいう「天曆御時の歌合」とは、村上天皇の天徳四（九六〇）年三月三十日に、内裏で行われた二十番の歌合である。この歌は「恋」の題を詠んだもので、最後の二十番右歌として出され、『百人一首』四一番の壬生忠見の歌と番われた。歌合の記録によると、左右ともに優れた歌であったので、判者であった左大臣藤原実頼も決着をつけかね、村上天皇の気色をうかがったところ、天皇がひそかにこの兼盛の歌を口ずさまれた。そこで、右の兼盛の歌が勝ちと決まったという。しかし近世の歌人香川景樹のように、忠見の歌の方がよいという評者もあり、歌の優劣は一概には決め難い。

兼盛のこの歌の特徴は、ことばつづきの巧みさにあるだろう。「忍ぶれど色に出でにけり」と、包みかくしていた恋心がついに表れてしまった感慨を二句切れの上二句で歌い、倒置された第三句以下に、他者の「ものや思ふ」という問いかけをも取り入れた、曲折のある詠みぶりの歌である。歌合の場で、一座の人々の心をとらえるのに十分なものであった、と思われるのである。

恋すてふわが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひそめしか

壬生忠見



私が恋をしているという評判は、早くも立ってしまつた。誰にも知られないように、心ひそかにあの人を思ひはじめたのだった。

◇拾遺和歌集 卷十一・恋一・六二一 詞書「天曆御時の歌合」

壬生忠見 生没年未詳。百人一首三〇番歌の作者
壬生忠岑の息子。天曆八(九五四)年五月御厨子所に外膳部が定められた際、定額膳部とされたという。天徳二(九五八)年正月三十日摂津大目に任ぜられた。天徳四(九六〇)年の生存が確認される。三十六歌仙の一人。家集「忠見集」。勅撰集は「後撰集」初出。

■恋すてふ 恋をしているという。「てふ」は「といふ」が転化した複合語。 ■わが名 私の評判。 ■まだき 早くも、時も至らないのに、という意の副詞。 ■立ちにけり 「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形。「けり」は詠嘆の助動詞の終止形。 ■人知れずこそ 他人に知られないように。「こそ」は係助詞。 ■思ひそめしか 思い始めたのだけれど。「しか」は過去の助動詞「き」の已然形。この歌の上句と下句は倒置の関係にあり、逆接の意味

恋こいすて婦め

わ可かな名な

盤は

万ま多たき

立たち二にけ利り

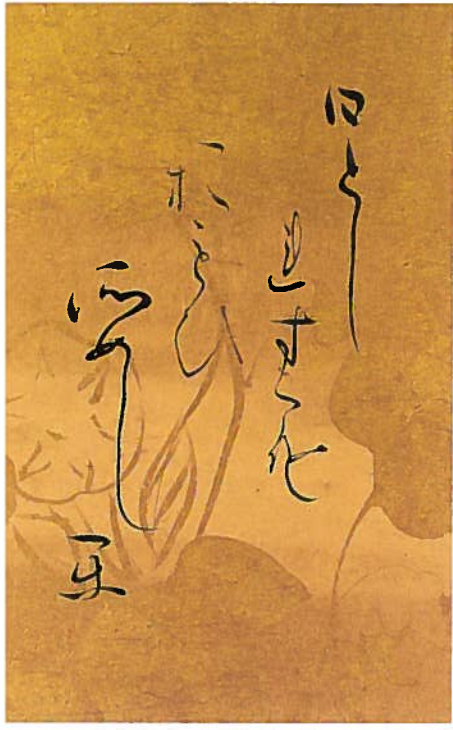
目ひとし

連れ寸すこ楚そ

於お毛もひ

所そめし

閑か



早々と立つ恋の浮名——歌合の恋歌

作歌事情は、先に四〇番歌で述べた。この忠見の歌は、四〇番歌と番つがわれ、負けにされたものである。一首は、「人知れずあの人を思いそめたのに、私が恋をしているという評判は早くも立ってしまった」との意。噂うわさだけはあつという間に立つたが、恋の成就じゆうじゆはほど遠いのである。むしろ、「恋すてふわが名」が早々と世間で取り沙汰ざたされることは、恋の進展の妨げとさえなりかねない。当惑たうわくし、危惧きぐんする思いもあるのである。素直な詠みぶりの中に、しみじみとした思いが感じられる歌である。すべらかさ、なめらかさという点では、忠見の歌の方がまさっているように思われる。

中世の説話集『沙石集』によると、忠見は兼盛の歌に負けたことを苦にして「不食の病」となって、ついに死んでしまったという。ともに互角の秀歌であったことから生まれた、後日譚ごじつだんであろう。

契ちぎりきなかたみに袖そでをしぼりつつ
末すゑの松山まつやま波越なみこさじとは

清原きよはらの
元もと
輔すけ



あなたとわたしは、約束しましたね。互いに涙に濡れた袖を絞りながら、あの末の松山を波が越えることがないように、決して心変わりなどするまいと。

◇後拾遺和歌集 卷十四・恋四・七七〇 詞書「心変わりて侍りける女に、人に代りて」

清原元輔 延喜八(九〇八)年〜永祚二(九九〇)年六月。八十三歳。下総守春光の息子、百人一首三六番歌の作者深養父の孫、六二番歌の作者清少納言の父である。河内権少掾、中監物、民部大丞、周防守などを経て、天元三(九八〇)年従五位下に叙され、寛和二(九八六)年肥後守に任ぜられた。「今昔物語集」卷二十八第六に、一条大路で落馬した際、おもしろおかしく弁明した話があり、「物をかしく云ひて人笑はするを役とする翁」と評されている。「後撰集」の撰者の一人。三十六歌仙。家集「元輔集」。勅撰集は「拾遺集」初出。

■契りきな 約束しましたね。「き」は過去の助動詞の終止形。「な」は詠嘆の終助詞。 ■かたみに お互いに。 ■袖をしぼりつつ

涙でぬれた袖を絞りながら。「つつ」は継続を示す接続助詞。

末の松山波越さじとは 「末の松山」は陸奥の歌枕。宮城県多賀

ちきり

支奈

可多み雨

曾てを

し本里

徒

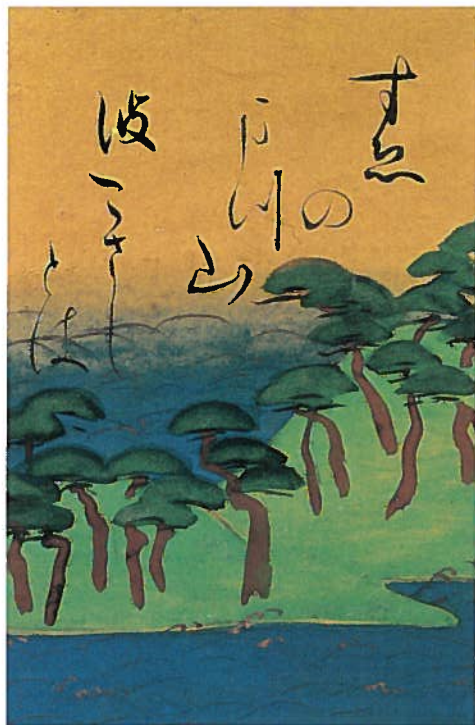
すゑ

の

万川山

波こさし

とは



城市にその古跡とされる老松が今もある。「じ」は打消の意志を示す助動詞。

背信をなじる——末の松山を越える波

「末の松山波越さじ」というのは、決して心変わりしないという恋人同士の誓いの言葉で、『古今集』東歌の「陸奥歌」として伝わる次の古歌に基づく。

君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ

（『古今集』東歌・一〇九三）

この古歌は、もしもあなたをさしおいて二心を持ったならば、末の松山を波も越えてほしい、というものである。末の松山は海岸からかなり入ったところがあり、それを波が越えるというのはいないことであつた。それと同様に、自分が心変わりすることも決してない、という意である。元輔は、この古歌を踏まえつつ、涙ながらに愛の不変を誓った人の背信を恨み、なじる歌を詠んだ。「契りきな」という倒置された初句切りの歌い出しには、強く訴えかける力が感じられる。

逢^あひ見てののちの心にくらぶれば

昔はものを思はざりけり

権中納言敦忠
ごんちゆうなごんあつただ



あなたに逢^あつて愛しあつたのちの、こんなに恋しくて
ならない心に比べると、それ以前は思い悩みなどしたう
ちには入らなかつたとわかりました。

◇拾遺和歌集 卷十二・恋二・七二〇 詞書「題しらず」

権中納言敦忠 藤原敦忠 延喜六(九〇六)年(天

慶六(九四三)年三月七日。三十八歳。左大臣時平の息

子。母は在原棟梁の娘。従つて百人一首一七番歌の作者

在原業平は母方の曾祖父にあたる。左兵衛佐、左近少

将、参議などを経て、天慶五(九四二)年権中納言従三

位に至つたが、翌年没した。本院中納言、枇杷中納言と

呼ばれた。「大鏡」卷二に「和歌の上手、管絃の道にもす

ぐれ給へりき」と伝える。三十六歌仙の一人。家集「敦

忠集」。勅撰集は「後撰集」初出。

■逢ひ見ての「逢ひ見る」は、単に顔を会わせることではなく、

男女が逢つて契りを交わす意。■のちの心 契りを交わして別

れて帰つてきた現在の心。■くらぶれば 「くらぶれ」は下二

段動詞の已然形。「ば」は確定条件を示す接続助詞。■思はざり

けり 「ざり」は打消の助動詞「ず」の連用形。「けり」は詠嘆の

助動詞。

あひみて
三日天

の

のちの
後乃

心二

くらふ連

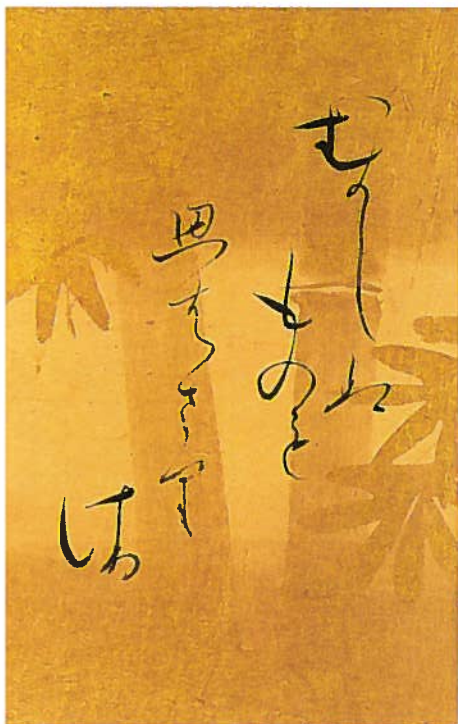
は

むかし
は

ものを

おしは
思者さ里

けり



逢い見てのちまさる恋心——後朝の歌

『拾遺集』では、この歌のあとに、

あひみてはなぐさむやとぞ思ひしをなごりしもこそ恋しかりけれ
（『拾遺集』恋二・七一 坂上是則）

という歌を並べる。逢うまでの物思いは恋の成就をひたすら願うものであったが、逢い見て後もまた、新しい物思いが始まる。またすぐにでも逢いたい、二度、三度と繰り返し逢いたい、いつも、いつまでも逢っていたいという渴望にも似た思いが、身をさいなむのである。そのような「逢ひ見てのちの心」に比べると、逢う以前の物思いなどものの数でもなかった、という自分の心の変化に対するみずみずしい驚きが詠まれている。

この歌の第四句「むかし」に注目して、逢ったのちしばらく逢えないでいる時の歌、と解する説もあるが、ここでは後朝の歌として解釈した。逢瀬を経験する前後で世界も一変して感じられ、昨日までの自分も遠い昔のことのように思われるのではないだろうか。『拾遺抄』には「はじめて女のもとにまかりて、またの朝につかはしける」とある歌である。

逢ふことの絶えてしなくはなかなか
人をも身をも恨みざらまし

中納言朝忠
ちゆうなごんあきただ

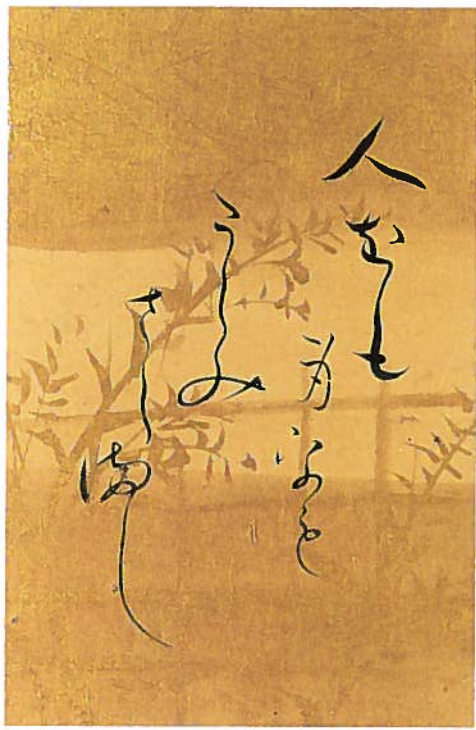


逢つて契りをかわずことがまつたくないのならば、か
えつて、あの人の無情をもこの身の不幸をも恨みはしな
いであろうに（一度逢つたからこそ、恨みに思われるの
だ）。

◇拾遺和歌集 卷十一・恋一・六七八 詞書「天曆
御時の歌合」

中納言朝忠 藤原朝忠 延喜十(九一〇)年〜康保
三(九六六)年十二月二日没、五十七歳。百人一首二五
番歌の作者三条右大臣定方の五男。母は中納言藤原山
蔭の娘。侍従、左近中将、参議などを経て、中納言従三
位に至り、土御門中納言と呼ばれた。三十六歌仙の一人。
家集「朝忠集」。勅撰集は「後撰集」初出。

■逢ふことの 逢つて契りをかわずこと。 ■絶えてしなくは
「たえて」は副詞。まつたく、の意。下に打消の語を伴うことが
多い。「し」は副助詞。「なくは」は、ないならば。「なく」は形容
詞の未然形。「は」は仮定条件を示す接続助詞。接続助詞「ば」が
形容詞の未然形、助動詞「ず」などに接続するときは、「は」と清
音になる。 ■なかなかにかえつて、の意。 ■人をも 「人」
は恋の相手を指す。 ■恨みざらまし 「恨み」は上二段動詞「恨
む」の未然形。「まし」は反表仮定の助動詞。



逢事あふことの

多衣たえ

天てし

奈なくは

中なかく

人ひとをも

身み乎も毛も

うらみ

さら

満まし

苦しい恋の反実仮想——逢うことがなかったなら

『拾遺集』の詞書にいう「天曆御時の歌合」とは、天

徳四（九六〇）年に行われた内裏歌合（百人一首四〇、四一番

歌の項参照）のことである。この歌も「恋」の題を詠んだも

ので、十九番左に掲出され、右方の、

君恋ふとかつは消えつつふるものをかくても生ける身とや

見るらむ（藤原元真）

と番つて勝ちとされた。判詞では「詞清けなり」と評されて

いる。「絶えてしなくはなかなかに」という、柔かい感じの「な

と齒切れのよいカ行音の反復、「人をも身をも」という反復、

下句のマ行音の繰り返しなどが、この評語のなされた理由で

あろうか。

恋愛において、思う相手と「逢う」ことは最高の喜びのは

ずである。それを、この歌は「逢うことがまったくなかつた

なら」と現実と反する仮想をし、中途半端に逢えるよりまっ

たく逢えない方が心穏やかであることを歌う。逆接的とも思

われる物言いの中に、恋する者の真情のこめられた歌である

う。

あはれともいふべき人は思ほえて
身のいたづらになりぬべきかな

謙けん 徳とく
公こう



「かわいそうに」と言ってくれるはずの人も思いあたらないままに、この身は、こがれ死にしようでしよう。

◆拾遺和歌集 卷十五・恋五・九五〇 詞書「物言ひ侍りける女の、のちにつれなく侍りて、さらに逢はず侍りければ (一条摂政)」

謙徳公 藤原伊尹(これただ、とも)。延長二(九二四)年〜天禄三(九七二)年十一月一日、四十九歳。九条右大臣師輔の長男。母は武蔵守藤原経邦の娘。百人一首五〇番歌の作者義孝の父。参議、権大納言、左大将、右大臣などの頭職を経て、摂政太政大臣正二位に至り、一条摂政と呼ばれた。謙徳公は諡号。『後撰集』撰進当時、撰和歌所别当の地位にあった。家集「一条摂政御集」では、「大藏史生くらはしのとよかげ」と自称して、物語的な恋歌の贈答をとどめている。勅撰集は『後撰集』初出。

■あはれとも かわいそうに、お気の毒に。「あはれ」は感動詞。

■いふべき人 言ってくれるはずの人。「べき」は当然の意の助動

詞。 ■思ほえて 「思ほえ」は下二段動詞「思ほゆ」の未然形。

あ者^は連^れ

とも

意^い婦^ふ

へき

人^{ひと}八^はおも

本^ほ衣^えて

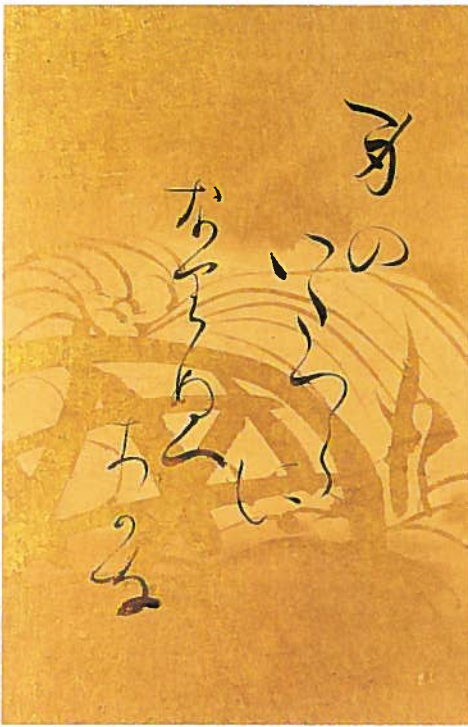
身^みの

い多^たつら

な里^りぬへ

支^き可^か奈^な

に



「で」は打消の接続助詞。 ■いたづらに 形容動詞「いたづらなり」の連用形。むなしくなる、死ぬ、の意。 ■なりぬべきかな 「なり」は四段動詞の連用形。「ぬ」は確認の意の助動詞の終止形。ある事実を強く確定的に言う場合に用いる。

こがれ死にの予感——あはれとだにのたまはせよ

『拾遺集』の詞書によると、交際していた女がそののち冷淡になって、一向に逢つてくれなくなつたので贈つた歌である。一方『一条撰政御集』では、「…(女が)年月を経て返り事せざりければ、負けじと思ひていひける」とあり、意地でも女をふりむかせようとする、恋のかけひきの歌となつてゐる。

「身のいたづらになる」とは、恋いこがれて死んでしまうことである。その場合、恋死にした自分を「あはれ」と言つてくれる人は誰だろうか、と考へてみる。それは、他ならぬ死の原因となる女以外にはいないはずだ。ところが、その女の心は冷えきつてゐる。「あはれ」と言つてくれる人はいないのである。詠歌事情はともあれ、この歌の表現から読みとれるのは、自分は恋人の一片の共感さえ得られぬまま、恋に身を滅ぼしてしまふだろう、という絶望的な確信であろう。この歌は、『源氏物語』の、女三宮に恋して身を滅ぼしていく柏木衛門督を語る文脈にも、たびたび引用されている。

由良の門を渡る舟人かちを絶え
 ゆくへも知らぬ恋のみちかな

曾禰好忠



由良の水門を漕ぎ渡る舟人が、梶を失って行く先もし
 らず漂うように、どうなつていくか見当もつかない恋の
 道であることよ。

◇新古今和歌集 卷十一・恋一・一〇七一 詞書「題し
 らず」

曾禰好忠 生没年未詳。長和五（一〇〇三）年五月
 の生存が確認される。寛和年間（九八五〜九八七）活躍
 し、丹後掾であったことから、曾丹後、曾丹など称さ
 れた。円融院の紫野の子日の御幸に、召されもせず推
 参して追いつてられた話は有名である。中古三十六歌仙
 の一人。家集『曾丹集』は「三百六十首和歌」（毎月集）
 その他を収めている。勅撰集は「拾遺集」初出。

■由良の門 丹後国の歌枕。現在の京都府宮津市由良の、由良川
 が若狭湾に注ぐあたり。紀伊国の由良の崎とする説もあるが、好
 忠は丹後国にゆかりの深い人であるから、前者と考えるべきであ
 ろう。 ■かちを絶え 梶を失って。「梶」は舟を進める櫂や櫓の
 こと。「を」は格助詞。また「楫緒絶え」と解する説もある。「楫
 緒」は楫を船に結びつける縄で、これが切れてしまうこと。ここ
 では前者を採る。 ■ゆくへも知らぬ 上三句と下五句の双方に
 つづく句。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。■恋のみちかな

ゆらの戸と

行衛ゆくへも

を

志しらぬ

わたる

恋こひ

舟人ふなびと

の

可かち越を

道みち

多衣たえ

可か奈な



「恋の道」は恋のなりゆき。「かな」は「かも」とする異文もある。

ゆくえもわからない恋

一首は、「由良の門を渡る舟人かぢを絶えゆくへも知らぬ」という梶かじを失つて漂う舟の景と、「ゆくへも知らぬ恋の道かな」という恋の嘆きが、「ゆくへも知らぬ」という第四句で重なる構造になっている。海峡を漂う小舟をあやつりかねている船頭の当惑した心情から、海のようにとりとめもない情念の世界に放り出され、なすすべもない人間の心理の描写へと転じているのである。『古今集』の、

わが恋はゆくへも知らずはてもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ

（『古今集』恋二・六一） 凡河内躬恒

という歌の表現にも通うものがある。

八重むぐら茂れる宿の寂しきに
人こそ見えね秋は来にけり

惠慶法師



幾重にも雑草の生い茂つたこの家のさびしいたたずまい、そこに訪れる人の姿は見えないけれども、ああ「秋」はやってきたのだ。

◆拾遺和歌集 卷三・秋・一四〇 詞書「河原院にて、荒れたる宿に秋来といふ心の人々よみ侍りけるに」

惠慶法師 生没年未詳。家系なども明らかでない。

寛和（九八五 九八七）ころ活躍した人で、播磨講師と称したという。大中臣能宣、源重之、清原元輔、平兼盛、曾禰好忠など、百人一首の作者たちと親交があった。また、紀時文（貫之の息子）に貫之の家集を借りたり、貫之の「土佐日記」の読後感を歌に詠んだりしていることが注目される。中古三十六歌仙の一人。家集「惠慶法師集」。勅撰集は「拾遺集」初出。

■八重むぐら ヤエムグラという名のアカネ科の草もあるが、こゝは幾重にも茂つた雑草の意。 ■茂れる宿の 「る」は存続の意を表す助動詞「り」の連体形。 ■寂しきに 寂しいところに。

「に」は場所を示す格助詞（接続助詞とする説もある）。

■人こそ見えね 「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形で「こそ」の結び。

■秋は来にけり 「人影は見えないけれど」と、下に続いていく。

■秋は来にけり 「き」はカ変動詞の連用形。「に」は完了の助動詞「ぬ」の

さひし支爾きに

人ひとこ楚そ

やとの

み衣えね

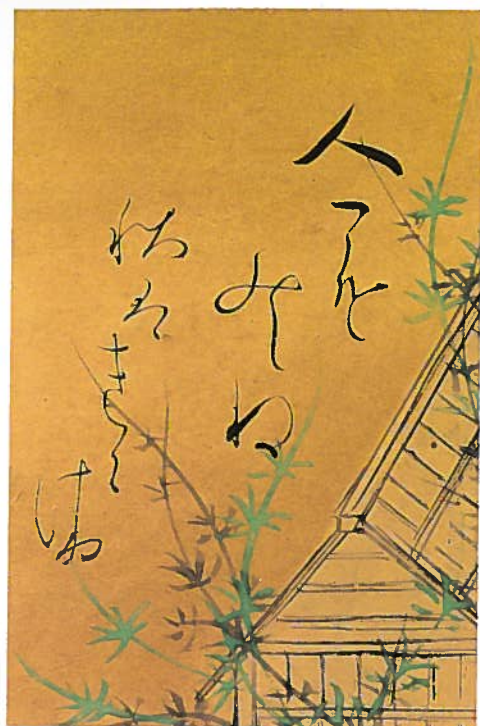
志し希け連れる

秋あき盤は

八や重え祿ろく

き爾に

け利り



連用形。「けり」は詠嘆の助動詞。人は来ないが「秋」はやってくる。

廢園に訪れる秋

『拾遺集』の詞書に見える「河原院」は、『百人一首』一四番歌の作者河原左大臣源融の邸宅であつた。融の死後、その子昇によつて宇多法皇に献上されたが、融の亡霊が現れるなどの事件があり、たび重なる賀茂川の氾濫もあつて、荒廃してしまつたらしい。現在の京都市下京区本塩竈町がその跡地に当たるといふ。この歌が詠まれた当時は、融の子孫にあたる安法法師が住み、歌人・文人たちが訪れ、歌会などが催されていた。この歌もそうした折のものであらう。『貫之集』に、「三条右大臣屏風の歌」として、

とふ人もなき宿なれどくる春はやへむぐらにもさはらざりけり
 (『貫之集』二〇七)

という歌がある。雑草が生い茂り訪れる人もない荒廃した宿にも、季節だけは変わらずめぐり来るのである。

風をいたみ岩打つ波のおのれのみ
くだけでものを思ふころかな

源 みなもと
重之 しげゆき



風が烈しいので岩に打ち寄せる波がおのれ一人碎け散るように、つれないあの人のために、わたし一人心も千々に碎けて思い悩む今日このごろよ。

◇詞花和歌集 卷七・恋上・二一〇 詞書「冷泉院春宮と申しける時、百首歌たてまつりけるによめる」

源 重之 生没年未詳。長保年間(九九九〜一〇〇

四)に没したか。清和源氏、侍従参河守兼信の息子。伯父である参議兼忠の猶子となった。春宮帯刀長、左近将監、左馬助などを経て、相模権守従五位下に至った。陸奥で没したと伝える。その娘、子の僧も歌人であったという。三十六歌仙の一人。家集「重之集」。勅撰集は「拾遺集」初出。

■風をいたみ 風がはげしいので。「を〜み」は「〜が〜なので」の意になる。「を」は間投助詞。「いた」はク活用形容詞「いたし」の語幹、「み」は理由を示す接尾語。 ■おのれのみ 「のみ」は限定の副助詞。

風かぜを

い多いた

み岩いは

うつ

波なみの已おのれ

乃のみ三み

く多いたけ天て

ものを

思おもふ

ころ哉かな

千々に碎ける心

風の強い日、磯辺に立つと、高波が岩に打ち寄せて白く碎け散る。しかし岩は微動たりともしない。その光景は、つれない恋人に対するむなししい求愛の行為を具象化したものとも見られよう。この歌の「岩」は「つれない恋人」、「くだけ散る波」は「求愛する自分自身」の比喩である。「おのれのみ」と限定されるところに、片恋の切なさが表現されている。古来、この歌に先立つものとして、

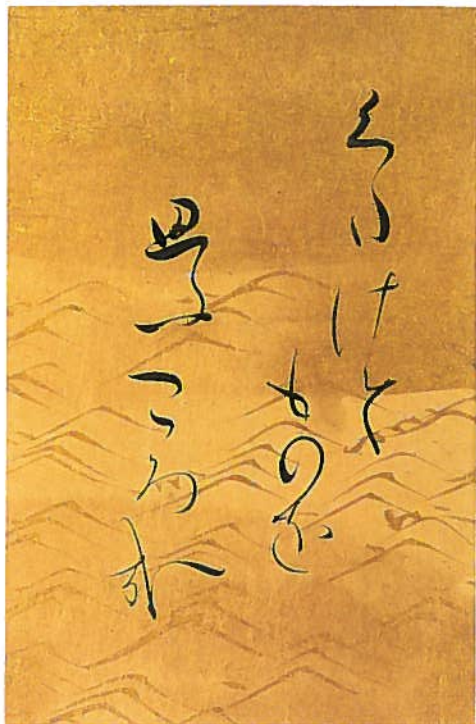
いかにして岩打つ波の立ちかへり砕くとだにも人に知らせむ

という歌が指摘されるが、先後関係ははっきりしない。また、百人一首四六番歌の作者曾禰好忠の家集に、

山賤やまがたのはてに刈り干す麦の穂のくだけて物を思ふころかな

という下句を同じくする歌がある。
〔好忠集〕 一三五

『詞花集』の詞書にいう「百首歌」とは、みずからの意中を訴えるため、あるいは貴顕の求めに応じて、一人の歌人がまとまった百首を詠むもので、十世紀後半から一般化した。重之の百首歌は、最も初期の作例の一つである。



御垣守衛士のたく火の夜は燃え
 昼は消えつつものをこそ思へ

おほなかとみのよしのぶのあそん
 大中臣能宣朝臣



宮中の御門を守護する衛士の焚くかがり火が、夜は赤々と燃え、昼は消えるように、夜は恋いこがれ昼は心も消え入るほどに、恋の物思いをしているよ。

◇詞花和歌集 卷七・恋上・二二四 詞書「題しらず」

大中臣能宣朝臣 延喜二十一年(九二二)年 正暦二

(九九二)年八月。七十一歳。祭主頼基の息子、輔親の父。百人一首六十一番歌の作者伊勢大輔の祖父にあたる。神祇大副を経て、祭主正四位下に至る。「後撰集」の撰者の一人。三十六歌仙の一人。家集「能宣集」。勅撰集は「拾遺集」初出。

■御垣守 宮中の諸門を警備する人。 ■衛士 諸国から選ばれ衛門府に配属された兵士。雑役や御殿の清掃に従事し、夜は火をたいて宮門を警備した。 ■たく火の たくかがり火のように。「の」はくのごとく、の意を表す。 ■夜は燃え昼は消えつつ 衛士のたく火と恋の思いの双方をいう。「つつ」は反復の接続助詞。なお、「燃えて」(かるた)とする異文もある。

み可^かき

守^{もり}

衛士^{ゑし}の

堂^たく火^ひ能^の

よる盤^は

も衣^えて

日^ひる

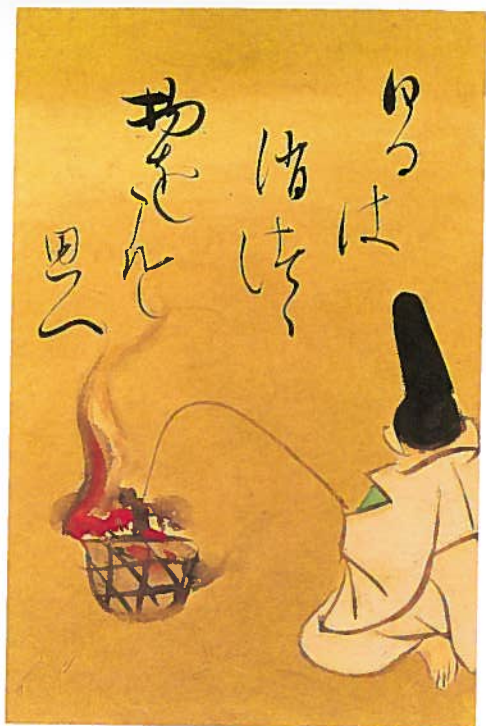
は

消^{きえ}徒^つつ

物^{もの}を

こ楚^そ

思^{おも}へ



間断なくつづく恋の物思い

—— 昼も夜も

夜空の闇を焦がす衛士^{ゑし}のたく火に、自らの恋の思いをこと寄せた歌である。かがり火が夜になるとたかれるように、自分の恋の思いも夜毎に燃えさかる。昼にはかがり火は消されているが、自分もそのように悄然^{しやうぜん}として消え入るばかりに物思^{もの}つて過^あぎしてゐる。夜と昼、燃えと消え、という対^{たい}を用いて、間断なくつづく恋の物思^{もの}いを詠^よむる歌である。

この歌の作者は、大中臣能宣^{おほなかとみののぶ}となつてゐるが、疑問がある。家集「能宣集」には見えず、能宣と同時代に作られた類題歌集「古今六帖」^{ここんろくじょう}に、作者未詳として、

君が守る衛士^{ゑし}のたく火の昼は絶えよるは燃えつつものをこそ思へ

〔古今六帖〕第一「火」 七八一

という、ほぼ同一と考えられる歌が収められているのである。この歌の異伝^{いでん}などが、能宣の歌と誤認されて勅撰集に入った可能性も高いであろう。

君がため惜しからざりし命さへ
長くもがなと思ひけるかな

ふぢはらの
藤原 義孝



あなたにお逢いするためなら惜しくはないと思つて
たこの命までも、お逢いできた今朝は、このまま長くあ
つてほしい（そしていつまでも逢い続けたい）と思うよ
うになりました。

◇後拾遺和歌集 卷十二・恋二・六六九 詞書「女のも
とより帰りてつかはしける」

藤原義孝 天曆八（九五四）年～天延二（九七四）
年九月十六日、二十一歳。百人一首四五番歌の作者藤原
伊尹（謙徳公）の息子。母は代明親王（醍醐天皇の皇子）
の娘恵子女王。三蹟の一人権大納言行成の父。右少将従
五位下に至つたが、流行の疱瘡に患ひ、兄挙賢と同日に
没したという。挙賢を前少将と呼ぶのに対して、後少
将と呼ばれた。『大鏡』巻三に、道心者、往生人であつ
たとして、その逸話を伝える。中古三十六歌仙の一人。
家集「義孝集」。勅撰集は「拾遺集」初出。

■君がため 「君」は相手の女性。「が」は連体修飾の格助詞。

惜しからざりし 「をしから」は形容詞「をし」の未然形。「ざり」
は打消の助動詞「ず」の連用形。「し」は過去の助動詞「き」の連
体形。惜しいと思わなかつた、の意。 ■命さへ 「さへ」は添

きみ可為かため

おし可から

さりし

いのち

さへ

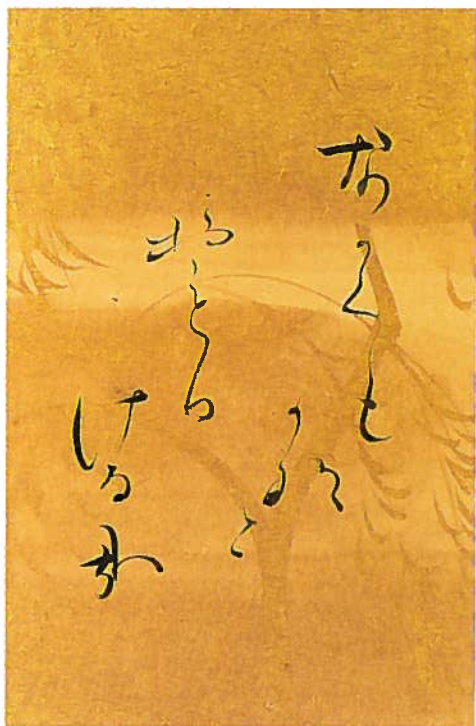
な可かくも

可か那な

と

おもひ
日ひ

ける哉かな



加の副助詞。

■長くもがな

「もがな」は願望の終助詞。

薄命の貴公子の恋の名歌

『義孝集』の詞書にも、「人のもとより帰りて、つとめて」とあり、初めて逢った翌朝、男から女に贈る「後朝の歌」であることがわかる。一首は「恋人に逢う以前は、逢えさえすればそれと引替えに命を捨ててもいいと思っていた、しかし一度逢えたのちには、いつまでも逢い続けるため、惜しくなかつたはずの命までも長くあつてほしいと思うようになって」というもので、逢つたのちにさらに募る恋の思いが、技巧を排して素直に歌われている。恋人に逢うためなら命も惜しくない、という歌は少なくない。例えば、

命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへばをしからなく
に
〔古今集〕恋二・六一五 紀友則

のような歌がある。義孝の歌としては、この百人一首歌の他に、次のものが有名である。

秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風秋の下露

〔義孝集〕

かくとだにえやは伊吹のさしも草

さしも知らじな燃ゆる思ひを

藤原実方朝臣



このようにあなたを恋していると、口に出して言うことができないでしょうか。できないままに今日まで過ぎてきました。だから、あなたはそうだとも知らないでしょうね。伊吹山のもぐさがいぶつて燃えているような、わたしの恋の思いの「火」を。

◇後拾遺和歌集 卷十一・恋一・六一二 詞書 女にはじめてつかはしける

藤原実方朝臣 生年未詳。長徳四(九九八)年十二月没。侍従貞時の息子。左大臣師尹の孫。濟時の養子となる。侍従、右馬頭などを経て、正四位下陸奥守として赴任、任国で没した。中古三十六歌仙。家集『実方朝臣集』、『拾遺和歌集』初出。

■えやは伊吹のさしも草 「えやは伊吹の」は「えやは言ふ」(言えようか、言えないの意)から「伊吹」へと続けた。伊吹山は、『八雲御抄』では美濃国とするが、頭昭は「袖中抄」で下野とする。幽斎の『百人一首抄』では「伊吹山は近江美濃兩國の名所なり」と説くが、契沖の『百人一首改観抄』では「袖中抄」の所説を継承し、下野国としている。滋賀・岐阜県境の伊吹山でもぐさを産するのは近世以降とみられ、下野国説が有力である。「さし



かくと

多二

えや盤

いふきの

さしもくさ

佐しも

志らし奈

毛ゆる

思ひを

も草」は、もぐさのこと。「さしも草」までは同音で「さしも」を起こす序詞となる。

身をこがす思いに火をつけるさしもぐさ

忍ぶ恋の段階が過ぎて、初めて文を送った時の歌である。

あぢきなや伊吹の山のさしも草おのが思ひに身をこがし

つゝ
〔古今六帖〕 三五八六

契りけむ心からこそさしも草おのが思ひにもえわたりけれ

〔古今六帖〕 三五八七

なほざりに伊吹の山のさしも草さしも思はぬことにやはあ

らぬ
〔古今六帖〕 三五八八

下野やしめつの原のさしも草おのが思ひに身をや焼くらむ

〔古今六帖〕 三五八九

これらの類歌などにあるように、「言ふ」と「伊吹」の掛

詞「さしも草さしも」という続け方、「さしも草」に「思ひ

(火)」を取り合せることなどは、いずれも「さしも草」の歌

でのパターンに沿った歌い方であったらしい。

それにしても、なぜ「さしも草」が詠まれたのか。ひそかに

想いを寄せていた女が何か病で灸治すると聞いて、実方は

もぐさを贈り、それにこの歌を添えたのではないだろうか

と想像することもできよう。灸治は昔からの治療法であった。

明けぬれば暮るるものとは知りながら
なほ恨めしき朝ぼらけかな

藤原道信朝臣
ふちはらのみちのぶのあそん



夜が明けてしまえばいずれば暮れるもの、そしてまた逢えるとはわかっていながら、あなたと別れなければならぬと思うと、やはり恨めしい朝ぼらけですね。

◇後拾遺和歌集 卷十二・恋二・六七二 詞書は直前の歌の「女のもとより雪降り侍りける日、帰りてつかはしける」が掛かる。

藤原道信朝臣

天禄三(九七二)年〜正暦五(九九

四)年七月十一日。太政大臣為光の息子。左中将従四位

上に至る。「大鏡」巻三にその人となりを「いみじき和歌

上手にて、心にくき人にいはれ」たと語る。実方と親交

があつた。中古三十六歌仙。家集『道信朝臣集』。『拾遺

和歌集』初出。

■明けぬれば暮るるもの 夜が明ければいずれば日が暮れるもの、朝になればいずれば夜がやってくるものという、当然の道理をいう。

■なほ恨めしき 「なほ」はやはりの意。理屈は理屈とし

て十分わかっていながらも、やはり恋人と別れねばならない明け方は恨めしいという、自然の感情。

■朝ぼらけ 夜がほんのり

と明ける、薄明のころ。男女の逢瀬が終わる時刻である。

明けぬ連盤あけぬれは

くる、

ものとは

知な可しりから

奈越なを(ほ)

うら

免しめき

阿保希あほけ

可奈か



後朝の悲しみきんぎぬ

朝は夜を共に過ごした恋人同士が別れなければならぬ時
刻だから、恨めしく思われるのである。後朝きんぎぬの悲しみを詠じ
た古歌としては、

しのめのほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなる
ぞかなしき (古今和歌集 恋三・六三七 読人しらず)
という作がある。それにも通ずるものがあるが、このような
悲しみは男が女のもとに通い、夜が明ければ男は帰る通い婚かよこ
という形式の結婚生活を背景としてはじめて理解されるもの
であろう。

嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は
いかに久しきものとかは知る

右大将道綱母

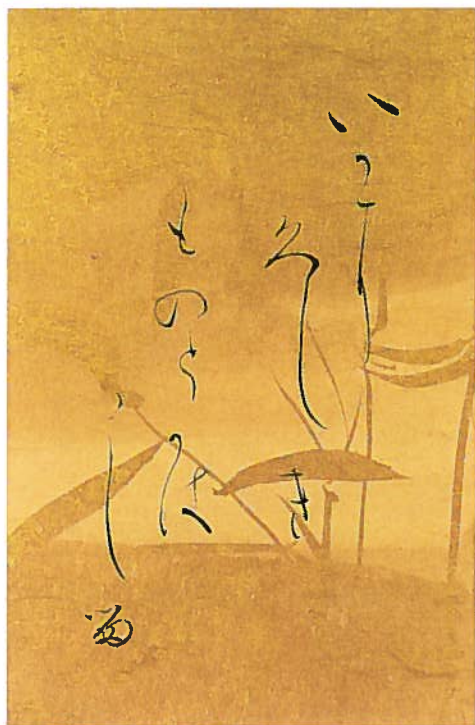


あなたがおいでにならないのを嘆きながら、一人で寝る夜が明けるまでの時間は、どんなに長いものか、あなたはわかりになるでしょうか、おわかりにならないでしょう。

◇拾遺和歌集 卷十四・恋四・九一二 詞書「入道撰政まかりたりけるに、門を遅く開けければ、立ちわづらひぬと言ひいれて侍りければ」

右大将道綱母 承平七（九三七）年？長徳元（九五）年五月二日か。陸奥守藤原倫寧の娘。天曆八年（九五四）に藤原兼家と結婚し、翌年道綱を生んだ。誠実とはいえない夫兼家との苦渋にみちた結婚生活を回想したのが、かの『蜻蛉日記』であった。本朝三美人の一人とされる。中古三十六歌仙。家集『傅大納言母上集』。『拾遺和歌集』初出。

■嘆きつつ 「つつ」は反復の意。 ■ものとかは知る 「かは」は反語を示す。「秋風に吹き返されて葛の葉のいかに恨みしものとかは知る」（金葉集・恋上・三九二 藤原正家）という用例がある。



間盤まはは
あく類る
の
獨ひとりぬるよ
な希支川けきつ、

い可耳かに
久ひさしき
ものとはかは
し留る

待つしかない女の恨み言いひご

『蜻蛉日記』巻上には、この歌が詠まれたときのことが詳しく語られている。それによれば、作者が兼家と結婚した翌年、道綱が生まれてまもなく、天曆九年の初冬のこと、兼家は用事があると言つて作者の家から出ていったが、怪しんだ作者が召使いに後をつけさせると、町小路の女の所に車を止めたことがわかった。愛人を作っていたのであつた。それから二、三日経つて、兼家が暁に門をたたいたが開けさせなかつたところ、兼家は愛人の家に行つてしまつたらしい。その翌朝、色変わりした菊に添えて送つた歌がこの作である。兼家の返歌は「げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸も遅くあくるはわびしかりけり」と、女の訴えを平然とはぐらかしたものであつた。

『大鏡』巻四、兼家伝にもこの贈答歌は見られるが、そこでは「門を遅く開けければ、たびたび御消息言ひ入れさせ給ふに、女君」といい、『拾遺和歌集』の詞書に近い。当時兼家は大政治家であつたから、その夫婦間の機微を伝えるこの歌の詞書をもあえて和らげて記したのかもしれない。

忘れじのゆく末まではかたければ
 今日を限りの命ともがな

儀同三司母



あなたは決して忘れまいとおっしゃいます。けれどもいつまでもお心変わりなさらないことはありえないでしょうから、いつそこうしてお逢いできた今夜限りで、死んでしまいたいとうございます。

◇新古今和歌集 卷十三・恋三・一一四九 この巻の巻頭歌である。詞書「中関白通ひそめ侍りけるころ」

儀同三司母 高階貴子。生年未詳。長徳二(九九六)年十月没。従二位式部大輔成忠の娘。円融天皇の時代に仕仕して高内侍と呼ばれた。中関白藤原道隆と結婚して、伊周・隆家、一条天皇皇后定子らをもうけたが、中関白家の没落の悲運のさなかに没した。「儀同三司」は息子伊周が儀同三司(儀礼格式は三司、つまり太政大臣・左大臣・右大臣と同じ、准大臣)であったことによる呼称。「拾遺和歌集」初出。

■忘れじ 忘れまいの意で、変わらぬ愛を誓う男の言葉。■かたければ 困難なのでの意。男の誓いはあてにならないからというのである。なお、かるたは「かたけれど」となっている。■今日を限りの命ともがな 「今日を限り」は、結ばれた今日限りということ。命について「今日を限り」といった例には、くやくしくそのちにあはむと契りけるけふをかぎりといはましも

忘^{わす}連^れしの

ゆく未^{すま}

まて

八^は可^か多^た

け連^れと

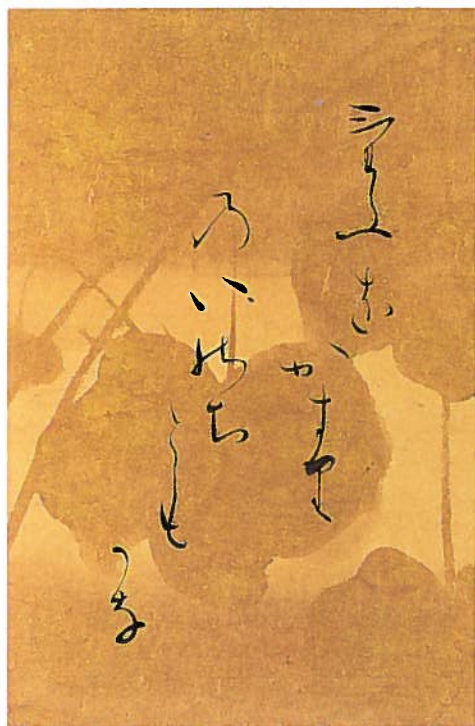
氣^けふを

か支^き里^り

乃^のい能^のち

とも

可^か奈^な



のを

との死に臨んでの詠がある。

(新古今和歌集

哀傷・八五四

藤原季繩)

愛の永遠への懷疑

『新古今和歌集』の詞書にいう「中関白」とは、作者の夫道隆のことである。つまり、「忘れじ」の言葉は、夫道隆の誓いであつた。道隆は赤染衛門の姉妹とも交渉があつたらしいが(五九番歌参照)、正室としての作者を守り通したことは、「枕草子」積善寺供養の段によつて知られる。「忘れじ」という誓いの言葉は偽りではなかつたのである。

男の心変わりや日常茶飯事で、恨みながらもそれを受け入れねばならなかつた当時の女にとって、男の誓いの言葉を棄天的に信じきることなど到底不可能であつただろう。だからこそ今夜の逢瀬に全てを賭け、燃焼し尽くそうとするのであつた。

滝の音は絶えて久しくなりぬれど

名こそ流れてなほ聞こえけれ

大納言公任

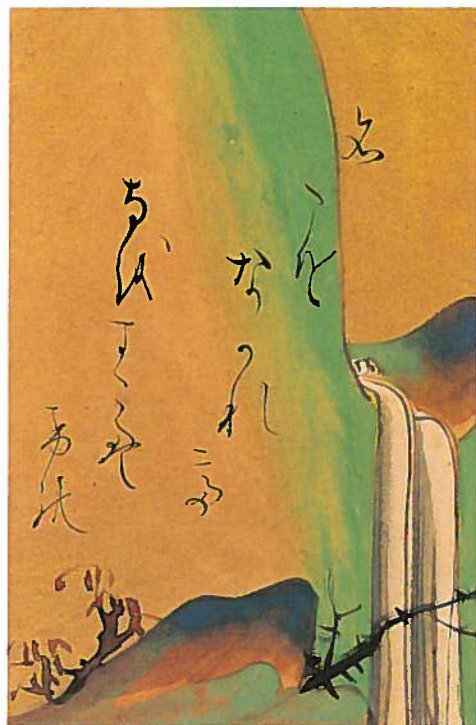


長い歳月が経ったけれども、すばらしい滝だったという
評判は世間に流れ、今でもやはり聞こえてくるよ。

◇千載和歌集 卷十六・雑上・一〇三二 詞書「嵯峨の
大覚寺にまかりてこれかれ歌よみ侍りけるに、よみ侍り
ける」。『拾遺和歌集』卷八・雑上・四四九にも、「大覚寺
に人々あまたまかりたりけるに、古き滝をよみ侍りける」
の詞書の下に収められているが、定家本系を含む現存諸
本のほとんどが初句を「滝の糸は」とする。

大納言公任 藤原公任。康保三（九六六）年〜長久
二（一〇四一）年一月一日。七十六歳。廉義公関白太政
大臣頼忠の息子。母は代明親王の三女厳子女王。正二位
権大納言に至り、四条大納言と呼ばれた。詩歌・管絃に
通じ、三船の才をもって知られる。撰集『拾遺抄』、『三十
六人撰』、『金玉集』、『和漢朗詠集』、『歌論書』、『新撰髓脳』、『和
歌九品』、『有職故実書』、『北山抄』などの編著書がある。中
古三十六歌仙。家集『前大納言公任集』、『拾遺和歌集』
初出。

■名こそ流れて 「名」は評判・名声。「流れて」は、流れ伝わ



瀧たきの音盤おとは

堂衣天たえて

ひさしく

成ぬ連なりと

名な

こ楚そ

名可禮なかれ

奈越支なをほき

希禮けれ 盈え 亭て

の縁語。

歌いつがれた大覚寺の滝

大覚寺は嵯峨の古刹である。ここには、昔嵯峨天皇が作られた滝の遺構があり、滝殿が設けられていた。「前大納言公任集」に見えるこの歌の詞書や「権記」(藤原行成の日記)によれば、長保元(九九九)年九月十二日に左大臣道長の供をして「大覚寺滝殿栖霞観」に赴いた折、「初到滝殿」という題で公任が詠じたのがこの作であった。

大覚寺の滝殿はこの後も長く「名こそ流れて」歌い続けられる。赤染衛門が「大覚寺のたきどのをみてよみ侍りけるあせにけるいまだにかかりたきつせのはやくぞ人はみるべかりける」(後拾遺和歌集「雑四・一〇五八」と詠み、また西行も「大覚寺の滝殿の石ども、閑院にうつされて、あともなくなりたりとききて、見にまかりたりけるに、赤染が、いまだにかかりとよみけん思ひ出でられて、あはれに覚えければいまだにもかかりといひしたきつせのをりまでは昔なりけん」(「山家集」下・雑・一〇四八)

と歌った。その遺跡なるものが「名古層の滝」と呼ばれて、今も大沢池のほとりに残っている。

あらざらむこの世のほかの思ひ出でに
いまひとたびの逢ふこともかな

和泉式部



わたしはこの病のために死んでしまおうでしょう。あの世への思い出として、死ぬ前にもう一度あなたにお逢いしようございます。

◇後拾遺和歌集 卷十三・恋三・七六三 詞書「こころ例ならず侍りけるころ、人のもとにつかはしける」

和泉式部 生没年未詳。生年は円融朝の頃（九七〇年代）か。越前守大江雅致の娘。母は越中守平保衡の娘。長徳頃に和泉守橘道貞の妻となったので和泉式部と呼ばれたという。道貞との間に六〇番の作者小式部内侍を儲けたが、のち道貞と離別し、冷泉院の皇子弾正宮為尊親王、次いで帥宮敦道親王と恋愛した。「和泉式部日記」は為尊親王の没後、敦道親王との恋の経緯を綴ったものだが、他人の作とみる説もある。のち一条天皇の中宮藤原彰子に女房として出仕し、道長の家司藤原保昌の妻となった。中古三十六歌仙。家集「和泉式部集」。拾遺和歌集」初出。

■あらざらむこの世のほか 「死後」というのに同じ。「この世のほか」は現世の外、すなわち来世の意。 ■いまひとたびの

あらさ羅ら

無む

此このよの

外ほか乃の

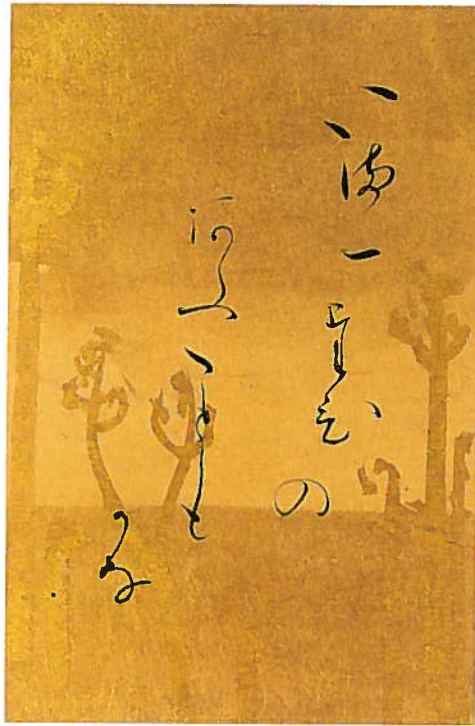
思おも出ひで耳に

い満ま一ひと堂た飛ひ

の

阿あふことも

可か奈な



う一度の意。 ■違ふこともがな 「もがな」は願望の終助詞。

死ぬ前にあなたに一目逢いたいという願い

『後拾遺和歌集』の詞書ことばがきによると、病床びとこに臥ふしていたとき、恋人に書き送った歌ということである。『和泉式部集』にも、「心地あしき頃、人に」として見える。「人」は恋人であるが、誰をさすかはわからない。

死ぬ前に愛する者に逢いたいという願いは、たとえ来世を信じようと信じまいと、いつの世のどこの国の人も変わりないであろう。そういう本音を率直に表白した歌である。和泉式部は、極めて技巧の勝った作を当意即妙に歌う一方で、このように無技巧な、真率の響きというような歌をも詠んでいるのである。しかもそれは病の床で詠まれたものであった。人心に訴える和歌の力というものを思わせるような作であるといつてよいであろう。

めぐり逢^あひて見しやそれとも分かぬ間に
雲隠^{かく}れにし夜半^{よは}の月影

紫^{むらさき}
式^{しき}
部^ぶ



空を行きめぐり、それかともはつきりと見定めないうちに、雲の中に隠れてしまった夜半の月。ちょうどそのように、たまたま出会ったのが本当に幼友達のあなたなのか、定かに見分けられないうちに、あなたは姿を隠してしまいましたね。

◇新古今和歌集 卷十六・雑上・一四九七 詞書「はや
くより童友達に侍りける人の、年ごろ経てゆきあひたる、
ほのかにて、七月十日のころ、月にきほひて帰り侍りけ
れば」

紫式部 生没年未詳。天禄元(九七〇)年頃、長和
三(一〇一四)年頃か。越後守藤原為時の娘。右衛門権佐
藤原宣孝の妻となり、五八番の作者大式三位を儲けた。
宣孝の没後、中宮彰子(上東門院)に出仕し、「源氏物語」
「紫式部日記」を書いた。中古三十六歌仙。家集「紫式
部集」。「後拾遺和歌集」初出。

■めぐり逢ひて 「めぐり」は下の「月かげ」の縁語。表面上は
月とのめぐりあい、裏に幼友達との再会をいう。 ■見しやそ

れとも 「や」は疑問の系助詞。「それ」は表面上は目、裏は友達

免く里

阿ひ

天て

三みや
曾連

とも分

ぬ方に

雲

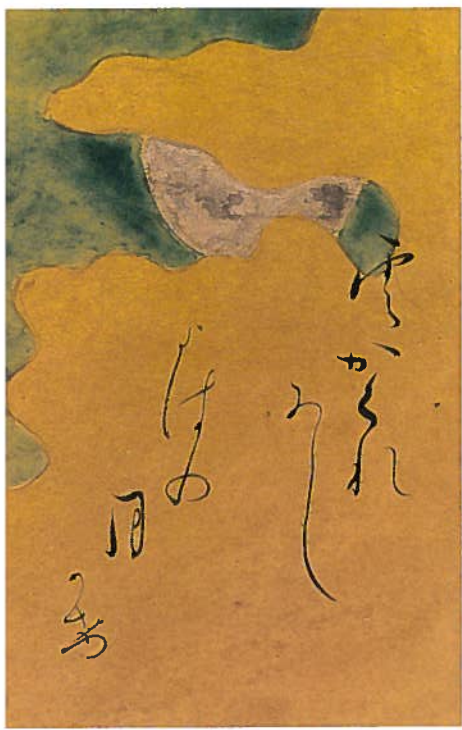
かくれ

爾し

よはの

月

可希



の月は早く沈んでしまふ。■夜半の月影 「月かげ」を「月かな」とする本文もある。「月」は幼友達の比喩。

女友達との別れ

『紫式部集』の巻頭歌である。ということは、彼女にとって相当大切な歌であることを意味するのだろう。

忘るなよほどは雲るになりぬとも空行く月のめぐりあふま
で (拾遺和歌集 雑上・四七〇、橘忠幹)

の古歌を念頭に置いて詠んだことは確かであろう。この古歌は『拾遺和歌集』の詞書に橘忠幹が遠国に行く際恋人に送った歌とあり、『伊勢物語』第十一段では男が東国への旅路の途中友達に言い送った歌と語る。紫式部の作においては、友達との離別であった。

紫式部はこの他にも
北へゆく雁のつばさに言づてよ雲のうは書きかき絶えずし
て (新古今和歌集・離別・八五九)

と、女友達との離別の歌を詠んでいる。これらの歌を見るに、恋人に対するにも似た執着を同性の友に対して抱く、この女性の素顔がのぞいているように思われる。

ありまやまゐるな
有馬山猪名の篠原風吹けば

いでそよ人を忘れやはする

大式だいしき三位み



有馬山から猪名野の篠原に風が吹きおろすので、笹はいつせいにそよそよとそよぎます。そうですよ、そのようにあなたからお便りを頂いて心も揺れ動くわたしですもの。どうしてあなたのことを忘れるものですか。

◇後拾遺和歌集・卷十二・恋二・七〇九 詞書「かれが
れなる男の、おぼつかなくなどいひたりけるによめる」

大式三位 生没年未詳。長保元（九九九）年頃誕生か。本名賢子。藤三位とも呼ばれる。右衛門権佐藤原宣孝の娘。母は紫式部。中納言藤原兼隆の妻、のちに大宰大式高階成章の妻となり、また後冷泉天皇の乳母を勤めて従三位に叙され、大式三位と号した。家集『大式三位集』、『後拾遺和歌集』初出。

■有馬山 摂津国の歌枕。神戸市と西宮市の境に位置する山地で、付近に有馬温泉がある。

■猪名の篠原 猪名野ともいわれ、やはり摂津国の歌枕。伊丹市の、猪名川と武庫川の間をさす。

■風吹けば この句までが下句を起す序詞とみられる。風が吹くと篠原がそよぐことから、同音の「そよ」を導く。

■いでそよは、篠原が風を誘う。『いで』は勧誘・決意などの意の副詞。「そよ」は、篠原が風を

ありまやま
有馬山

いな
奈農

さ、原
原

かせ
風ふり

は
盤

いて
天

そ
曾よ

ひと
人を

わす
わすれや

は
は春



風になびく篠原に託した恋心

『後拾遺和歌集』の詞書によれば、「かれがれになる男」つまり通ってくることもとだえがちになつてきた、愛情が移ろつてきた男が、「あなたは心変わりしたのではないかと気がかりです」などと、身勝手なことを言つて寄こしてきたので詠んだものである。

「有馬山猪名の篠原」の自然描写である序から主意へと転ずる転じ方が意表をついている。そこがこの歌の面白さであるのかもしれないが、わかりにくいことも確かである。なぜこの摂津の歌枕が選ばれたのであろうか。早く『万葉集』に見える歌枕であるが、『枕草子』の「山は」や「野は」には見出されない。あるいは、「かれがれになる男」が摂津の国の「有馬山猪名の篠原」の地にゆかりのある男だったのであろうか。末句の「忘れやはする」は、この時代に愛用された言い回しらしい。恋歌に用いられた場合は、一種の殺し文句であつたのだらう。

やすらはで寝なましものをさ夜更ふけて
かたぶくまでの月を見しかな

赤あか染ぞめ衛ゑ門もん



ためらわずに寝てしまえばよかったのに、わたしは寝ずにあなたのおいでを待ちしていて、西の空に傾くまで月を見ておりました。

◇後拾遺和歌集 卷十二・恋二・六八〇 詞書「中の関白少将に侍りける時、はらからなる人にも言ひわたり侍りけり、頼めて来ざりけるつとめて、女に代りてよめる」

赤染衛門 生没年未詳。長久二（一〇四一）年までの生存が知られる。大隅守赤染時用の娘とされるが、実父は四〇番の作者平兼盛であるという。式部大輔大江匡衡の妻で、七三番の作者権中納言匡房の曾祖母。初め藤原道長の妻鷹司殿倫子に、のち一条天皇の中宮上東門院彰子に仕えた。「栄花物語」前篇の作者かといわれる。中古三十六歌仙。家集「赤染衛門集」。「拾遺和歌集」初出。

■やすらはで ためらわずにの意。 ■寝なましものを 「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形、「まし」は仮定の助動詞。寝てしまえばよかったのに、の意。

やすら

はて

ねな

万し

ものを

さよ更ふけ

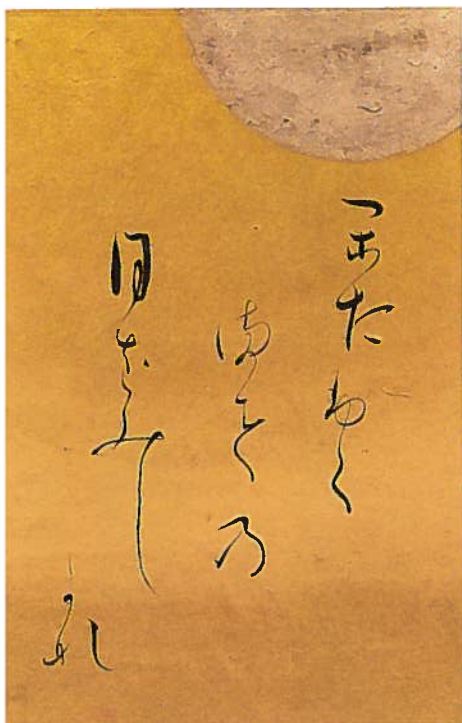
亭て

閑かた布ふく

満ま天て乃の

月つきをぬし

可か那な



恋歌の代作

『後拾遺和歌集』詞書の「中の閑白」とは、儀同三司母の夫藤原道隆。「はらからなる人」（母を同じくする姉妹）のため
の代作であるが、当人の心になりきって詠んでいる。作者と
しても感情を移入しやすい状況であったのであろう。あてに
させておいて結局待ちぼうけをくわせた薄情な男への怨情を
やんわりと歌って、すぐれている。もしかしたら、赤染衛門
自身この清げな公達きんだちにひそかな慕情を抱いていたのかもしれ
ない。

ただし、『馬内侍集』に「今宵かならず来むとて、来ぬ人の
もとに」という詞書の下に全く同じ歌が収められており、藤
原俊成の『古来風体抄』でも「後拾遺和歌集」の秀歌例でこ
の歌の作者を馬内侍としていることは不審である。馬内侍は
道隆の弟道兼や道長とも贈答しているから、赤染衛門と同時
代だが、彼女が赤染衛門の「はらから」とは考えがたく、第
一他人に代作させるとは思われない。もしも、どちらかの家
集が誤って他人の歌を入れてしまったのではないならば、意識
的に他人の作を借用したことになる。この時代には案外そう
いうこともありえたのではないか。女房社会のいわば共有財
産であったのかもしれない。

おほえやま
大江山いく野の道の遠ければ
またふみも見ず天の橋立
あまはしだて

こしきぶのななし
小式部内侍



おほえやま
大江山や生野を越えてゆく丹後への道のりは遠く遙か
ですから、わたしはまだ天の橋立を踏んでみたことはござい
ませんし、丹後の母からの文もまだ届いておりませ
ん。

◇金葉和歌集 卷九・雑上・五八六 詞書「和泉式部保
昌に具して丹後国に侍りけるころ、都に歌合のありける
に、小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを、中納言定
頼局のかたにまうできて、歌はいかがせさせ給ふ、丹後
へ人はつかはしてけむや、使まうでこずや、いかに心も
となくおぼすらむなどたはぶれて立ちけるをひきとどめ
てよめる」

こしきぶのななし
小式部内侍 生年未詳。万寿二（一〇二五）年十一
月没。陸奥守 橘 道貞の娘。母は五六番歌の作者和泉式
部。一条天皇の中宮上東門院彰子に出仕した。大二条関
白藤原教通に愛され静円を生み、この他にも権中納言定
頼にも愛された。後に、権中納言藤原公成の子を出産後、
母に先立って没した。中古三十六歌仙。「後拾遺和歌集」
初出。



大江山おほえやまいく

の、道みち

乃の

登とをぼ

け連れ八は

満多またふみも

三寸みす

天能者あまのはし

立たて

郡大江町の境に位置する。 ■いく野 丹後国の歌枕。福知山市生野。 ■まだふみも見ず 「ふみ」は「道」の縁語「踏み」に

「文」を掛ける。「ふみもまだ見ず」という形もある。 ■天の橋立 丹後国の歌枕。京都府宮津市。日本三景の一として有名。

当意即妙の歌で相手をやりこめた小式部内侍

『金葉和歌集』の詞書にいう「保昌」は和泉式部の夫だが、

小式部は和泉守橘道貞と和泉式部との間に生まれた娘である。

そして、「定頼」は小式部の恋人の一人であった。彼の戯言は

もとより、「お母さんに歌合の代作をお願いしたのでしょう」というからかいである。その袖を捉えて詠んだ歌がこれである

という。つまり「私は母に歌の代作などしてもらっており

ません」という抗議の歌である。「俊頼髓脳」ではしばらく返

歌をしようと案じた定頼はどうにも思いつかず、小式部内侍

に捉えられた直衣の袖を振り切つて逃げたと語っている。

当意即妙の秀歌として、次の六一番歌の伊勢大輔の作、そ

れから「大鏡」巻六の昔物語で紀貫之の女の作と伝える「内

より人の家に侍りける紅梅を掘らせ給ひけるに、鶯の巣くひ

て侍りければ、家あるじの女まづかく奏せさせ侍りける 勅

なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかか答へむ かく

奏せさせければ、掘らずなりにけり」(『拾遺和歌集』雑下・

五三二) などとともに、三才女の名歌とされるものである。

いにしへの奈良の都の八重桜

けふ九重このへに匂にほひぬるかな

伊勢いせ大輔たいふ



古京ふるきやう奈良の都にひっそりと咲いておりました八重桜が、今日はこのように京の都に献上されて、九重の雲居くもい近くに色美しく咲いていますこと。

◇詞花和歌集 卷一・春・二七 詞書「一条院御時、奈良の八重桜を人のたてまつり侍りけるを、そのをり御前に侍りければ、その花をたまひて歌よめと仰せられければよめる」

伊勢大輔 生没年未詳。祭主大中臣輔親の娘。筑前守高階成順の妻となり、康資王母らを儲けた。上東門院彰子に出仕し、紫式部・和泉式部・相模・源経信などとも交際があった。中古三十六歌仙。家集『伊勢大輔集』。『後拾遺和歌集』初出。

■いにしへの奈良の都 奈良(平城京)が奈良時代の都であったことからいう。「いにしへ」と「けふ」は対となり、従って、「奈良の都」と京の都という対比も当然意識されているだろう。「奈良」に「七」を響かせ、「八重」「九重(宮中)」と縁語関係となる。



い丹しへ

の

なら能

都

乃八重

さ九ら

けふ

こゝのへ

耳に

句ひ

ぬる

哉

歌才を試された伊勢大輔

これは作者伊勢大輔にとつて、いわば新入社員登用のための最初の試験のような機会であつた。彰考館本「伊勢大輔集」中のこの歌には「女院の中宮と申しける時、内におはしまししに、奈良から僧都の八重桜をまゐらせたるに、今年の取入れ人は今参りぞとて、紫式部のゆづりしに、入道殿聞かせたまひて、ただには取り入れぬものと仰せられしかば」という詞書がある。「女院」というのは上東門院彰子で、彼女が中宮であつたところのこと。奈良の僧房から献上された八重桜を受け取る役を仰せつかつた新参女房の伊勢大輔が、帝（一条天皇）や中宮、道長、そして古参女房紫式部などの注視の裡に即詠した、いわば答案ともいふべきものがこの歌である。「いにしへ」と「けふ」とが対をなし、「八重」と「このへ」とが数の連鎖を形成する。さらに「いにしへ」の「へ」は「八重」「このへ」の「へ」と響き合い、「奈良」の「な」も、以下の「や」「この」とかすかな共振音を奏でる。「の」の繰り返しも、やわらかい感じのナ行音の反復で美しい。そして、今の都人からはほとんど忘れられかけている旧都の桜が九重の雲居に咲くという晴れがましさを愛で賞し、そのことによつて天皇の聖徳をたたえた。

このみごとな答案によつて、伊勢大輔は紀内侍（貫之女）、小式部内侍とともに、三才女の一人とされた。

夜をこめて鳥のそら音ははかるとも
よに逢坂あふさかの関は許さじ

清少納言



まだ夜明けまでには間があるのに、あの孟嘗君もうしようくんの食客のように偽いつはりって鶏鳴けいめいの真似まねをしても、愚かな函谷関かんごくかんの関守かんしならばともかく、逢坂あふさかの関の関守は、まさか旅人の通行を許さないでしょう。——わたしはだまされて、たやすく戸を開けてあなたと逢あつたりはいたしませんよ。

◇後拾遺和歌集 卷十六・雑二・九四〇 詞書「大納言行成物語などし侍りけるに、内の御物忌に籠ればとていそぎ帰りて、つとめて、鳥の声にもよほされてといひおこせて侍りければ、夜深かりける鳥の声は函谷関のことにやといひつかはしたりけるを、たちかへり、これは逢坂の関に侍りとあれば、よみ侍りける」

清少納言 生没年未詳。肥後守清原元輔の娘。深養父の曾孫に当たる。初め陸奥守橘、則光と、のちに撰津守藤原棟世と結婚している。則光との間に則長、棟世との間に小馬命婦を儲けたらしい。一条天皇の皇后定子に出仕し、「枕草子」を書いた。中古三十六歌仙。家集「清少納言集」。「後拾遺和歌集」初出。

■鳥のそら音 にせの鶏鳴。孟嘗君が鶏鳴の真似を特技とする食

よ越をこめ天て

鳥とりの

曾そら

ね者は

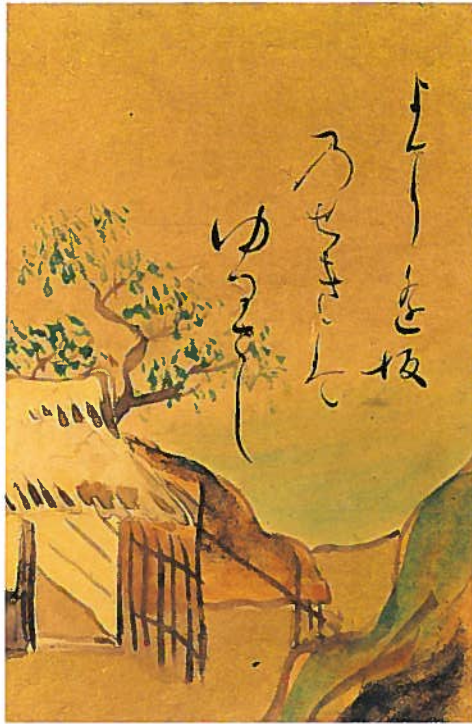
は可かる

とも

よ耳に逢あ逢ふ坂さか

乃のせき盤は

ゆるさし



た故事（「史記」）をさす。 ■よに 下の打消意志の助動詞「じ」と呼応して、けつしてしまいの意。 ■逢坂の関 近江国と山城国との境にある逢坂山に設けられていた古関。「逢ふ」が掛けられている。

男友達と交した戯れの歌

詞書中の「大納言行成」とは、四納言の一人藤原行成のこと。この話は「枕草子」に、詳しく記されている。そこには、この歌に対する「逢坂は人越えやすき関なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか」という、行成の返歌も引かれている。漢才を誇示して男性貴族を閉口させてやろうとして詠んだ清少納言の歌に対して、行成は「あなたはだれとでも逢うから、鶏が鳴かなくても扉を開けて待つているとか世間ではいつてますよ」とやり返したのである。

もとよりこれは親愛のあまりの戯れである。恋の贈答ではなく、話せる異性の友同士の気のきいた会話であるにすぎない。そういう友を持つていたことは、清少納言は言うまでもなく、やはり行成にとっても楽しいことだったであろう。

今はただ思ひ絶えなむとばかりを
人づてならでいふよしもがな

さきやうのだいぶみちまさ
左京大夫道雅



今となつては、ただもうあきらめましようという一言だけを、せめて人づてでなく、直接あなたに言うすべがあつたらなあ。

◇後拾遺和歌集 卷十三・恋三・七五〇 詞書は同じく
道雅の歌七四八・七四九の「伊勢の斎宮わたりよりまかりのほりて侍りける人に忍びて通ひけることを、おほやけも聞こしめして、守り目など付けさせ給ひて、忍びにも通はずなりにければ、よみ侍りける」が掛かる。

左京大夫道雅 藤原道雅。正暦三(九九二)年の誕生か。天喜二(一〇五四)年七月二十日没。儀同三司伊周の息子。母は大納言源重光の娘。左京大夫従三位に至る。素行が悪く、荒三位とあだ名された。中古三十六歌仙。「後拾遺和歌集」初出。

■思ひ絶えなむ 断念しようの意。 ■人づてならで 「で」は打消の接続助詞。人を介さず、直接にの意。 ■いふよしもがな 「もがな」は願望の終助詞。言うすべがあつたらなああの意。

今いまは多た々た

おも飛ひ

堂衣たえなむ南なむ

登者とほ可利かり

を

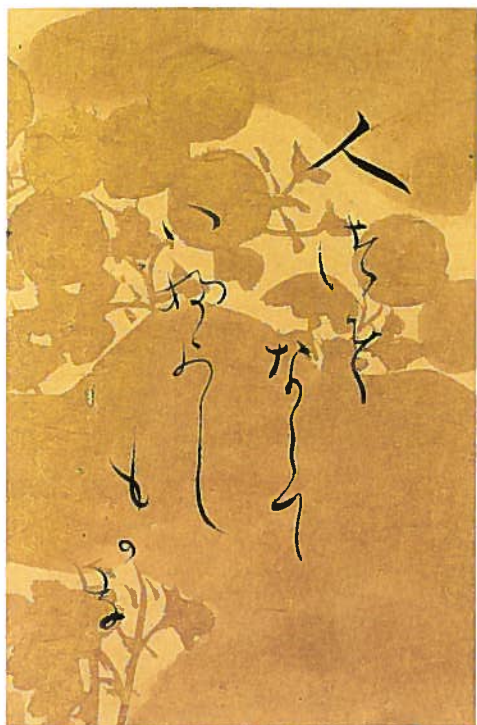
人徒ひと天て

ならて

い婦ふよし

も

可か奈な



恋人との仲を引き裂かれた男の絶唱

詞書中の「伊勢の齋宮わたりよりまかりのほりて侍りける人」は、三条院の皇女で前齋宮であった当子内親王のことである。この二人の恋愛事件は、当子が伊勢から帰京した翌年の寛仁元（一〇一七）年ころから世語りとされたらしい。『荣花物語』巻十二「玉の群菊」および巻十三「木綿四手」にはこの事件が詳しく語られている。三条天皇は、素行が悪いことと有名な道雅がひそかに通うようになったことを聞きつけて、激怒し、二人の仲を裂こうとしたのである。結局、当子は尼となり、二十三歳の若い身空で世を去ってしまった。愛している以上、「思ひ絶えなむ」などというのは、決して口にしたくない言葉である。しかし、事態はそれを表明して身を引かざるをえないまでに追い込まれている。それならば、せめてその一言だけでも直接愛する人に言いたい。しかし、周囲にはばまれて、それすらできないという。悲痛である。藤原清輔は『袋草紙』で、道雅三位はそれほどの歌仙でもないのでこの事件に際して詠んだ歌には秀逸が多いとして、「思ふままの事をば陳べ、自然に秀歌にしてあるなり。これ「志は中に有り、詞外に顕るの謂か」と言っている。

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに
あらはれわたる瀬々の網代木

権中納言定頼



朝ぼらけ（夜の明けがた）の宇治川では、一面に立ちこめていた川霧がところどころとぎれて、その絶え間から瀬々に掛けられた網代木がだんだん現れてきた。

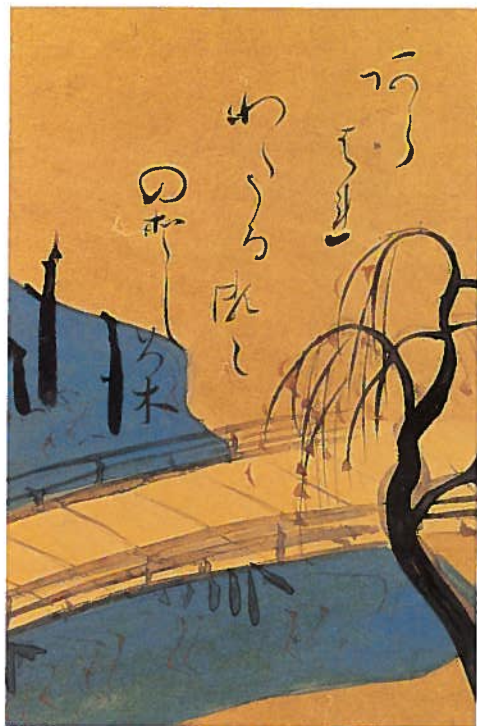
◇千載和歌集 卷六・冬・四一九 詞書「宇治にまかりて侍りける時よめる」

権中納言定頼 藤原定頼。長徳元年（九九五）〜寛

徳二年（一〇四五）一月十九日。四条大納言公任の息子。母は昭平親王の娘。権中納言四位に至り、四条中納言と呼ばれた。小式部内侍に六〇番の歌を詠ませた人で、他にも相模らと交渉があった。中古三十六歌仙。家集「四条中納言集」。『後拾遺和歌集』初出。

■宇治の川霧 宇治川の川面に立ちこめた朝霧。宇治川は山城国やましろのくにの歌枕。琵琶湖に発し、淀川よどがわに注ぐ。 ■あらはれわたる 「わたる」は「し続ける」の意の接尾語。

■網代木 杭を立てて、木や竹を編んだものを渡し、一部分だけを開けて魚を獲る仕掛け。宇治川の景物とされた。



あさ奉ら希

う治の川

霧

多衣

阿ら

者連

わ多る

瀬

の愛し

ろ木

宇治川の網代

柿本人麻呂が「もののふのやそ宇治川の網代木にいさよふ浪のゆくへ知らずも」(『万葉集』・巻三・二六四)と嘆じて以来、網代木は宇治川になくってはならない景物である。初瀬(長谷寺)詣でなどで大和地方へおもむく人は、途中宇治川を通る。その時、都人にとっては珍しいこの網代木に必ず目をとめたのだった。

たとえば、『蜻蛉日記』には「宇治の川によるほど、霧はきし方見えず立ちわたりて、いとおぼつかなし。車かきおろして、こちたくとかくするほどに、人声多くて、『御車おろしたてよ』とのしる。霧の下より、例の網代も見えたり。いふかたなくをかし」、また『更級日記』にも「いみじう風の吹く日、宇治の渡りをするに、網代いと近う漕ぎ寄りたり。音にのみ聞きわたりこし宇治川の網代の浪もけふぞ数ふる」と記されている。

そして、『源氏物語』でも、網代は都人の見物の対象とされている。「十月朔日ごろ、網代もをかしきほどならむ、とそそのかしきこえたまひて、紅葉御覧すべく申しさだめたまふ。

(中略)網代の氷魚も心寄せたてまつりて、いろいろの木の葉にかきませもてあそぶを……(総角)。このような都人達のパターン化した行動様式に則って、定頼も宇治に行くとき、まず網代の見え隠れする川面を望んだのであろう。

恨^{うら}みわび干^ほさぬ袖^{そで}だにあるものを
恋^{こひ}に朽^くちなむ名こそ惜^をしけれ

相^さが
模^み



恨^{うら}み嘆^{なげ}いた末、もう恨む気力もなくなつて、流す涙の乾かないわたしの袖、それが朽ちてしまっただけでも耐えられないのに、その上さらにわたしの名が実らぬ恋のため、に朽ちてしまうことが残念でなりません。

◇後拾遺和歌集 卷十四・恋四・八一五 詞書「永承六年内裏歌合に」

相^さ模^み 生没年未詳。正暦末年(九九四)ころ出生し、康平四年(一〇六一)以後没したか。母は能登守慶滋^{のとのかみとし} 保章の娘。源頼光の養女であつたという。若いころの女房名を乙侍従^{おとじじやう} といつた。相模守大江公資の妻となつたので相模と呼ばれたが、公資とはのちに離別した。藤原定頼^{さだより}とも交渉があつた。一条院の皇女一品宮脩子内親王に出仕している。中古三十六歌仙。家集「相模集」。後拾遺和歌集 初出。

■恨みわび 「わび」は接尾語的な用法で、恨むことにわびる、

つまりさんざん恨んだ末に、もう恨む気力もなくなつた状態をいう。 ■干さぬ袖だにあるものを 「干さぬ袖」とは、涙を乾かしきれぬ袖のことである。いつまでも乾かさないと、袖は朽ちて

うらみ陀むな

保ほさぬ

袖そで

堂たに有ある

毛ものを

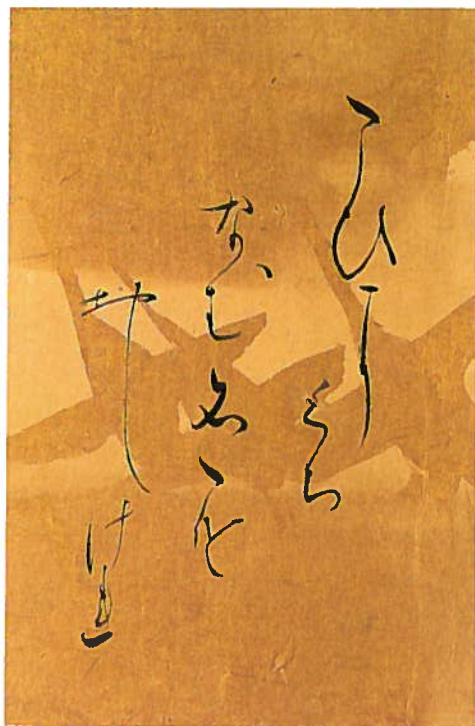
こひ耳に

くち

なむ名なこそ楚そ

おし

け連れ



浮き名を惜しむ女

古いにしへの女をは、あの女をは恋ををしているのだと世人よびに噂さされることをひどく懼おそれた。たとえば、藤原鎌足かまたりに求愛をされた時とき、鏡かがみの

王女おおみは

玉たまくしげ覆おおふを安やすみ開ひらけていなば君きみが名なはあれどわが名なし惜おぼしも

〔万葉集〕卷二・九三

と嘆なげいているし、また男おとこに「夢ゆめの中なかで逢あつた」と言いわれて

祈いのりけむことは夢ゆめにて限かぎりてよきても逢あふてふ名なこそをし

けれ

〔後拾遺和歌集〕雜二・九四五 四条宰相さいしやう

と詠よんだ女性おんなもいる。

このように、名なを惜おぼしむのは男おとこばかりではなく、女おんなも聡明さうめいな女おんなであればあるほど、名なを惜おぼしんだ。が、同時に、名なを惜おぼしむばかりに捨すて身みになれず、恋こひを遂つげえないこともあつたであらう。

もろともにあはれと思へ山桜
花よりほかに知る人もなし

さきのだいそうじやうぎやうせん
前大僧正行尊



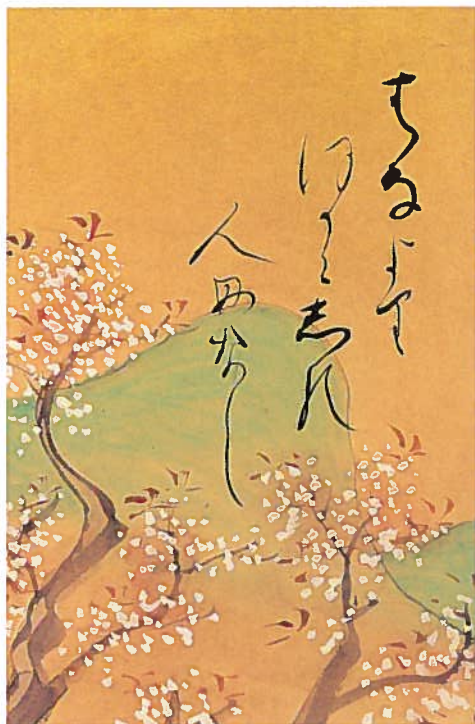
わたしがおまえをいとしく思うのと同じく、おまえもこのわたしのことをしみじみいとしいと思ってくれ、山桜よ。花であるおまえ以外、わたしは知る人もいないのだ。

◇金葉和歌集 卷九・雑上・五五六 詞書「大峯にて思

ひもかけず桜の花咲きたりけるを見てよめる」

大僧正行尊 天喜三(一〇五五)年、長承四(一一三五)年二月五日。八十一歳。俗姓三条源氏。参議基平の息子。母は権中納言藤原良頼の娘。園城寺(三井寺)に入り、天台座主となった。十六歳から熊野大峰を中心に、山伏修験の修行を重ね、その体験を和歌に詠んだ。家集「行尊大僧正集」。「金葉和歌集」初出。

■山桜 山桜よと呼びかけた句。 ■知る人もなし 「われを」
または「われは」知る人もいないという。



屋や満ま左さく良ら

哀あはれ登と思おもく
もろと毛もに

者は奈なよ里り

保ほ可か二志類にしる
人母ひとなし

深山の桜と孤独な修行者

詞書にいう「大峯」は、吉野の大峰山。現在の正称は山上ケ岳、標高一七一九メートル。古来山伏の修行の場として有名である。「思ひもかけず」は季節はずれのためではなく、契沖が「是は深山木はおほかた常磐木にて有る中に、桜のまれに有るをいふなり。」（『百人一首改観抄』下）というように、常磐木の中に桜を見出したからと見るべきであろう。

『行尊大僧正集』では、この歌の直前に「思ひかけぬ山中に、まだつぼみたるも交りて咲きて侍りしを、風に散りしかば」の詞書の下に

山桜いつをさかりとなくしてもあらしに身をもまかせつるかな

風に吹き折れても、なほめでたく咲きて侍りしかば折り臥せてのちさへにほふ山桜あはれ知らむ人に見せばや

の二首が収められている。

これら一連の作の中で読むと、行尊が「いつをさかりとなくして」山風に吹き折られ、吹き散らされそうになりながらも必死なまでに美しく咲いている山桜と自分自身とを、ほとんど同一視して詠嘆していることがよくわかる。

春の夜の夢ばかりなる手枕たまくらに
かひなくたたむ名こそ惜をしけれ

周防内侍すはうのなしいし

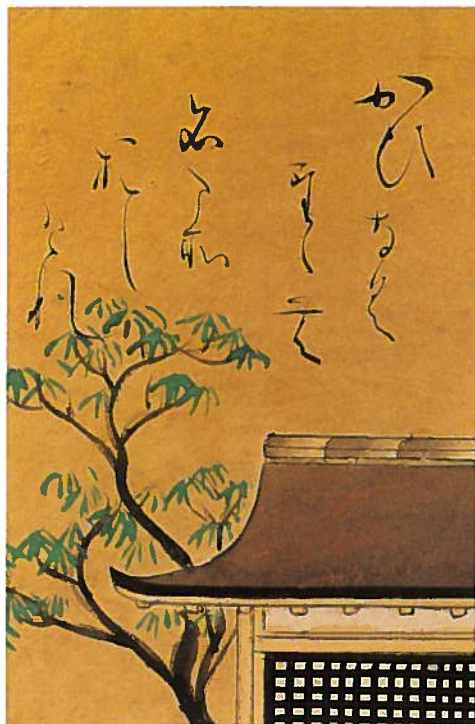


短い春の夜の夢のように、あなたの手枕たまくらをお借りしてうたたねの夢を結んだだけのことで、その甲斐かいもなく浮き名が立つのは残念でございます。

◇千載和歌集 卷十六・雜上・九六一 詞書「二月ばかり月明あかき夜、二条院にて人あまた居明して物語などし侍りけるに、内侍周防寄り臥して、枕もがなとしのびやかにいふを聞き、大納言忠家、これを枕にとてかひなを御簾みすの下よりさし入れて侍りければ、よみ侍りける」

周防内侍すはうのなしいし 生没年未詳。天仁二（一一〇九）年ころ没したか。周防守平棟仲の娘。母は源正職の娘。後冷泉・白河・堀河の三天皇に出仕した。藤原顕季、後拾遺和歌集 撰者藤原通俊、讃岐典侍などとも親交があった。家集 周防内侍集。後拾遺和歌集 初出。

■手枕 忠家が「これを枕に」と言つて御簾みすの下から腕うでをさし入れてきたのを受けた表現。 ■かひなく 「かひなく（甲斐なく）」に「かひな（腕）」を物名ふうに詠み入れた。 ■名 浮き名。



春はるのよ
能の
夢ゆめ
者は可かり
枕まくら
手た
耳みみ
な
留とどる

かひなき具ぐ
堂た、無む
名なこ所そ
於おし
介けれ

恋人同士を装ったたわむれのやりとり

詞書ことばがき中の「二条院」とは、一条院皇女で後冷泉院中宮の章子内親王の御所をいう。「大納言忠家」は藤原忠家、長家の息子、俊成の祖父である。忠家は周防内侍の歌に對して、返歌を詠んでいる。

契りありて春の夜深き手枕たまくらをいかがかひなき夢になすべき

〔千載和歌集〕雑上・九六一

周防内侍の歌の「夢ばかりなる」という句は、恋の歌によく用いられるもので、なまめかしい連想を起こさせる句である。それに「春の夜の」と冠することによつて、いよいよ甘美な雰囲気を出した。これに応えた忠家の歌は、「契りありて」と前世の因縁をちらつかせ、「いかがかひなき夢になすべき」と迫つてゆくあたり、中年貴族の一種の図々しさが感じられて、面白い。

しかし、これは擬似恋愛である。二条院で殿上人や女房が大勢集まっていた場で披露してみせた、当意即妙の機知に富んだやりとりだったのである。

心にもあらで憂き世に長らへば
恋しかるべき夜半の月かな

三
条
院



不本意ながら、この憂くつらい世に生き永らえていたならば、きつと恋しく思い出されるに違いない、今宵の月だなあ。

◇後拾遺和歌集 卷十五・雑一・八六一 詞書「例ならずおはしまして、位などさらむとおぼしめしけるころ、月の明かりけるを御覧じて」

三条院 貞元元(九七六)年〜寛仁元(二〇一七)年五月九日。四十二歳。諱は居貞。第六十七代天皇。冷泉天皇の第二皇子。母は藤原兼家の娘贈皇后宮超子。寛弘八(一〇一一)年六月十三日一条天皇の讓位により踐祚したが、眼病のため道長の圧迫に屈し、長和五(一一〇一)年一月二十九日後一条天皇に讓位した。「後拾遺和歌集」初出。

■心にもあらで「で」は打消の接続助詞。不本意にも意。■長らへば「ながらへ」は「ながらふ」の未然形。「ば」の仮定の接続助詞。■恋しかるべき「べき」は推量の助動詞「べし」の連体形。

こゝろ

爾も

あら天

此よ二

な可らへ
は

恋し

可類遍き

よ者乃

月可那



衰えゆく身にふりそそぐ月光

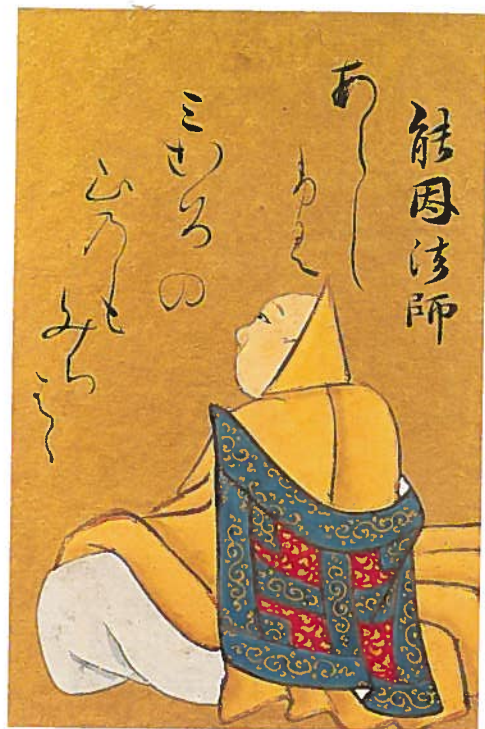
この歌が詠まれた事情は、『栄花物語』巻十二「玉の村菊」に詳しく語られている。それによれば、長和四（一〇一五）年十二月十日余りの月を見て、中宮妍子（藤原道長の娘）に与えた歌である。同物語には「中宮の御返し」とのみあって、返歌は記されていない。詞書にいう「例ならず」とは、重病を患つての意である。この帝は眼病を患つていた。「こと人の見たてまつるには、いささか変らせたまふことおはしまさざりければ、そらごとのやうにぞおはしましける」（『大鏡』巻一）という。白内障であつたかといわれている。

三条天皇はこの歌を詠んだ翌年の正月二十九日讓位し、その後まもなく、愛する皇女当子内親王と藤原道雅とのスキヤンダルに心を痛めねばならなかつた。このような苦渋にみちた自分の将来を予感しつつ、暗澹たる思いで、わずかに見える美しい月光をふり仰いで詠んだのであつた。撰者の定家ははじめとして、三条天皇の悲運の人生を知る者はみな、この歌の奥にひそむ悲痛な響きに吸い寄せられるような思いであつたに違いない。

嵐あらし吹く三室みむろの山ののもみぢ葉はは

竜田たつたの川のの錦にしきなりけり

能因のういん法師ほふし



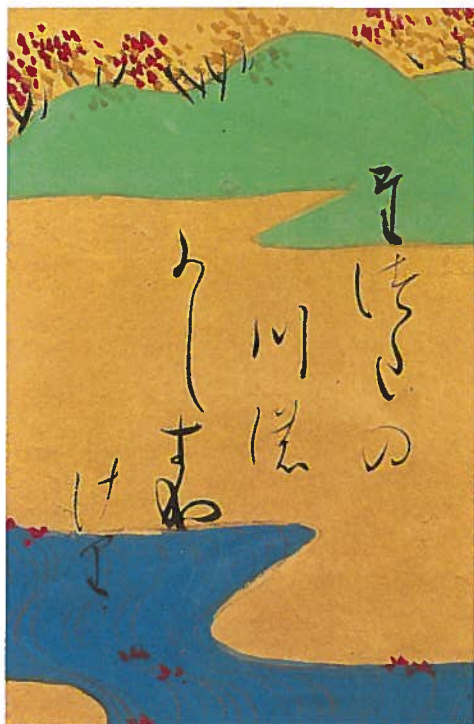
烈しい山風が吹き散らした三室山の紅葉は、さながら竜田川にさらす錦であるよ。

◇後拾遺和歌集 卷五・秋下・三六六 詞書「永承四年内裏歌合によめる」

能因法師 永延二(九八八)年誕生。没年未詳。俗名楠 永愷。父については長門守元愷、肥後守為愷両説がある。大学に学び、文章生となり肥後進士と称されたが、出家して初め融因、のち能因と改めた。藤原長能に和歌を学び、和歌六人党の人々からは先輩として慕われ、歌会などに同席している。数寄の者として逸話が多い。奥州・中国・四国など各地を旅している。中古三十六歌仙。編著書に私撰集『玄々集』、歌学書『能因歌枕』がある。家集『能因集』。『後拾遺和歌集』初出。

■嵐 山風。 ■三室の山 大和国の歌枕。奈良県生駒郡斑鳩町。竜田川の下流西岸の丘で、三語山・神奈備山とも呼ばれた。

■竜田の川 大和国の歌枕。三室山の東のふもとを流れる川。紅葉の名所として有名であった。



あらし

布具ふぐ

三むろの

山乃もやまの

みち

者は、
は

堂徒多のたつた

川濃かはの

爾し支成にきなり

けり

錦繡に彩られた大和の秋景色

永承四(一〇四九)年十一月九日『内裏歌合』で勝とされた歌である。竜田川に散り敷いた三室山の紅葉を錦に見立てた、

竜田川もみぢ乱れて流るめり渡らば錦なかや絶えなむ

(古今和歌集 秋下・二八三 読人しらす)

神なびの御室の山を秋ゆけば錦たちきるこちこそすれ

(同 秋下・二九六 壬生忠岑)

などの古歌を念頭に置いたものであろう。

尾形光琳の竜田川の図が思い浮かぶような、絢爛豪華な情景を詠んだものであるが、かといって単に静的な世界とは言えない。初句ではこの静かな絵のような風景が、「あらし」によつてもたらされたものであることをおさえている。歌合の場で披講された歌としてはふさわしい作であるといえよう。

しかし、これを漂泊の歌人能因の代表作と見なすことはためらわれる。「能因集」は自撰家集だが、能因はその中にこの歌を選び入れていない。近代の諸注釈書においても、この歌の評価はきわめて低い。歌の出来不出来はさておくとしても、数寄の遁世歌人能因の面目躍如の歌とはいいい難いことは確かであろう。

寂しさに宿を立ち出でてながむれば

いづくも同じ秋の夕暮ゆふぐれ

良暹法師りやうぜんほふし



さびしさに耐えかねて、家を出てあたりをじつと見つめると、どこも同じようにさびしい秋の夕暮れ。

◇後拾遺和歌集 卷四・秋上・三三三 詞書「題しらず」

良暹法師りやうぜんほふし 生没年未詳。長徳四(九九八)年ころ〜康

平七(一〇六四)年ころか。父は未詳だが、母は藤原実方みかたの家の童女白菊という説がある。叡山僧えいざんそうで祇園別当ぎおんべつどうとなった。大原おおはらに隠栖いんせいしたと伝える。伏見修理大夫橘俊綱ふしみしゆりのだいぶたちぶぬと親交があり、彼の伏見邸サロンを通じて、賀茂成助かものなるすけ・藤原国房くにまらとも交流を持った。「良暹打聞りやうぜんうちきこ」という私撰集を編んだらしいが、今伝わらない。「後拾遺和歌集」初出。

■宿家の意。 ■ながむれば じつと物思いに沈みながら見つめるとの意。



佐^さひしき二宿^{にやど}を

立^たいで出^いてな可^かむ連^れ

八^は

い徒^つ具^ぐも

同^{おな}し秋^{あき}の

夕^ゆ暮^{くれ}

逃げ場のない寂しさに立ちつくす

『古今和歌集』 雑^{ざつ}林^{りん}の巻頭に見える読^よ人^{びと}しらずの長歌に

すみぞめの 夕べになれば ひとりゐて あはれあはれと
嘆きあまり せんすべなみに 庭にいでて たちやすらへ
ば

と歌っているのに共通する姿勢である。

家（それは庵^{いかり}であろう）の内にあって、このどうしようもないさびしさは自分だけのものかと思つた作者は、家を出て四方を見渡す。そして、天下に満ちる秋のさびしさを改めて知つたのである。『古今和歌集』に収められた大江千里の歌

月見ればちちに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど
（古今和歌集 秋上・一九三）

とは逆である。大江千里は、「わが身ひとつの秋」ではないとわかつていながら、やはりあくまでもわが身の悲しさを声高に訴えようとしたのであつた。良^り遅^ちの歌には、個人の感情をも普遍的なレベルに置いて捉えようとする思考形式が認められる。それはこの作者の資質によるものか、あるいは時代の傾向であつたのかもしれない。

夕ゆふされば門かど田たの稲いな葉ば訪おとづれて
 蘆あしのまる屋やに秋風ぞ吹く

大納言だいなごん経信つねのぶ



夕方になると、黄金に色づいた門田の稲の葉にさらさらと音をたてて、蘆葺きの小屋に秋風が吹きつける。

◇『金葉和歌集』 卷三・秋・一八三 詞書「師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて、田家、秋風といへることよめる」

大納言だいなごん経信つねのぶ 源みなもと経信。長和五（一〇一六）年、永長二（一〇九七）年閏一月六日。八十二歳。宇多源氏、権中納言道方の息子。母は播磨守源国盛の娘。俊頼の父である。大納言兼大宰権帥正二位に至り、大宰府で没した。詩歌管弦にすぐれていた。藤原通俊が撰した「後拾遺和歌集」を批判して、「難後拾遺」を記した。日記に「師記」、家集に「経信集」がある。「後拾遺和歌集」初出。

■夕されば 「されば」その時、季節になる意の「さる」の已然形。夕方になるとの意。 ■門田 家の門のほとりにある田。 ■蘆のまる屋 蘆で屋根を葺いた粗末な小屋。師賢の山荘を指し、同時に経信自身の姿を重ねてもいるのだろう。

夕ゆふされ禮れ盤は

門かど田た乃の

あし乃の

まろ屋や

に

い奈葉なば

音おとつ連れ

秋あき可かせ勢せ曾そ

吹ふ

て

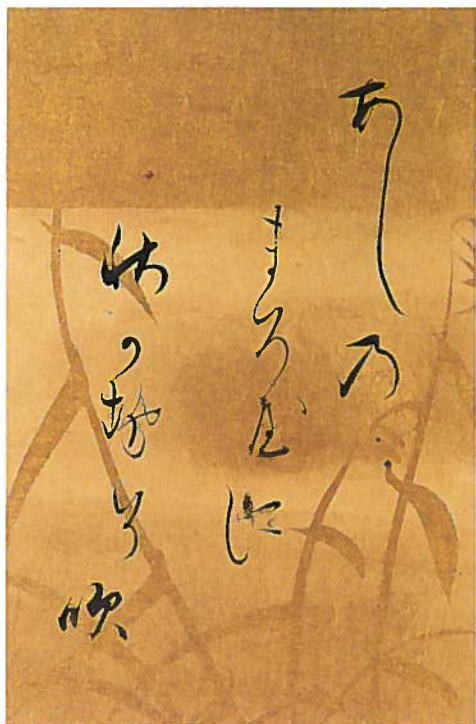
田園への憧れ

詞書中の「師賢」は、源師賢・源師賢。郭曲・琵琶・和琴・笛と、楽の諸道に達していた風流貴公子であった。その山荘が京の西、梅津の里にあった。そこに集うた歌人達が場所に叶った「田家秋風」の題で詠歌したのであった。

経信には田園風景を詠じた作品が少なくない。そしてこの歌に用いられた「門田」「稻葉」「蘆のまろ屋」などは、経信愛用の歌語でもあった。しかし、これは経信個人の好みというよりは、後冷泉朝あたりから院政期にかけての歌人や文人に共通の好尚であったと思われる。

都市生活が爛熟の極に達すると、人間は渴えたように自然を求め、撰関時代の最盛期も、そのような、都市生活が一つの極点に達した時期であったかもしれない。そして、それに引き続く、後冷泉朝から院政期ころの貴族の間には、田園趣味が流行した。

つまり、経信のこの清新な田園の歌も、いつてみれば、作者の生きた時代の好尚の最大公約数的表現であるともいえるであろう。すぐれた詩人は、時代全体の志向を最も鋭敏に感じ取り、それをみごとに表現するのである。



音おとに聞きく高師たかしの浜はまのあだ波なみは

かけじや袖そでのぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊



噂うわさに高い高師たかしの浜はまの、いたずらに立ち騒さわぐ波なみにはかかりますまい。袖そでが濡ぬれると大変たいへんです。浮気者うわきもので名高なだかいあなたとお付き合いすることはやめましょう。あとで泣なきを見るのはたまりません。

◆金葉和歌集 卷八・恋下・五〇一 詞書「返し」。前歌

堀河院御時艶書合ほりかわいんのおとんとときりそうぶみあわせによる 中納言俊忠 人しれ

ぬ思おもひありその浦風うらかぜに波なみのよるこそいはまほしけれ」の返歌である。

祐子内親王家紀伊 生没年未詳。桓武平氏の東宮亮

平たいら経方のつねかたの娘むすめといわれるが、確定しがたい。母は祐子内

親王家小弁こべん。紀伊守藤原重經きいのかみ（素意）の妻となつたか。

後朱雀院の皇女で、三品とされた祐子内親王に出仕した。

家集「祐子内親王家紀伊集」（『一品紀伊集』）。『後拾遺和歌集』初出。

■高師の浜 和泉国の歌枕。大阪府高石市。 ■あだ波 ざわざ

わといたずらに立ち騒ぐ波。相手の男性の浮気心の比喩。

■か けじや 「じ」は打消意志の助動詞。「や」は詠嘆の終助詞。波と

を^おと^に爾^くき^く具^く

堂^た可^かしの

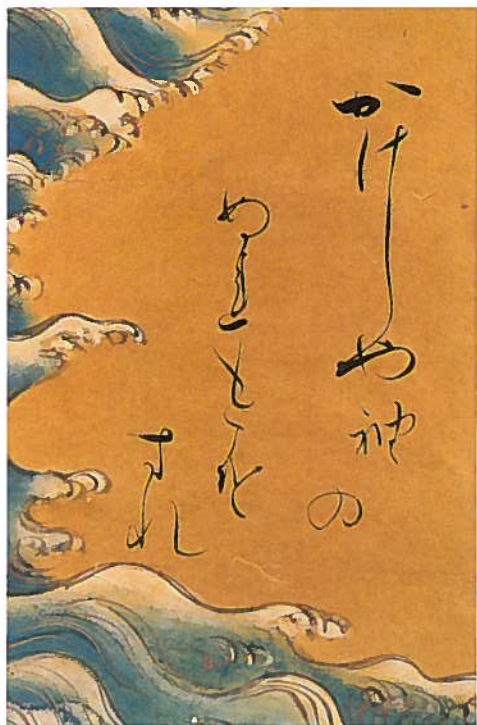
者^は満^ま乃^の

あ^た多^な波^な

八^は

かけしや袖^{そで}

ぬ^れ連^れも^もこ^こ楚^その
寸^すれ



は将来の好ましくない事態を危ぶむ心を表わす慣用句で、「も」「こ」
そ」はともに係助詞。濡れると大変だの意。

擬似恋愛を楽しむ

康和四(一一〇二)年間五月の『堀河院艶書合』での

詠。『金葉和歌集』によると、藤原俊忠が「わたしは人知れず
あなたに思いをかけています。荒磯の浦を吹く風に波が寄る
ように、夜お話ししたい(お逢いしたい)ものです」と詠ん
だのに対して、紀伊は拒絶の心で返したのである。この時紀
伊は七十歳くらいの老女で、これまた擬似恋愛、模擬恋愛の
贈答歌である。この応答、古えの歌垣の伝統を思わせるもの
がある。女はこのような時、男の誘いを手厳しく拒むのが常
なのであった。

とりもあへずたち騒がれしあだ波にあやなく何に袖の濡れ
けむ (『後撰和歌集』雑二・一一六〇 説人しらず)

という歌がある。これは男に物を言いかけられた女が騒いだ
ので、男は(多分空しく)帰った翌朝、「あなたに騒がれて立
ったので、つらくて潮に袖は濡れました」という男の歌への
返歌である。紀伊はこの歌などを念頭に置いているのかもし
れない。

高砂たかさごの尾をの上への桜咲きにけり

外山とやまのかすみ立たずもあらなむ

前権中納言匡房



あのむこうの、高い山の峰の桜が咲いたなあ。近い山の霞はどうか立たないでほしい。

◆後拾遺和歌集 巻一・春上・二〇 詞書「内大臣の家にて人々酒たうべて歌よみ侍りけるに、遙かに山桜を望むといふ心をよめる」

前権中納言匡房 大江匡房。長久二(一〇四一)年〜天

永二(一一一一)年十一月五日。大学頭成衡の息子。母は宮内大輔 橘 孝親の娘。匡衡・赤染衛門の曾孫に当たる。儒者としては破格の権中納言大宰帥正二位に至り、江帥と呼ばれた。当代随一の博学で知られ、編著書も「江家次第」「続本朝往生伝」「江都督願文集」「洛陽田楽記」「狐媚記」「遊女記」「傀儡子記」等数多い。「江談抄」は藤原実兼が筆録した匡房の言談。家集「江帥集」。後拾遺和歌集 初出。

■高砂 播磨国の歌枕である「高砂」ではなく、ここでは「高砂

の」で「尾の上」にかかる詞で、高い山の意を表す句と取りたい。

■尾の上 山の頂の意。 ■外山のかすみ 「外山」は人里近い

山。「外山のかすみ」が「高砂の尾の上の桜」を隠しかねない障害

堂可砂の

尾上の

さくら

佐支に

けり

とや満の

可寸み

多、寸も

阿ら

南

高砂の尾の上の桜

『後拾遺和歌集』詞書中の「内大臣」とは、後二条関白藤原師通である。この歌は『江帥集』には、「内大臣殿、遠山桜序」として掲げられている。匡房は序代（漢文の和歌序）をも献じたのであろう。

匡房以前に「高砂の尾の上の桜」を詠んだ例として、

花山にて、道俗酒たうべけるをりに

素性法師

山守はいはばいはなむ高砂の尾上の桜折りてかざさむ

（後撰和歌集 春中・五〇）

がある。匡房はこの歌を念頭に置いて詠んだのかもしれない。とすると、やはり匡房の「高砂の尾の上」は素性同様、地名ではなく、一般的に高い山ということになる。

手前に「外山」があり、その奥に「高砂の尾の上」がそびえている。奥行きのある構図である。作者は、「かすみ立たずもあらなむ」と訴えているが、もしも外山に籠がかかり、その絶え間から「高砂の尾の上の桜」がちらと見えたならば、むしろこの上ない幽玄の美が現出するであろう。



憂うかりける人を初瀬はつせの山おろしよ

激あしかれとは祈いのらぬものを

源みなもと俊頼とよのり朝臣あそん



冷淡だったあの人の愛情を得ようと初瀬の観音様に祈るにつけ、初瀬山から吹きつける山おろしのはげしさ。あの人がわたしに対してこのようにきびしくあれとは祈らなかったのに。

◆千載和歌集 卷十二・恋二・七〇七 詞書「権中納言俊忠」家に恋の十首、歌よみ侍りける時、祈れども不逢ハ恋といへる心をよめる」

源俊頼朝臣 天喜三（一〇五五）年ころく大治四（一一二九）年。宇多源氏、正二位大納言経信の息子。俊恵の父。左京大夫を経て木工頭従四位上に至った。藤原基俊と並び称され、歌才においては俊頼がすぐれ、学識においては基俊が勝るとみられる。白河法皇の院宣により「金葉和歌集」を撰進した。中古六歌仙。歌学書「俊頼髓脳」、家集「散木奇歌集」、「金葉和歌集」初出。

■憂うかりける 「うかり」は「つれない」の意の形容詞の連用形。つれなかった、冷淡だったの意。 ■初瀬 大和国の歌枕。奈良県桜井市。山腹に真言宗豊山派の総本山、長谷寺がある。本尊は観世音菩薩。 ■激あしかれ はげしくあれの意。山おろしと恋人

う可^{かり}里

ける

は違^けし

可^かれとは

人^{ひと}を

いのらぬ

者^はつせの

も能^のを

山^{やま}おろし

よ



かなえられなかつた観音様への祈願

『住吉物語』に、行方不明になつた姫君の居所を知らうとして、九月ごろ初瀬に参籠した中将が、七日目の通夜の暁がたの夢で、姫が現れて、「わたつ海の底ともしらずわびぬれば住吉とこそあまはいひけれ」という歌を詠むのを見て住吉を訪れて再会するという件りがある。また、『源氏物語』玉鬘の巻で、右近とその旧主人夕顔の娘である玉鬘とが再会するのも、初瀬詣での人々が泊る椿市の宿においてであつた。

このように、長谷の観音の靈験あらたかなことは、広く人々に信じられていたらしい。しかし、俊頼の歌においては、その靈験すら無力と思われるほど、恋人は自分に冷くつらく当たるのである。これは初瀬から吹きおろす山風を思わせる。つまり冷淡な恋人の仕打ちを、山から吹きおろす厳しく荒涼とした山おろしの風によつて具象化したのであつた。

後鳥羽院は『後鳥羽院御口伝』でこの歌を「もみもみと、人はえよみおほせぬやうなる姿」で、藤原定家が「庶幾する（理想とする）姿」であると評している。定家の年もへぬ祈る契りは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮れ

（新古今和歌集 卷十二 恋二 一一四二）

という作がこの俊頼の歌の影響作であることは疑いない。

契りおきしさせもが露を命にて

あはれ今年の秋もいぬめり

藤原基俊



あなた様が「わたしを頼みに思っていよ」とお約束してくださいましたその御一言——させも草の葉に置く露のようなはかないお言葉、それを命をつなぐ頼みとしておりますうちに、ああ、今年の秋も空しく去ってしまいうようです。

◇千載和歌集 卷十・雑上・一〇二三 詞書「律師光覚、維摩会の講師の請を申しけるを、度々もれにければ、法性寺入道前太政大臣に恨み申しけるを、しめぢが原のと侍りけれども、またその年ももれにければ、よみてつかはしける」

藤原基俊 康平三（一〇六〇）年かゝ永治二（一一

四二）年一月十六日。藤原氏北家頼宗流、右大臣俊家の息子。母は下総守高階順業の娘。名門の出自でありながら、左衛門佐従五位上にとどまった。源俊頼と好敵手とされ、兩人をめぐる逸話は鴨長明の「無名抄」などに語られている。漢詩文をもよくし、「新撰朗詠集」「相撰立詩歌合」の撰者である。中古六歌仙。家集「基俊集」。『金葉和歌集』初出。

地支里ちきり

置き

させも

可か

徒つゆを

命いのち

爾にて

あ者はれ

ことしの

秋あき毛も

意いぬ

めり



語。■させもが露 詞書に見える、法性寺入道前太政大臣(忠通)が基俊の依頼に対して、「なほたのめしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむかぎりは」(「袋草紙」上)という清水観音作と伝えられる歌を引いて承諾した約束事を指す。

子を思う父親の苦惱

『千載和歌集』の詞書にいう「律師光覚」は作者基俊の息子である。「維摩会の講師」は藤原氏の氏寺である興福寺で、十月十日から七日間行われた、「維摩経」を講読する法会を「維摩会」といい、その講師となること。僧侶としてたいそう名譽あることだったので、基俊は子光覚がこの役を命ぜられるよう、藤原氏の氏長者である藤原忠通に申請したのである。それに対して忠通は「しめぢが原の」と答えた。つまり、語釈の欄に引いた清水寺の観音の託宣歌の一句を引き、「わたしがいる限り大丈夫だ。期待しておれよ」と答えたのであった。しかし、その年の秋も光覚は選に洩れてしまった。それを恨んだ子煩悩な父親の嘆きがこの作なのである。

『基俊集』の中に、この光覚のことは頻出する。

ならにおさなき子をやりてゆきのふりしかば、師の僧のもとにやり侍し (一三五番詞書)。月のおもしろきよならに侍るこのこひしく侍りしかば、永縁そうづのもとにいひやりし (一四七番詞書)

などと、基俊が溺愛していたことが知られる。

わたの原漕ぎ出でて見ればひさかたの

雲居にまがふ沖つ白波

法性寺入道前関白太政大臣



大海原に船を漕ぎ出して見ると、空の雲に見まがう沖の白波。

◆詞花和歌集 卷十・雑下・三八〇 詞書「新院位におはしましし時、海上へ遠望といふことをよませ給ひけるによめる」

法性寺入道前関白太政大臣 藤原忠通。承德元（一

〇九七）年、長寛二（一一六四）年二月十九日。六十八歳。藤原氏攝家相統流、富家殿関白忠実の息子。母は右大臣源頼房の娘師子。兼実・慈円の父。関白太政大臣従一位に至る。俊頼・基俊を中心に忠通歌壇を形成した。漢詩をもよくし、また法性寺流の能書で知られる。詩集『法性寺関白御集』、歌集『田多民治集』がある。『金葉和歌集』初出。

■わたの原 大海原の意。 ■ひさかたの 「雲居」に掛かる枕詞。

■雲居 空とも天とも解しうが、ここでは雲と解した方が躍動的な風景が想像できる。 ■まがふ まぎれて区別しがた

い状態をいう。 ■沖つ白波 「つ」は「の」と同じ意味の格助詞。



わたしの

はら

くも

井

漕ぎいでて
出天

三れ盤

満可ふ興

ひさかた
久可多の

徒し

らなみ

船上からの眺望

『詞花和歌集』詞書中の「新院」とは崇徳院のことである。作者忠通は保元の乱の際、後白河天皇の関白として、崇徳院側であった父忠実や弟の左大臣頼長と対立したが、この歌はむろんそれ以前の作である。家集『田多民治集』によれば、保延元年四月の内裏歌合において詠まれたものである。

この歌が、第十一番歌小野篁の

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟
 『古今和歌集』羈旅・四〇七

の古歌を念頭に置いていることは、ほぼ確かであろう。篁の作は隠岐国に流されてゆく際に見送りの人に託したものであったが、この作にはもとよりそのような悲愴な感情は籠められていない。ただ大海原の眺望をほしいままにした雄大な叙景歌として詠まれている。

瀬^せをはやみ岩にせかるる滝川^{たきがは}の
われても末^{すゑ}に逢^あはむとぞ思ふ

崇^す徳^{とく}院^{いん}



瀬が早いので岩に堰きとめられた滝川が、割れても末には流れ合うように、恋しいあの人とたとえ一旦は別れてもいつかはきつと逢おうと思う。

◇詞花和歌集 卷七・恋上・二二八 詞書「題しらず」

崇徳院 元永二(一一一九)年〜長寛二(一一六四)年八月二十六日。諱は顕仁。第七十五代の天皇。鳥羽天皇の第一皇子。母は藤原公実の娘璋子(待賢門院)。保元元(一一五六)年七月、父法皇の没後、同母弟である後白河天皇との皇位継承の争いである保元の乱に敗れ、讃岐に配せられ、同地に没した。「詞花和歌集」を藤原顕輔に撰進させ、また久安六(一一五〇)年には群臣に「久安百首」を撰進させている。「詞花和歌集」初出。

■瀬をはやみ 瀬が早いのでの意。ここから第三句の「滝川の」までは「われても」を起こす序詞。 ■岩にせかるる 「るる」は受身の助動詞。せきとめられるの意。 ■滝川 滝状になつて流れる川。 ■われても 水の流が岩に当たつて分かれるのと、恋人が別れるの意を掛けている。

瀬を者やみ
い者爾せ可

留る

瀧川の

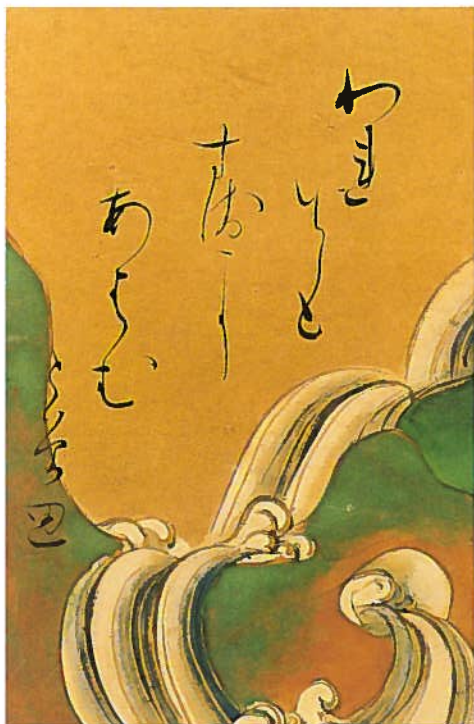
わ連れ

寸衛耳

ても

あ者む

と曾思



ほとばしる情熱と力強い決意

滝つ瀬をなして流れる山川の風景を恋の心象風景へと転じた。ほとばしる山川の流れの激しさ、末句の「逢はむと思ふ」という語調の力強さが相俟って、障害に決してくじけることのない強固な決意を感じさせる恋歌である。

『百人一首改観抄』（契沖）は、

瀬を早み絶えず流るる水よりも絶えせぬものは恋にぞありける

（『後撰和歌集』恋六・一〇六〇 読人しらす）

高山の出で来る水の石に触れ破れてぞ念ふ妹にあはぬ夜は

（万葉集 卷十一・二七二六 寄物陳思）

との二首を「取りてよませたまへり」という。確かに崇徳院のこの歌のもつ力強さは、古代和歌のあるものに通うかもしれない。また保元の乱の中心人物の歌としてふさわしいともいえるであろう。



あはぢしま
淡路島通ふ千鳥の鳴く声に

よねざ
いく夜寝覚めぬ須磨の関守

みなもとの
源兼昌

淡路島へ飛び通う千鳥の鳴く声に、いつたい幾夜目覚めたことだろうか。いにしえの須磨の関守は。

◆金葉和歌集 卷四・冬・二八八 詞書「関路千鳥といへることをよめる」

源兼昌 生没年未詳。大治三(一一二八)年九月の「住吉歌合」に参加しており、そのころまでの生存は確実である。宇多源氏、美濃介俊輔の息子。従五位下皇后宮少進に至った。「永久百首」の作者。「金葉和歌集」初出。

■淡路島 淡路国の歌枕。兵庫県須磨の西南にある島。 ■須磨の関守 「須磨の関」は摂津国と播磨国の境須磨(現在は神戸市須磨区)にあった古関。「関守」は関の番人。

あ者路し

満可よふ

千鳥の

なく聲に

いくよ

ねさ免ぬ

須満の

関守



須磨に旅寝して

須磨の関がいつ置かれ、いつ廃されたかは明らかではない。ともかく作者兼昌の時代においては、それは既に古関であった。それゆえに須磨の浦に旅寝した作者は、古の関守の心を思いやって、「いく夜寝覚めぬ」といつているのである。

須磨の関は、『源氏物語』須磨の巻の舞台となった。そしてこの物語の中で光源氏は眠れないまま暁方を迎え、千鳥の鳴き声を聞いている。「例のまどろまれぬ暁の空に、千鳥いとあはれに鳴く。友千鳥もろ声に鳴くあかつきはひとり寝ざめの床もたのもし。また起きたる人もなければ、かへすがへす独りごちて臥したまへり」

兼昌の歌にこの部分の面影があるとすれば、それは和歌における『源氏物語』のごく初期の影響例ということになる。

秋風にたなびく雲のたえ間より
漏れ出づる月の影のさやけさ

左京大夫頭輔
さきやうのだいぶあきすけ



秋風に吹かれてたなびいている雲のとぎれた間から洩れてさし出ている月の光の、何とさやかなことか。

◇新古今和歌集 卷四・秋上・四一三 詞書「崇徳院に
百首歌たてまつりけるに」

左京大夫頭輔 藤原頭輔 寛治四(一〇九〇)年、久
寿二(一一五五)年五月七日。六十六歳。藤原氏北家末
茂流、六条修理大輔頭季の息子。母は大宰大式藤原経平
の娘。清輔・重家・季経らの父である。白河院、忠通な
どに仕え、中宮亮を経て左京大夫正三位に至った。「詞
花和歌集」の撰者。家集「左京大夫頭輔集」。「金葉和
歌集」初出。

■秋風にたなびく雲 秋風に吹かれてたなびく雲の意。
影 月の光のこと。

■月の

秋あき可かせ耳に

棚たな引び

くも

絶たえ間まの

より

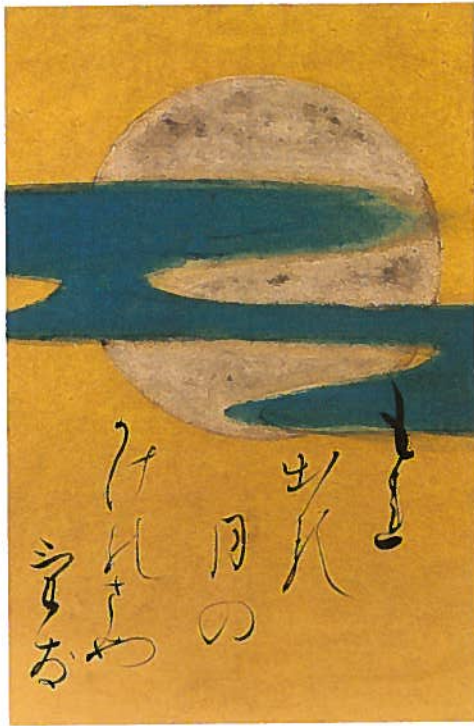
も連れ

出い類る

月つきの

可かけ能のさや

気け散さ



雲の絶間の月

「たなびく雲」は昔から歌われている。「万葉集」においては、月夜に雲がたなびいて月を隠さないでほしいと訴えかけた歌が多い。

妹があたりわが袖振らむ木の間より出で来る月に雲な棚引き
き (巻七・一〇八五)

雨晴れて清く照りたるこの月夜またさらにして雲な棚引き

(巻八・一五六九 家持)

などである。しかし、王朝の人々は雲の絶え間からさし出す月光を賞するのである。これは鴨長明が「無名抄」で説いている、霧の絶え間から紅葉した山を見て、その美しい全景を推し量る物の見方と同じく、余情美を追求する心、幽玄美を探る態度に通ずるものがある。

雲隠れていた月が突如さすという景は、「源氏物語」橘姫の巻にも描かれていた。「琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝあたるに、雲隠れたりつる月のはかにいと明かくさし出でたれば、扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげににほひやかなるべし」

また、歌舞伎の「鳴神」で鳴神上人を誘惑する美女の役名は雲絶間姫であった。月に村雲を配するのは、自然に従順であった古人が見出した美であろう。

ながからむ心も知らず黒髪くろかみの

乱れてけさはものをこそ思へ

待賢門院堀河
たいけんもんいんのほりかは

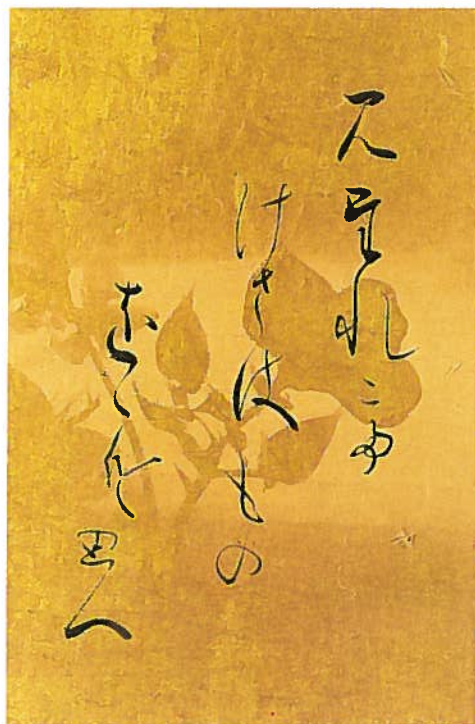


あなたの愛情が長続きするかどうか、わたしにはわかりません。長い黒髪も乱れ、そして心も乱れて、初めてあなたにお逢いしたのちの今朝、わたしは物思いに沈んでいます。

◇千載和歌集 卷十三・恋三・八〇一 詞書は前の「百首の歌たてまつりける時、恋の心をよめる」が掛かる。

待賢門院堀河 生没年未詳。神祇伯源顕仲の娘。上西門院兵衛はその妹。初め白河院の皇女令子内親王に出仕して前斎院六条、のち、待賢門院璋子に出仕して堀河と呼ばれた。永治二（一一四二）年待賢門院の落飾の際に出家した。西行と信交があつたことが知られる。中古六歌仙。家集「待賢門院堀河集」。「金葉和歌集」初出。

■ながからむ心 長続きするであろう恋人の愛情をいい、「黒髪」の縁語である。 ■黒髪の乱れて 「黒髪」は「乱れて」の序のような働きをしている。「乱れて」は黒髪の形容とともに、自分の心の状態の形容でもある。 ■けさ 恋人と共に過ごした翌朝の意。



くろ可^かみ の
心^こもし
ら春^{はる}

見^み堂^た礼^れ亭^{てい}

けさはもの

をこ楚^そ

思^{おも}へ

後朝の乱れ髪

相手の愛情が永続きするかいなかを危ぶむという点では、五四番歌の儀同三司母の歌と共通するものがある。しかしながら、だから今宵を限りに死んでしまいたいと歌う儀同三司母の詠に対して、後朝に思い悩むという待賢門院堀河の詠は、情念の烈しさにおいて前者に劣り、心理の深さにおいて前者に勝っている。

心の乱れを表す乱れ髪、そのうねる黒髪が眼前に浮かぶような歌である。髪は王朝の女の命であった。そして、同時にとても乱れやすいものであった。和泉式部も

黒髪のみだれも知らずうちふせばまづかきやりし人ぞ恋し
き (後拾遺和歌集 恋三・七五五)

と歌っている。乱れた美しい黒髪が喚起する官能的なイメージがこの一首の生命であるといえよう。

ほととぎす鳴きつる方をながむれば

ただ有明ありあけの月ぞ残れる

後徳大寺ごとくだいじの左大臣さだいじん



ほととぎすが一声鳴いた方角をじつと見つめると、もはやその姿は見えず、ただ有明の月が西の空に沈みもせずに残っているよ。

◇千載和歌集 卷三・夏・一六一 詞書「晝聞二郭公」といへる心をよみ侍りける」

後徳大寺左大臣 藤原実定。保延五（一一三九年）建

久二（一一九一）年閏十二月十六日没。藤原氏北家公季

流、大炊御門右大臣公能の息子。母は権中納言藤原俊忠

の娘豪子。俊成の甥に当たる。左大臣正二位に至る。「平

家物語」や「古今著聞集」などにその逸話が伝えられて

いる。家集「林下集」。「千載和歌集」初出。

■鳴きつる方 「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形。「かた」は方角の意。 ■ただ 「ほととぎすの姿は見えず」という気持ちを籠めている。そして「有明の月」を視界内に映るものとして限定し、強調している。



保と、支數

鳴つる

方を

な可む

連八

多

有あけ

の

月楚

のこ連類

月夜のほととぎす

ほととぎすは、春の花、秋の月、冬の雪とともに夏を代表する景物である。『万葉集』の昔から古人がさながら恋人のように愛してやまない鳥であるが、百人一首でこの鳥を詠み入れた歌はこの一首のみである。意外な気もするが、これは百人一首の中で夏の歌そのものの占める割合が低いことと関係するのであろう。鋭い一声だけを残して飛び去ったほととぎすへの満たされぬ思いを、「ただ有明の月ぞ残れる」という下句で暗示したこの歌は、やはり秀歌と見てよい。

ほととぎすと月とを取り合わせた歌は、古く『万葉集』に見出すことができる。例えば

月夜よみ鳴く翟公鳥見まくほりわれ草取れり見む人もがも

(万葉集 卷十・一九四三)

などである。しかし、どちらかというところ、『万葉集』においては、ほととぎすの姿を昼の光の中で捉えた上で、その声を賞美する方が多いのではないだろうか。それに対し、王朝和歌ではむしろ主に夜鳴く鳥として、ほととぎすを考える傾向が強まってきているようだ。それとともに、姿を見るよりはもっぱらその声を聞くものという賞し方が一般的になっている。実定のこの歌も、王朝和歌的な型でほととぎすを詠んだものと言えるだろう。

思ひわびさても命はあるものを
憂きに堪へぬは涙なりけり

道因法師



恋の思いに堪えかねても、それでも命は長らえているのに、つらさに堪えられずもろくこぼれるものは涙だったよ。

◇千載和歌集 卷十三・恋三・八一七 詞書「題しらず」

道因法師 寛治四（一〇九〇）年誕生。没年未詳。

承安二（一一七二）年三月十九日の白河尚齒会に八十三歳の最年長で連なっている。俗姓藤原氏北家惟孝流、俗名敦頼。治部少丞清孝の息子。右馬助従五位に至った。「無名抄」などにいかにも数寄人らしいその逸話が見られる。私撰集「現存集」を編んだというが、伝わらない。「千載和歌集」初出。

■思ひわび 思うことに疲れて、氣力を失った状態をいう。
■さても それでもの意。ここでは、「思ひわび」を「さ」と受ける。
■憂きに堪へぬ 「うき」は形容詞「憂し」の連体形。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。

おもひ 侘わび

さて

も

命いのち盤は

あるも

のを

う起き耳に

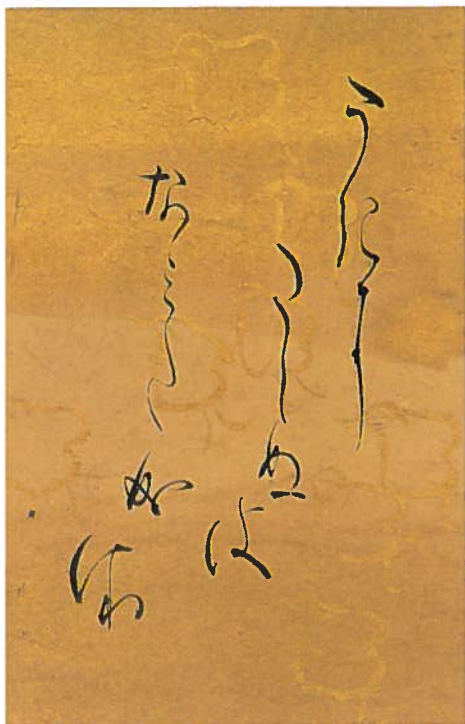
多た衣えぬ

な三み多た

成なり

は

け利り



つれない命、もろい涙

露のようにもろくはかないとされてる命と、それよりさらにもろくこぼれる恋の涙とを対比させて歌ったものである。つまり、思いわびた結果、命も絶えてしまいうようなものだが、つれない命は長らえている。それなのに、憂うれさに堪えないものは涙だよと、つれないわが命、もろいわが涙を第三者のような目で見、嘆なげいているのだ。

思いわびてこぼす涙は、これ以前にも

わびはつる時さへものかなしきはいつこをしのぶ涙なるらむ
〔古今和歌集〕恋五・八二三 読人しらず

思ひわび落つる涙はくれなゐに染川とこそいふべかりけれ
〔散木奇歌集〕雑上・恨躬恥運雑歌百首
などと歌われている。

世の中よ道こそなけれ思ひ入る

山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成



この憂い世の中よ、所詮わたしの遁れるべき道はなかつたのだなあ。世を背こうと思ひ込んで分け入ったこの山の奥にも、鹿が悲しげに鳴いているようだ。

◇千載和歌集 卷十七・雑中・一一四八 詞書「述懐の百首歌よみ侍りける時、鹿の歌とてよめる」

皇太后宮大夫俊成 藤原俊成。「しゅんぜい」と音読

することが多い。永久二(一一二四)年、元久元(一一二〇)年十一月三十日、藤原氏北家長家流、権中納言俊忠の息子。母は伊予守藤原敦家の娘。定家の父である。初名を顕広といい、安元二(一一七六)年九月二十八日に出家した後の法名を釈阿といった。皇太后宮大夫正三位に至る。後白河法皇の院宣により「千載和歌集」を撰進した。歌論書「古来風体抄」がある。家集「長秋詠藻」は六家集の一。「詞花和歌集」に「藤原顕広」として初出。

■道こそなけれ 「道なし」の強調表現。 ■思ひ入る あこがれて入る ■鳴くなる 「なる」は音声が開くと推定する助動詞「なり」の連体形。

世の中

は

道こそ楚

な介速

おもひ入

山

の

於く

爾も

志可楚

鳴奈類



退路を断たれた世捨て人

『千載和歌集』の詞書にある「述懐の百首歌」とは、家集『長

秋詠藻』上に「堀川院御時の百首題を述懐に寄せてよみける

歌、保延六、七年のころのことや」と前書して収めている

百首歌のことである。保延六（一一四〇）年というと、俊成

は二十七歳で、まだ頭広と名乗っていた官人時代であった。

この世を憂くつらいものと見なして深山に遁れたはずの人

が、その山の奥で悲しげに鳴く鹿の声を聞いて、もはや遁れ

るべき道がなくなってしまったことを嘆いている歌である。

退路を断たれたような閉塞感が強く感じられる。『百人一首』

五番の猿丸大夫の歌

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋はかなしき

に通じるものがあり、また

山の法師のもとへつかはしける

世をすてて山に入る人山にてもなほうき時はいづちゆくら

む
（古今和歌集 雑下・九五六 凡河内躬恒）

の歌を受けるような形になっている。

長らへばまたこのごろやしのばれむ

憂しと見し世ぞ今は恋しき

藤原清輔朝臣



生き長らえていたならば、今はつらいと感じている現在もまた、あとではなつかしく思い出されるのであろうか。その当時はいやだいやだと思いつながら過ごしていた昔が、今となつては恋しいのだから。

◆新古今和歌集 卷十八・雑下・一八四三 詞書は二首
前の歌の「題しらず」が掛かる。

藤原清輔朝臣 長治元（一一〇四）年～治承元（一一七〇）年六月二十日。藤原氏北家末茂流、左京大夫顯輔の息子。母は能登守高階能遠の娘。太皇太后宮大進正四位下に至る。「統詞花和歌集」を編んで二条天皇に奏し、勅撰集とされることを期したが、天皇の崩御により実現しなかった。中古六歌仙。歌学書「奥義抄」「和歌初学抄」「袋草紙」「和歌一字抄」などを著し、六条家の歌学を大成させた。家集「清輔朝臣集」。「千載和歌集」初出。

■長らへば 今後生き長らえたならばという仮定の表現。 ■二
のころ 現在の意。 ■憂しと見し世 「見し」の「し」は直接
体験過去の助動詞「き」の連体形。つらくていやだと思いつながら
も生きていた昔の意。

な可^からへ
は

又^{また}

この

ころや

志^しの者^は

連^れん

うし

とみし

よ所^そ今^{いま}盤^は

恋^{こひ}し起^き



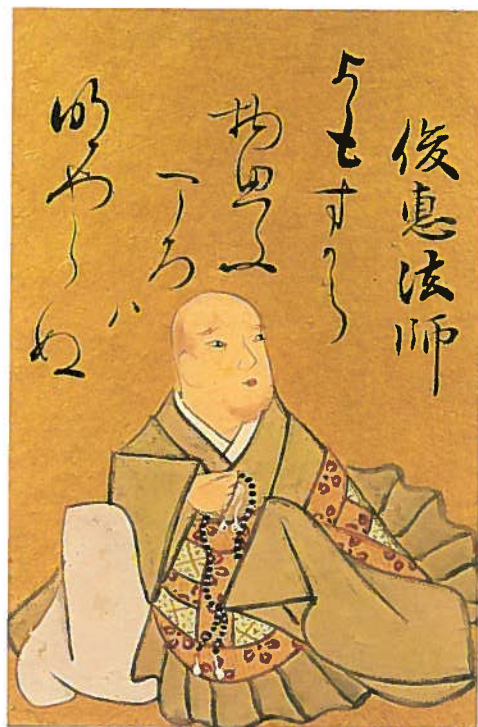
時間の浄化作用

過ぎ去ってしまったと、苦しかったことも悲しかったことも、何もかもただなつかしいものに、感じさせてしまう。時間という不思議なものの作用に、改めて感銘を深くしている歌である。そして、そのような過去の経験に照らし合わせて、おもしろくもない現実の生活もいつかは懐しく回想されるのであろうかと、わずかに慰めているのである。

もう相当人生の辛酸を嘗めてきた人の述懐のように感じられるが、『清輔朝臣集』の詞書に「いにしへ思ひ出でられける頃、三条内大臣（藤原公教）いまだ中将にておはしける時、つかはしける」というのによれば、実は清輔が二十七歳から三十三歳までの間に詠まれた作である。清輔は而立（三十歳の異称）の齡にして、このように早くも「愛しと見し世」を恋しく思う、ふけた心を抱いていたのだった。その老成した心は清新な詩を生むにはふさわしくないかもしれないが、同じような思いの人々には安らぎと慰藉とを与える。

夜もすがらもの思ふころは明けやらぬ
ねやのひまさへつれなかりけり

俊恵法師



夜通し恋の物思いに悩むこのころは、恋人だけでなく、いつまでも夜の明けきらない闇の隙間までもが、つれなく感じられるよ。

◇千載和歌集 卷十二・恋二・七六五 詞書は直前の「恋歌としてよめる」が掛かる。

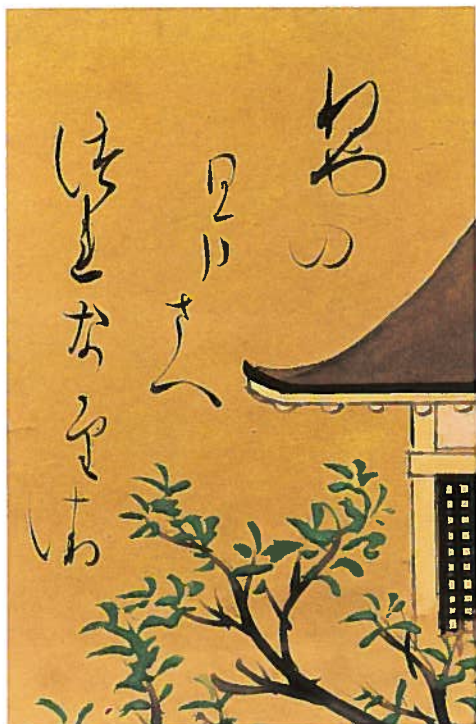
俊恵法師 永久元(一一一三)年〜建久六(一一一九)

五)年以前。俗姓は宇多源氏、木工頭源俊頼の息子。母は木工助・橘・敦隆の娘。東大寺の僧であった。京の白河の自坊を歌林苑と呼び、六条家の清輔や御子左家の寂蓮など多くの歌人を集めて、歌会や歌合を催した。鴨・長明もそのメンバーの一人で、俊恵の弟子として『無名抄』に俊恵の言説を数多く記しとどめている。中古六歌仙。『歌苑抄』という私撰集を編んだが、今伝わらない。家集『林葉和歌集』、『詞花和歌集』初出。

■夜もすがら 夜通しの意。 ■明けやらぬ 「やら」は「完全

にし終える」の意の補助動詞。「ぬ」は打消の補助動詞「ず」の連体形。 ■ねやのひまさへ 「ねや」は寢室、「ひまさ」は隙間のこ

と。「さへ」はつれない恋人はもとより、闇のひままでもの意。



よも寸^す可^から

物思^{ものおも}ふ

ころ

八^は

明^{あけ}やらぬ

ねや

の 日^ひ万^ま

さへ

徒^つ連^れな可^か里^り

けり

ひとり寝の夜の長さ

つれない恋人を恋い焦^{あせ}れているひとり寝の女の歌と見られる。一晚中寝もやらす思い悩んでいるときは、いつそのこと早く夜が明けてほしいのである。それなのに、寢室^{すま}の隙間^まにはいつまでたつても、朝の光がさしこんでこない。そのとき、こちらの求愛に対してそしらぬふりをしている恋人がつれないのはもとより、閨^{ひま}の隙間^まさえもつれなく思われるのである。増基^{ぞうき}法師の歌に

冬の夜にいくたびばかり寝覚めして物思ふ宿のひま白むらむ
〔後拾遺和歌集〕 冬・三九二

というものがある。俊恵はおそらくこの古歌を念頭に置いて詠んだと思われる。が、増基法師の歌で必ずしも明確ではなかった「物思ふ」ことの原因を、ままならぬ恋による懊惱^{あうなう}と明確にし、捉え直すことよって、俊恵はひとり寝の女の姿を描き出そうとしたのであろう。

嘆けとて月やはものを思はする

かこちがほなるわが涙かな

西行法師



嘆けと言つて、月がわたしに物思いをさせるのだからか。そうではないのに、ともすれば愚痴つぽくこぼれるわたしの涙よ。

◇千載和歌集 卷十五・恋五・九二六 詞書「月前」恋といへる心をよめる

西行法師 元永元(一一一八)年〜文治六(一一一九)

○年二月十六日。俗姓藤原氏北家藤成流、俗名佐藤義清。左衛門尉康清の息子。徳大寺家の隨身、鳥羽院の北面の武士で兵衛尉にまでなつたが、保延六(一一四〇)

年二十三歳の若さで出家、法名を円位といつた。真言宗の僧として主に高野山に住んでいたが、奥州や中国・四

国など各地を旅し、晩年は伊勢に移住した。「新古今和歌集」に九四首という最高歌数が入集、同時代、あるいは

後代の人々に支持され、彼らに多大な影響を与えた。家集「山家集」は六家集の一。ほかに「西行上人集」「山

家心中集」「聞書集」「残集」などの家集、「御裳溜河歌合」「宮河歌合」の自歌合がある。歌論書「西行上人談集」

は弟子蓮阿の聞書。「詞花和歌集」に「読人しらず」として

て初出。

なげ、

とて

月つきや盤は

物ものを

おも

者はする

かこち

可か本ほん

わ可か涙なみだ

なる

可か奈な



■月やは「やは」は反語の意。「する」は使役の助動詞「す」の連体形。■かこちがほ 愚痴っぽい様子、恨めしげな様子。「うがほ(顔)」は平安末期から中世初頭にかけて、広く歌人たちの間に流行した表現だが、特に西行が愛用したものである。

恋する男の涙

西行は桜とともに月も数多く詠んだ歌人であるが、この歌はそれらの中でやや観念性の強い作である。西行自身『山家心中集』『御裳溜河歌合』に自選しているのので、この歌に愛着を抱いていたらしい。「嘆けて月やはものを思はず」という反語表現、「かこちがほなる」という所にうかがわれる、大仰なまでに恋の悲しみに感溺する姿、これらは『伊勢物語』四段における男の姿や歌いぶりに通うものがある。「去年を恋ひ行きて、立ちて見、るて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。」

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にするとよみて、夜のほのほのと明るくに泣く泣く帰りにけり。」

定家はこの『伊勢物語』の世界に通うものを西行のこの歌から感じ取っていたのかもしれない。しかし西行の歌には、業平にはさほど感じられないような自意識、反省的な思考方式のようなものがある。そのあたりも観念主義的な傾向の強い定家の共感を呼び、この一首を選ばせたのかもしれない。

村雨の露もまだ干ぬまきの葉に
霧立ちのぼる秋の夕暮

寂蓮法師



さつき降り過ぎた村雨の露もまだ乾ききつていない真木の葉のあたりに、うつすらと霧が立ち昇っている。秋の夕暮れ時。

◇新古今和歌集 卷五・秋下・四九一 詞書「五十首歌 たてまつりし時」

寂蓮法師 保延五(一一三九)年ころ建仁二(一一二〇)

二〇二)年七月二十日。俗姓は藤原氏北家長家流、醍醐寺の僧阿闍梨俊海(藤原俊成の兄弟)の息子。俊成の猶子となり、中務少輔從五位上に至ったが、出家して少輔入道と呼ばれた。六条家の顕昭と好敵手のようにいわれるが、歌才においては寂蓮がすぐれ、学識においては顕昭が勝っている。『新古今和歌集』撰者の一人とされたが、撰進以前に病死した。家集『寂蓮法師集』。『千載和歌集』初出。

■村雨 むらに降る雨、にわか雨のこと。 ■干ぬ 「ひ」は上

一段動詞「干る」の未然形。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。吃かないこと。 ■霧立ち 「霧」は「霧」の動詞。 ■まきの葉 「まき」は「まき」の動詞。 ■夕暮れ 「夕暮れ」は「夕暮れ」の動詞。

村雨 むらさめ

のつゆ

も

万多 また

日ぬ ひ

槿乃者雨 まきののはに

さり たち

立

の本類 ほんる

秋 あき

乃 の

夕 ゆふ

くれ



自然を映像的に捉える

建仁元（一一〇一）年春、後鳥羽院に詠進され、番えられた『老若五十首歌合』の折の歌である。越前の歌と合わされて勝っている。「村雨の露もまだ干ぬまきの葉」と、最初は視的に視点を働らかせ、「霧立ちのぼる秋の夕暮」と次第に視角を広げてゆく手法はやはり非凡である。一種のカメラワークのような景のとらえ方で、自然の微妙な動きを映像的に表現し得ている。

季節を秋とするならば紅葉する木々を歌うのが自然であるのに、雨の露を宿した真木を捉えている点もおもしろい。寂蓮はこれ以前、建久二（一一九一）年の「十題百首」でも「さびしさはその色としもなかりけり真木立つ山の秋の夕暮」と、秋の「真木」を詠んでいる。これらの歌の背景には『万葉集』ですでに捉えている「真木立つ山」の自然への関心を認めることもできよう。中世における美の発見は、しばしば古代の文学や芸術を媒介してなされているのである。

難波江の蘆のかりねのひとよゆる

身を尽くしてや恋ひわたるべき

皇嘉門院別当



難波江の刈り蘆の根の一節——それにも似た旅先の宿
でほんの一夜かりそめに共寝をしたばかりに、あの漆標
のように命をつくして恋い続けなければならぬのでし
ようか。

◆千載和歌集 卷十三・恋三・八〇六 詞書「撰政右大

臣の時、家の歌合に、旅宿「逢」恋といへる心をよめる」

皇嘉門院別当 生没年未詳。養和元（一一八一）年

には生存していた。村上源氏の太政大臣権亮正五位下俊隆の
娘。藤原忠通の娘で崇徳院の妃となった皇嘉門院（藤原
聖子）に女房として仕えた。治承二（一一七八）年の『右
大臣兼実家百首』の作者の一人であった。『千載和歌集』
初出。

■難波江 摂津国の歌枕。 ■蘆の こゝまで序詞。「かりねの

ひとよ（刈り根の一節）」を導く。「蘆」は難波の代表的景物。 ■

かりねのひとよ 「かりね」は「蘆」の縁語「刈り根」に「仮寝」

を掛ける。「ひとよ（一夜）」には同じく「蘆」の縁語「節」を掛
ける。 ■身を尽くし 「身を尽くし」と「難波江」の縁語「漆

標」を掛ける。 ■恋ひわたるべき 「わたる」は継続の意。

一ひとよゆへへ

乃の

可かり里りね

阿あしの能の

難た波は江えの

身み

を

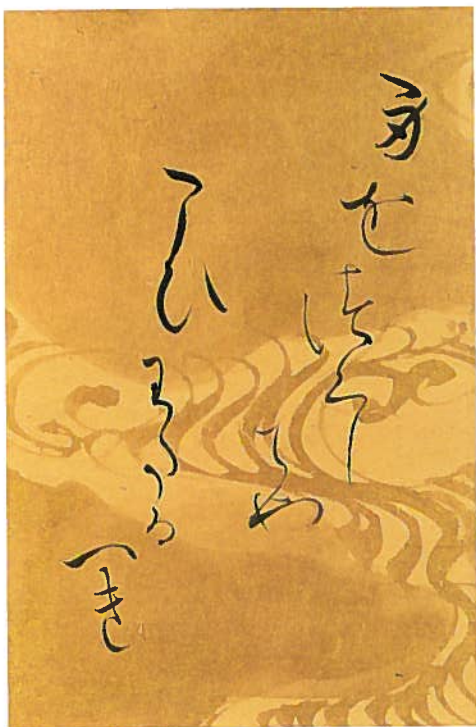
徒つくし

てや

こひ

王わ多たる

へき



一夜限りの恋

『千載和歌集』の詞書に見える。「摂政右大臣」は九条兼実のことである。この歌合は伝わらない。作者は九条家の歌合の常連だった。「旅宿「逢フ恋」という歌題において、ことさらに難波江を選んだのは、住吉や天王寺詣での旅を考えたのであろうか。そのような物詣での旅先で思わぬ契りを交すという状況を仮構したのだとすると、「お伊勢参りに石部の宿で」という、お半長右衛門みたいなことになる。現実の物詣でも、そのようなことがあつたと考えられないこともないが、やはりここは作者が自身遊女になつたつもりで、旅客との一夜限りのほかない契りを嘆いてみせた歌と考える方が妥当であろう。

なお、作者はこの歌を詠むにあつて

難波瀉短き蘆のふしの間も逢はでこの世をすぐしてよとや
（『伊勢集』）

わびぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ
（『後撰和歌集』 恋五・九六一 元良親王）

の二首を参考にしたと思われる。この二首とも百人一首に採られた歌である。しかし、伊勢のうねるような柔媚な問い掛け、ふてぶてしく居直つたような元良親王の烈しい情熱、それらはこの歌にはない。王朝末、恋の歌が衰弱してきていることはやはりいなめないだろう。

玉たまの緒をよ絶えなば絶えねながらへば
忍しのぶることの弱よわりもぞする

式子内親王



わたしの命よ、絶えるならばいつそ絶えてしまつてほしい。このまま生き長らえていると、こらえ忍んでいることが弱つて、秘めた恋心が顕れてしまうかもしれないから。

◇新古今和歌集 卷十一・恋一・一〇三四 詞書「百首歌の中に、忍ぶる恋を」

式子内親王 生年未詳。建仁元（一二〇一）年一月二十五日没。後白河天皇の皇女。名は「しきし」の読み

もある。母は大納言藤原季成の娘成子（高倉三位）。殷富門院亮子内親王・以仁王・守覚法親王らと同腹。第三十一代の齋院となり、萱齋院・大炊御門齋院・小齋院などと呼ばれる。藤原俊成を和歌の師とした。家集「式子内親王集」。『千載和歌集』初出。

■玉の緒 命の意。 ■絶えなば絶えね 「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「ば」は仮定の接続助詞。「ね」も完了の助動詞「ぬ」の命令形。絶えるならばいつそ絶えてしまえの意。 ■弱りもぞする 「も」「ぞ」はともに係助詞で、「もぞ」は心配、危ぶむ意を表わす。弱つてしまつたら大変だと危ぶむ意。

玉たまの緒をよ

多衣たえ

奈盤なは

絶たえね

な可から

へは

志しのふる

こと

余よは里り

も楚そ

寸類すんる



激しい情念のうねり

忍ぶ恋において、忍ぶことが極限に達して、忍びきれなくなりそうだから、いつそ、わが命よ、絶えてしまえという、自分自身への訴えかけはほとんど自虐的といつてもよいもので、悲痛である。白熱した情念がほとばしり出ているという感じである。しかし、この歌を作者式子内親王の実人生に直結させて、彼女自身の体験をそのまま反映していると考えられることは早計である。この激しい忍ぶ恋の情念は、百首歌という観念的な詠み方によってはじめて可能な表現であったかもしれないのである。しかし、金春禪竹はこの歌あたりにヒントを得て、謡曲「定家」を作り出している。

この歌は幾つもの古歌の影響を受けているように思われる。例えば

生の緒いきおに思へば苦し玉の緒の絶えて乱れな知らば知るとも

(万葉集 卷十一・二七八八)

玉の緒の絶えて短き命もて年月ながき恋もするかな

(後撰和歌集 恋二・六四六 紀 貫之)

絶えはてば絶えはてぬべし玉の緒に消えならむとは思ひかけや

(和泉式部集)

などである。「玉の緒」の歌をこうして挙げてみると、日本詩歌の流れの中での、一つの発想の起源の古さ、その持続力といったものに改めて驚かされる。

見せばやな雄島の海人の袖だにも
濡れにぞ濡れし色は変はらず

殷富門院大輔



あなたにお見せしたいものですわ。松島の雄島の海人の袖でさえ、濡れに濡れても色は変わりません。それなのにわたしの袖は紅の血の涙で色も赤く変わってしまった。

◆千載和歌集 卷十四・恋四・八八四 詞書は直前の「歌合し侍りける時、恋歌とてよめる」が掛かる。

殷富門院大輔 生没年未詳。正治二（一一〇〇）年ころ、七十歳ほどで没したか。従五位下藤原信成の娘。母は式部大輔菅原在良の娘。後白河天皇の皇女亮子内親王（殷富門院）に女房として仕えた。歌林苑の一員として活躍した。多作をもって知られ、「千首大輔」とあだ名された。家集「殷富門院大輔集」。「千載和歌集」初出。

■見せばやな 「ばや」は願望の終助詞。「な」は詠嘆の終助詞。お見せしたいの意。 ■雄島 松島の雄島で、陸奥の歌枕。宮城県松島湾の「雄島が磯（昔は島であった）」である。 ■海人の袖だにも いつも海水に濡れている漁師の袖さえるもの意。言外に、それなのにわたしの袖は……の意をこめる。 ■色は変はらず 漁師の袖の色は変わらないという意。言外にわたしの袖の色は血の涙のせいで赤く変わってしまったという意をこめる。



みせ者^はや

な

ぬ連^れ爾^に楚^そ

ぬ禮^れし

色^{いろ}は可^か盤^はら

をし万^まの

あ満^ま

乃^の

し

曾^そて

多^た爾^にも

血の涙に染まった袖

『後拾遺和歌集』に源重之の

松島や雄島の磯にあさりせし海人の袖こそかくは濡れしか

(恋四・八二七)

という作があり、殷富門院大輔の作はこの本歌取りである。

さらに、比較的近い時代の作として、

玉藻刈る野島の浦の海人だにもいとかく袖は濡るるものか

は (後葉和歌集 恋一 源雅光)

という歌がある。おそらくその影響も受けているのであろう。

『無名抄』に大輔と小侍従を比較して、「大輔は今すこし物

などしりて、ねづよくよむかたはまさり」という。その見本

のような作であろう。しかし、それだけに執拗な感じもする。

「見せばやな」というのも、嫌味といえは嫌味である。

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに

衣かたしきひとりかも寝む

後京極摂政前太政大臣



こおろぎが鳴く、霜の降る寒い夜、闇のむしろに衣を片敷いて、わたしはひとりさびしく寝るのであろうか。

◇新古今和歌集 卷五・秋下・五一八 詞書「百首歌たてまつりし時」

後京極摂政前太政大臣 藤原良経 嘉応元年(一一六

九)年(元久三(一一〇六)年三月七日。藤原氏摂家相続流、右大臣兼実の息子。母は従三位藤原季行の娘。慈円は叔父に当たる。摂政太政大臣従一位に至り、後京極摂政、中御門摂政などと呼ばれた。定家ら御子左家系の歌人を庇護するパトロンの存在であるとともに、藤原俊成を和歌の師とし、式部史生秋篠月清、南海漁夫などの筆名で作歌したが、漢詩にも優れていた。和歌所寄人、『新古今和歌集』仮名序筆者。家集『式部史生秋篠月清集』は六家集の一。『千載和歌集』初出。

■きりぎりす 今のことおろぎのこと。 ■鳴くや 「や」は詠嘆の間投助詞。 ■さむしろ 「寒し」と「さ庭」を掛ける。「さ庭」は幅の狭い敷物。 ■ひとりかも寝む 「か」は疑問、「も」は詠嘆の係助詞。

きりく 寸

鳴や 霜よ

さむし

ろ 雨

の

ころも

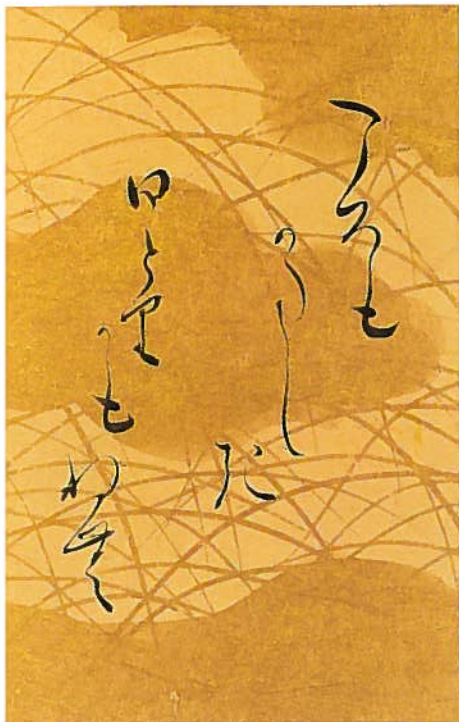
可多し

日と 里

可も

起

ね 無



霜夜のひとり寝

『新古今和歌集』の詞書にある「百首歌」とは、正治二（一

二〇〇）年の「正治二年院初度百首歌」のことである。良

経はこの百首を詠進する直前、妻（一条能保の娘）に先立た

れ、入棺の翌日遁世を企てたが、連れ戻されるという事件を

起こしている。そうした当時の良経の体験や心情とこの一首

は無関係ではないだろう。つまり、「衣かたしきひとりかも寝

む」という晩秋の独り寝の嘆き、その懐愴たる響きは、その

まま作者自身の嘆き、境遇であつたのである。

またこの歌は良経の古風への親しみをよく表している。良

経が本歌としたのは

わが恋ふる妹は逢はさず玉の浦に衣片敷き独りかも寝む

（万葉集 巻九・一六九二）

さむしろに衣かたしきこよひもやわれを待つらむ宇治の橋

姫（古今和歌集 恋四・六八九 説人しらず）

であろう。また、第五句は、百人一首三番の「あしひきの山

鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」によつ

ているのだろう。いずれも良経の親しんでいた古歌であると

考えられる。その他、漢詩文をよくした彼のことから、『詩

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の
人こそ知らねかわく間もなし

二条院讃岐

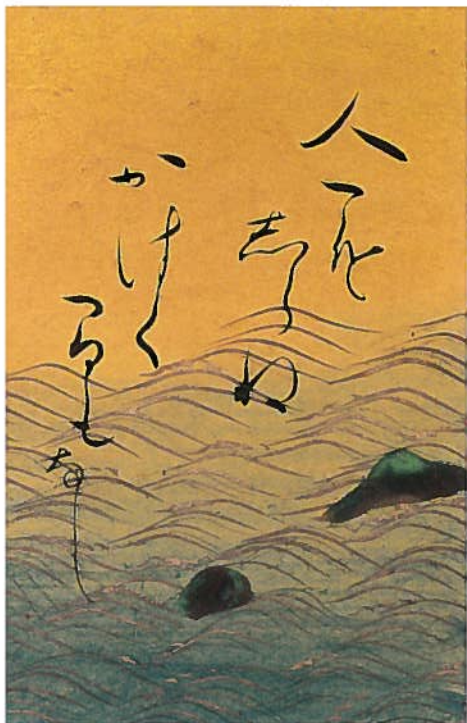


わたしの袖は引き潮にも見えない沖の石のようなもの。
あの人は知らないけれども、涙に濡れて乾く間もありま
せん。

◇千載和歌集 卷十二・恋二・七五九 詞書「寄スル石」
恋といへる心をよめる」

二条院讃岐 生没年未詳。建保五(一一二七)年こ
ろ没したか。清和源氏、右京権大夫從三位頼政の娘。二
条天皇や後鳥羽天皇中宮宣秋門院(藤原兼実の娘任子)
に女房として仕えたが、のち出家した。後鳥羽院歌壇の
一員として活躍。家集「二条院讃岐集」。千載和歌集
初出。

■潮干に見えぬ 「潮干」は引き潮の状態をいう。「ぬ」は打消の
助動詞「ず」の連体形。 ■沖の石の 「わが袖は……沖の石の」
まで「人こそ知らね」を起こす序詞。沖は深いので潮干になって
も底が現れない。 ■人こそ知らね 「ね」は打消の助動詞「ず」
の已然形。「こそ……ね」で係り結びとなり、下に逆接で続く。



わ可曾天

は

塩干二

み衣ぬ

沖の石

能

人こ楚

志らぬ

かはく

間も

奈し

沖に沈む石のようなわたし

歌題は、「石に寄する恋」である。恋と石とは取り合わせが妙だが、平安最末期、俊恵の歌林苑などで好んで詠まれたらしい。例えば、

苔のむすいはほとなりし人だにも言の葉にこそうちはとけ
けれ
(俊恵「林葉集」恋)

いとほるるわれはみぎはに離れ石のかかる涙にゆるぎげぞ
なき
『源三位頼政集』恋)

などがある。

讃岐の歌における石の比喩は無理がなく、巧みである。先掲の俊恵の作と同様、夫の帰りを待ち望んで山上に立ちつくすうちに石となってしまったという、望夫石の故事への連想が働いているのかもしれない。しかも「人こそ知らぬ」と第四句に曲折を設けて、心理のあやを表現しえていると思われる。「人」は世間一般の人とも解されるが、恋の当の相手、こちらの恋心をわかろうとしない冷たい恋人と解する方が味わいが深まるであろう。

世の中は常にもがもな渚漕ぐ
 海人の小舟の綱手かなしも

鎌倉右大臣
かまくらのうだいじん



世の中はいつまでも変わらずにあつてほしいなあ。渚を漕ぐ漁師の小舟が綱手に引かれている風景のいとおしさ。

◇新勅撰和歌集 卷八・嵯旅・五二五 詞書「題しらす」

鎌倉右大臣 源 実朝。建久三(一一九二)年(建

保七(一二二九)年一月二十七日。清和源氏、右大将頼

朝の次男。母は北条政子。鎌倉幕府の第三代將軍。右大

臣正二位に至つたが、右大臣拝賀の夜、鶴岡八幡宮社頭に

おいて、甥の公暁(兄頼家の息子)に殺された。藤原定

家を師として和歌を学んだ。定家の歌論書『近代秀歌』

は初め実朝に贈られたものである。家集『金槐和歌集』。

『新勅撰和歌集』初出。

■常にもがもな 「がもな」は「がな」と同じく、願望の終助詞。「な」は詠嘆の終助詞。■綱手 舟を引く縄で、綱手縄ともいう。■かなしも 「かなし」はいとしい、愛すべきだの意。「も」は詠嘆の終助詞。

世中盤よのなかは

徒年つねね

爾にも

か毛奈もな

ささ

こく

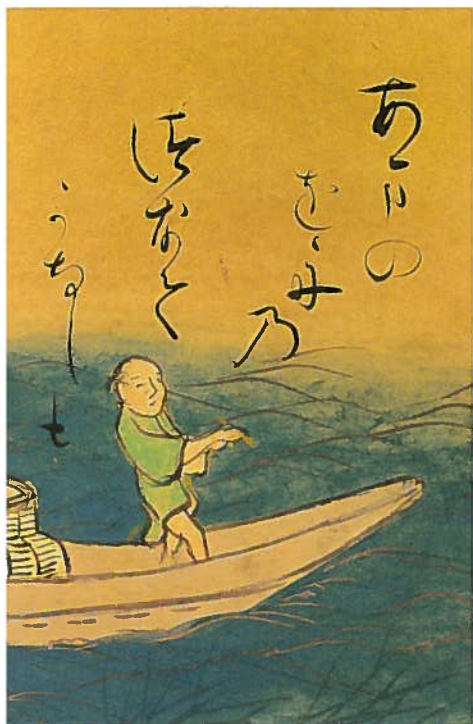
あ万あまの

を舟ぶね

乃の

徒つな天て

可奈かなしも



生きることへの執着

『古今和歌集』卷二十、東歌の陸奥歌、

みちのくはいづくはあれど塩竈の浦漕ぐ舟の綱手かなしも

(二〇八八)

の本歌取りである。しかし、それにとどまらず、第二句にはおそらく

河の上のやつ岩群に草生さず常にもがもな常処女にて

(万葉集 卷一、一二二 吹黄刀自)

の影響を認めてよいであろう。

実景は鎌倉の由比ヶ浜か、七里ヶ浜か。あるいは相模湾沿いのどこか、見たことのない塩竈の浦でも難波の浦でも、どこでもよい。ともかく、実朝は「海」とそこを漕ぎめぐる「小舟」をじつと見つめている。そして生きたいと痛切に願っている。生への限らない欲求に突如捉えられて、浜辺に立ちつくしている。痛々しい。

み吉野よしのの山の秋風あきかぜさよ更ふけて
 ふるさと寒さむく衣ころも打うつなり

参議さんぎ雅経まさつね



吉野山の秋風は夜が更けるにつれて寒くなり、古都の里は冷え込んで、どこからともなく衣を打つきぬたの音が聞こえてくる。

◇新古今和歌集 卷五・秋下・四八三 詞書「搦衣の心を」

参議雅経 藤原雅経。嘉応二(一一七〇)年、承

久三(一一二二)年三月十一日、藤原氏北家師実流、刑

部卿頼経の息子。母は権大納言源頭雅の娘。参議従三位

に至る。蹴鞠(けまり)にもすぐれ、雅経を祖とする飛

鳥井家は永く鞠の家としても栄えた。日記「革羽別記」

が残っている。和歌所寄人、「新古今和歌集」撰者の一人。家集「明日香井和歌集」。新古今和歌集」初出。

■み吉野の山 吉野山のこと。「み」は美称の接頭語。大和国の歌枕

「なり」は音声を聞いて、伝聞・推定する助動詞。衣を打つ砧の音が聞こえてくるの意。

みよしの、

山やまの

秋あき可かせ

さよ

更ふけて

ふる

郷さと

さ無むく

ころもう津つ

なり



ふるさとに響く砧の音

『古今和歌集』で、「奈良の京にまかれりける時に、宿れりける所にてよめる」という詞書を有する坂上是則の詠

み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり

(古今集 冬・三二五)

の本歌取りである。位置に至るまで、本歌との句の一致が著しいが、季節を本歌の冬から晩秋へとずらせ、冴えた砧の音によって、山里の晩秋の夜の冷えこみを表現した。単に寒さの感覚だけを取り上げた是則の作に対して聴覚をもきかせた点が、新古今時代の作品らしい芸の細かさを見せている。

雅経は他人の詠んだ歌の詞を、比較的安易に自作に取り込んでいたということが『八雲御抄』に逸話として語られている。この作もやや本歌の詞を取り込みすぎているという傾向はあるが、本歌に見られる論理的説明の部分を廃し、旧都の持つ荒涼とした美しさを風と聴覚によって歌いあげたところは見事で、本歌を凌駕したと言ってもよいだろう。

おほけなく憂き世の民におほふかな
わが立つ袖にすみ染めの袖

前大僧正慈圓



身の程もわきまえずに、わたしは憂き世に住む民の上に覆いかけるよ。伝教大師が「わが立つ袖」と歌われた比叡山に住む僧として、この墨染の袖を。

◆千載和歌集 卷十七・雑中・一一三四 詞書「題しらす」

前大僧正慈圓 久寿二(一一一五)年〜嘉禄元(一一二五)年九月二十五日。慈鎮と諡された。俗姓は藤原氏摂家相統流、関白藤原忠通の息子。母は藤原仲光の娘。兼実の弟、良経の叔父に当たる。十一歳で天台宗の覚快法親王の室に入り、生涯に四度天台座主に就任している。

和歌所寄人の一人。「慈鎮和尚自歌合」のほか、史論書「愚管抄」の著作がある。家集「拾玉集」は六家集の一。「千載和歌集」初出。

■おほけなく 形容詞「おほけなし」の連用形。身の程しらずにもと謙遜した表現。

■わが立つ袖 比叡山の意。「阿闍多羅三藐三菩提の仏達わが立つ袖に冥加あらせたまへ」(「新古今和歌集」)

■すみ染めの袖 釈教・一九二一(伝教大師)の歌に基づく。

僧の着る黒衣の袖。「墨」に「住み」を掛ける。

於保希奈く

うき世の

民耳

お本ふ

可奈

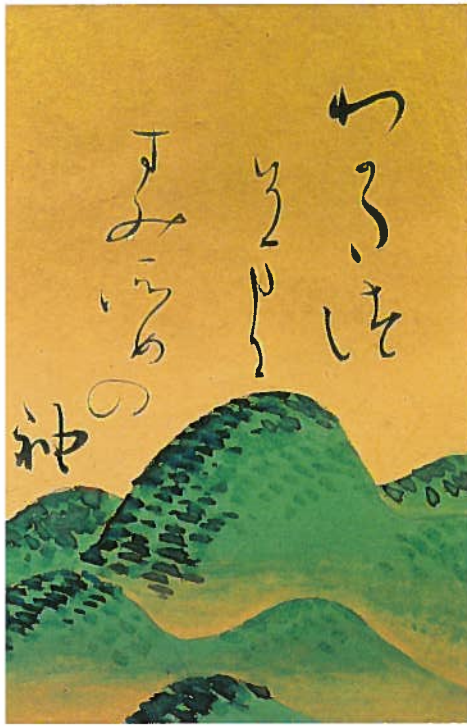
わ可多徒

そ万爾

すみ所め

の

袖



宗教人としての気負いと自信

この歌は慈円にとつて初期の「日吉百首」での詠で、その段階ではまだ一度も座主になっていない。故に、謙辞の裡に秘められた作者の自負の心を汲み取るべきであろう。慈円は自身詠草に「我立杣門人」などと署名し、最後の法灯を継ぐ者という自意識を明確にしているのである。国家体制を護持しようとする使命感に満ちた力強い慈円の一面を窺わせてくれる。

慈円には、このような自信に満ちた高僧の顔とは別に、千日の山籠りの修行にやつれてひたすら自己の心を凝視する聖としての顔もある。後者においては西行と比せられることもあるが、同じ僧侶歌人といっても、慈円には身分上の制約が厳然とあるわけで、やはり本質的に両者は同列に論じ得ないであろう。百人一首において西行は私的な恋の歌が選ばれているのに対して、慈円はこのような公人としての歌が選ばれていることから、定家の二人に対する認識のあり方が窺えるように面白い。

花さそふ嵐あらしの庭の雪ならで

ふりゆくものはわが身なりけり

入道前太政大臣



桜花を誘って散らす山風が吹きおろす庭に落花の雪が散り敷く。その花びらの雪でなく古りゆくものはわが身であるよ。

◇新勅撰和歌集 卷十六・雜一・一〇五四 詞書「落花をよみ侍りける」

入道前太政大臣 藤原公経。承安元（一一七一）年（寛元二（一二四四）年八月二十九日。藤原氏北家公季流、内大臣実宗の息子。母は権中納言藤原基家の娘。藤原定家の妻（為家の母）は姉に当たる。妻は源頼朝の妹、聿藤原能保の娘。鎌倉幕府と近い関係にあったため承久の乱の際には後鳥羽院によつて幽閉されたが、乱後は太政大臣従一位に至り、権勢を誇った。世に西園寺太政大臣・一条大相国などと称する。『新古今和歌集』初出。

■花さそふ 桜をさそつて散らすの意。 ■嵐 山風のこと。 ■庭の雪 落花を雪に見立てたもの。 ■ふりゆく 「花」「雪」の縁語 「降り」に「古り」を掛ける。

花はなさ所そふ

あらし

の

庭には乃の

雪ゆきならて

婦ふりゆくもの盤は

わ可か身みな里り

け利り

花と老い

嵐のように絢爛たる花吹雪が舞う庭先に佇んで、功成り名遂げた入道大相国が、わが身に迫る死の影を予感している。豪華で躍動的な上句から、一転して静かでひそやかな下句へと沈静するに至ったとき、上句の華かさが人生の最期の輝きの美しさであるかのように思われるのである。花と老いの取り合わせは、それぞれが持つ美しさと悲しみを一層深め合うものではないだろうか。

花と老いを詠んだ歌としては、かの有名な小野小町の

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせ

しまに（百人一首 九番 古今和歌集 卷一・春歌下・二二三）

がある。また、公経の義兄に当たたる定家も

春を経てみゆきに馴るる花の蔭ふりゆく身をもあはれとや

思ふ（新古今和歌集 雑上・一四五四）

と詠んでいる。公経はおそらく義兄のこの作に学んでいるのである。



来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに
 焼くや藻塩の身もこがれつつ

権中納言定家

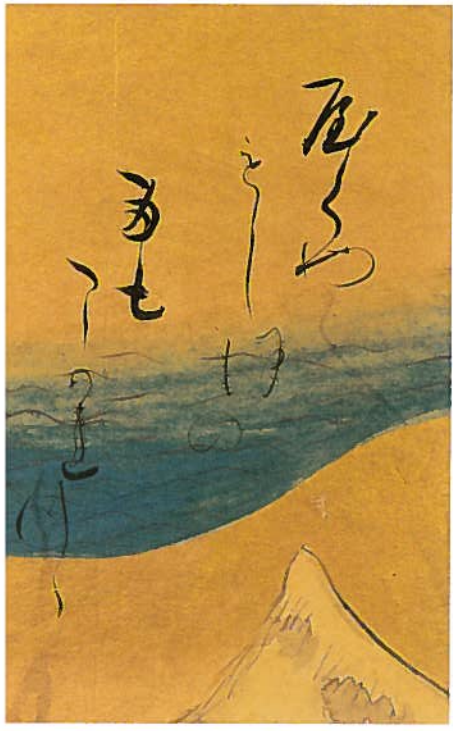


松帆の浦の夕暮れ時、わたしはいくら待ってもやって来ないつれない恋人を待ち続ける。夕風の空にまつすぐ
 に立ち昇る藻塩焼く煙のように、身も恋心にじりじりと焦がれながら……。

◇新勅撰和歌集 卷十三・恋三・八五一 詞書は直前の
 「建保六年内裏歌合 恋歌」が掛かる。

権中納言定家 藤原定家。「ていか」と音読するこ
 とが多い。応保二(一一六二)年〜仁治二(一二四一)
 年八月二十日。藤原氏北家長家流、皇太后宮大夫俊成の
 息子。母は若狭守藤原親忠の娘(美福門院加賀)。権中納
 言正二位に至った。和歌所寄人、「新古今和歌集」撰者の
 一人。「新勅撰和歌集」単独撰者。日記「明月記」、歌論
 書「近代秀歌」、「詠歌之大概」、歌学書「顕註密勘」、「僻
 案抄」など著書多数。「古今和歌集」を初め三代集、「伊
 勢物語」「源氏物語」「土佐日記」「更級日記」など、多く
 の古典の書写校訂、注釈をも試みた。家集「拾遺草」
 は六家集の一。「千載和歌集」初出。

■松帆の浦 淡路国の歌枕。淡路島の北端、明石海峡を隔てて明



こぬ人を

万川

本の

うら能

夕なきに

雨

屋くや

毛し保

身も

こ可速

川

つつ 「藻塩」は海藻に潮水を注いで乾かした上で、焼いて水に溶かし、その上澄みを煮詰めて製した塩。来ぬ人を待つ我が「身」が恋い焦がれる意と、藻塩が焼け焦げるの意を掛ける。

身を焦がす恋の煙

『新勅撰和歌集』の詞書にいう建保六年というのは実は誤りで、正しくは建保四(一一二六)年閏六月九日に行われた「百番歌合」での作である。この歌合では定家は十首とも順徳天皇とあわされ、当然負けがこんでいるのであるが、この作は勝とされている。

「松帆の浦」は、『万葉集』巻六に

名寸隅の 船瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の浦に 朝風に
 玉藻刈りつつ 夕凧に 藻塩焼きつつ 海少女 ありとは
 聞けど 見に行かむ 縁の無ければ 丈夫の 情は無しに
 手弱女の 思ひたわみて 徘徊り われはそ恋ふる 船楫
 を無み (九三五・笠金村)

と歌われている。定家の作はこの長歌の本歌取りである。つまり男が松帆の浦に住む「海少女」に恋い焦がれるという本歌を、定家は逆に、「海少女」の立場を架構し、訪れて来ないつれない恋人を待って、待って身を焦がしている女心を詠んだ。そして彼女が焼く藻塩の煙はそのまま恋に焦がれる彼女の身と心を象徴するのである。

風そよぐ檜ならの小川をがはの夕暮ゆふぐれは
御禊みそぎぞ夏のしるしなりける

従二位家隆じゆにゐいへたか

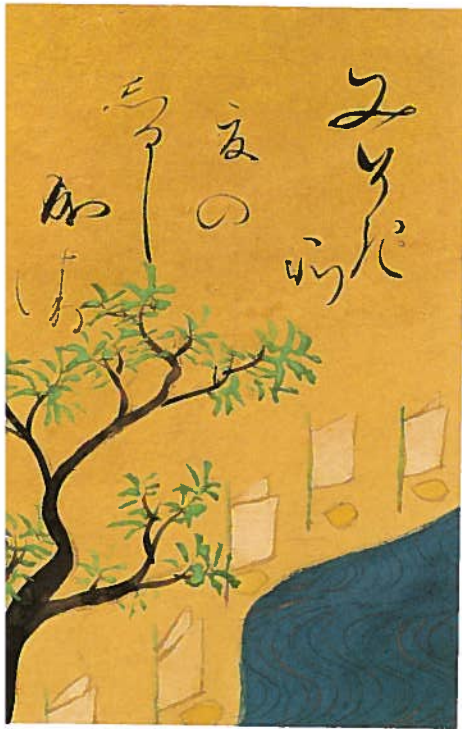


風が檜の葉を吹きそよがせる、上賀茂の御社の御手洗、
檜の小川のほとりの夕暮れは、さながら秋のような涼し
さだが、みそぎをしているのがわずかに夏であることの
しるしだよ。

◇新勅撰和歌集 卷三・夏・一九二 詞書は直前の「寛
喜元年女御入内屏風」が掛かる。

従二位家隆 藤原家隆。しばしば「かりゆう」と音
読される。保元三（一一五八）年〜嘉禎三（一二三七）
年四月九日。藤原氏北家良門流、権中納言光隆の息子。
母は太皇太后宮藤原実兼の娘。宮内卿に任ぜられたこと
もある。従二位に至り、壬生に家があったので、壬生二
品と称せられた。和歌を俊成に学び、定家と並び称され
る。和歌所寄人、「新古今和歌集」撰者の一人。家集「壬
二集」（「玉吟集」）は六家集の一つ。「千載和歌集」初
出。

■橋の小川 上賀茂神社の境内を流れる御手洗川のこと。昔この
川で陰暦六月末に夏越の祓が行われたという。 ■御禊 夏越の
祓のこと。その年の上半期の罪や穢れを祓い落とすために河原に



風かぜそよく

なら

の

を川がは乃の

夕ゆふくれ八は

みぞ起き

所ところ

夏なつ

の

志しるし

成なり

けり

清涼感あふれる夏の歌

寛喜元（二二二九）年十一月十六日、時の関白であった九条道家の娘尊子が後堀河天皇の内裏に入内した。その際の「月次御屏風十二帖和歌」で、六月の三面のうち、「六月蔽」の画題を詠んだものである。

みそぎするならの小川の川風に祈りぞわたる下に絶えじと

（古今和歌六帖 第一・二一八 作者未詳）

の本歌取りであるが、

夏山の檜の葉そよぐ夕暮はことしも秋のこちこそすれ

（後拾遺和歌集 夏・二二二 源頼綱）

にも影響されているとみられる。檜の葉の重なりをそよがせる風音、小川の水しぶき、神事の清浄感などが重なり合って、涼しげでさわやかなひとときを詠みこんでいる。

この入内屏風和歌に際して詠進された家隆の作品を、定家は『明月記』において、いい作がないと酷評している。しかし、この歌だけはよい出来であると定家も認めていたのであった。

人も愛し人も恨めしあぢきなく
世を思ふゆゑにももの思ふ身は

後鳥羽院



人がいとおしくも、また恨めしくも思われる。おもしろくないことに、世の成行きを思うがゆえに思い悩むこの身には。

◇ 続後撰和歌集 卷十・雑中・一一九九 詞書「題しらず」

後鳥羽院 治承四(一一八〇)年〜延応元(一二三九)年二月二十二日。諱は尊成。第八十二代の天皇。高倉天皇の第四皇子。母は修理大夫藤原信隆の娘殖子(七条院)。建久九(一一九八)年に皇子の土御門天皇に讓位後院政を執つたが、承久三(一二三二)年七月、鎌倉幕府の執権北条義時を討とうとした承久の乱に敗れ、落飾し、隠岐に流され、同地に没した。『新古今和歌集』の下命者であるが、選歌を自ら精選しているので、実質的には撰者となしうる。歌論書『後鳥羽院御口伝』、撰歌合『時代不同歌合』その他の著作がある。家集『後鳥羽院御集』。『新古今和歌集』初出。

■ 人も恨めし 「恨めし」は恨めしいの意。第一句の「愛し」と

相反する形容詞を対比的に用いた。 ■ あぢきなく 何をして

人もおし

目と毛

うら

免し

あち支

なく

よ越

思ふ

ゆへ耳

もの思婦

身は



源氏の心情を「かかる折は、人わろく、恨めしき人多く、世の中はあぢきなきものかなとのみ、よろづにつけて思す」と叙している。

王道の衰微に対する苛立ち

この歌は、「後鳥羽院御集」によると、建暦二（一一二二）年十二月の二十首御会で「述懐」の題を詠んだ五首のうちの一首として詠まれたものである。当時後鳥羽院は三十三歳であった。中年というよりは、古の帝王にとってはむしろ初老といったほうがよいかもしれない年齢にさしかかっていた頃である。

「人も愛し人も恨めし」という二句は、「人」を愛する気持と「人」の有様に満足できない心と、一見矛盾した心の働きを表現したものである。しかし、この二つは矛盾してはいないのであろう。「恨めし」は相手から離れ、または相手を捨てようとする「いとほし」とは違う。相手の愛情を期待するからこそ、満たされぬことを恨むのだから、それは「愛し」と同じく、相手に執着する心の状態である。

このころ院は漠然たる不安に捉えられていた。王道の衰微を膚で感じ取っていたのだらう。鎌倉幕府との関係で政治上の行き詰りを痛感し、しかもそんな現状を打破できない自身と、その周辺に対する苛立ちや愛憎半ばする感情をもてあますようになり、それを吐露したのがこの歌だったのである。



ももしき
百敷や古き軒端のしのぶにも
なほ余りある昔なりけり

順徳院

宮中の古い建物の軒端に生えている忍ぶ草、その忍ぶ
のように、偲ぶにつけて、いくら偲んでも余りある昔で
あるなあ。

◇ 続後撰和歌集 卷十・雑下・二〇二 詞書は直前の
「題しらず」が掛かる。

順徳院 建久八(一一九七)年〜仁治三(一二四
二)年九月十二日。諱は守成。第八十四代の天皇。後鳥
羽天皇の第三皇子。母は從二位藤原範季の娘重子(修明
門院)。父後鳥羽院とともに承久の乱を起こしたが敗北
し、乱後、佐渡に流され、同地に没した。和歌は藤原定
家に学び、歌学書『八雲御抄』、故実書『禁秘抄』などの
著作がある。家集『順徳院御集』。『続後撰和歌集』初
出。

■百敷や 「ももしき」は内裏、宮中の意。「や」は詠嘆の間投助
詞。 ■しのぶ 忍ぶ草(ノキシノブ)に動詞「偲ぶ」(回想する)
を掛けている。 ■なほ余りある 「あまり」は軒先の突き出て
いる部分の「余り」を言う語でもあるので、上の「軒端」の縁語
になる。

も、し

きや

布留起ふるき

志能しのふ
軒者のきはの

爾にも

なを(ほ)

あ万里まり

昔むかしな梨り
阿類ある

氣けり



聖代を懐しむ

『順徳院御集』によれば、建保四(一二二六)年ごろ詠まれた「二百首和歌」での一首である。周防内侍が家を手放す際に柱に書き付けたという

住みわびてわれさへのきのしのお草しのぶかたがたしげき宿かな
(金葉和歌集 二度本・雑上・五九二)

の歌などが念頭に置かれているのであろう。

軒先に生えた忍ぶ草は、その建物が荒廃しているという感じを与える。この歌も忍ぶ草が生えた古い軒端を詠むことによつて、宮中の荒廃、ひいては王道、帝徳の衰微を嘆き悲しんだものである。

では、王道の行われる世の中、つまり「昔」として、この作者はどのような治世を考えていたのであろうか。それはやはり、律令国家が円滑に機能していたかのように後世理想化されてゆく延喜・天曆(九〇〇〜九五七)あたりの御代であったのかも知れない。そして、理想化された「昔」と王道が衰微してしまつた現在とを思い比べ、そのあまりの隔りをただ嘆くのみであった。承久の乱の前の、行き詰つた状況の中から洩れた嘆息が聞こえてくるようである。

百人一首語句索引

全百首の歌の、上の句・下の句をはじめ、各語句を五〇音順に配列した。どの語句からも、歌番号(算用数字)とページ(和数字)がひける。特に、上の句は赤字、下の句は青字で示した。

あぢきなく	99	一六
朝ぼらけかな	52	一四
朝ぼらけ	31・64	三・一六
浅茅生の	39	六
明けやらぬ	85	一七
明けぬるを	36	三
明けぬれば	52	一四
明くる間は	53	一六
秋もいぬめり	75	一五
秋は来にけり	47	一四
秋は悲しき	5	一〇
秋の夕暮	70・87	一四・一七
秋の野は	37	七
秋の田の	1	二
秋の草木の	22	一四
秋にはあらねど	23	一六
秋風に	79	一六
秋風ぞ吹く	71	一四
暁ばかり	30	一〇
逢ふこともがな	56	一三
逢ふことの	44	一六
逢ひ見ての	43	一六

あだ波は	72	一四
あしびきの	3	一六
あはれ	71	一四
あはれ今年	75	一五
あはれと思へ	66	一三
あはれとも	45	一〇
い		
いひしばかりに	21	一四
いふべき人は	45	一〇
いふよしもがな	63	一六
いかに久しき	53	一〇
いく野の道の	60	一〇
いく夜寝覚めぬ	78	一五
いづくも同じ	70	一四
いづみ川	27	一四
いたづらに	9	一八
いつ見きとてか	27	一四
出でし月かも	7	一四
いでそよ人を	58	一六
猪名の篠原	58	一六
いなばの山の	16	一三
いにしへの	61	一三
命さへ	50	一〇
命ともがな	54	一〇
命にて	75	一五
祈らぬものを	74	一四
今帰り来む	16	一三

あはれ	71	一四
あはれ今年	75	一五
あはれと思へ	66	一三
あはれとも	45	一〇
い		
いひしばかりに	21	一四
いふべき人は	45	一〇
いふよしもがな	63	一六
いかに久しき	53	一〇
いく野の道の	60	一〇
いく夜寝覚めぬ	78	一五
いづくも同じ	70	一四
いづみ川	27	一四
いたづらに	9	一八
いつ見きとてか	27	一四
出でし月かも	7	一四
いでそよ人を	58	一六
猪名の篠原	58	一六
いなばの山の	16	一三
いにしへの	61	一三
命さへ	50	一〇
命ともがな	54	一〇
命にて	75	一五
祈らぬものを	74	一四
今帰り来む	16	一三

あはれ	71	一四
あはれ今年	75	一五
あはれと思へ	66	一三
あはれとも	45	一〇
い		
いひしばかりに	21	一四
いふべき人は	45	一〇
いふよしもがな	63	一六
いかに久しき	53	一〇
いく野の道の	60	一〇
いく夜寝覚めぬ	78	一五
いづくも同じ	70	一四
いづみ川	27	一四
いたづらに	9	一八
いつ見きとてか	27	一四
出でし月かも	7	一四
いでそよ人を	58	一六
猪名の篠原	58	一六
いなばの山の	16	一三
いにしへの	61	一三
命さへ	50	一〇
命ともがな	54	一〇
命にて	75	一五
祈らぬものを	74	一四
今帰り来む	16	一三

あはれ	71	一四
あはれ今年	75	一五
あはれと思へ	66	一三
あはれとも	45	一〇
い		
いひしばかりに	21	一四
いふべき人は	45	一〇
いふよしもがな	63	一六
いかに久しき	53	一〇
いく野の道の	60	一〇
いく夜寝覚めぬ	78	一五
いづくも同じ	70	一四
いづみ川	27	一四
いたづらに	9	一八
いつ見きとてか	27	一四
出でし月かも	7	一四
いでそよ人を	58	一六
猪名の篠原	58	一六
いなばの山の	16	一三
いにしへの	61	一三
命さへ	50	一〇
命ともがな	54	一〇
命にて	75	一五
祈らぬものを	74	一四
今帰り来む	16	一三

潮干に見えぬ 22 92
しをるれば 8 22
しかぞ住む 8 22
鹿ぞ鳴くなる 83
しがらみは 32
茂れる宿の 47
しづ心なく 33
しだり尾の 3
しのばれむ 84
しのぶにも 100
しのぶもぢずり 14
忍ぶることの 89
忍ぶれど 39・40
しばしとどめむ 12
しぼりつつ 42
白菊の花 29
白露に 37
知りながら 52
しるしなりける 98
知る人にせむ 34
知る人もなし 66
知るも知らぬも 10
白きを見れば 6
白妙の 2・4
す 4
末の松山 42

過ぐしてよとや 19
須磨の関守 78
すみ染めの袖 95
住みの江の 18
せ 62
関は許さじ 62
瀬々の網代木 64
瀬をはやみ 77
そ 90
袖だにも 90
た 64
たえだえに 64
絶えてしなくは 44
絶えて久しく 55
絶えなば絶えぬ 89
たえ間より 79
高砂の 34・73
高師の浜の 72
滝川の 77
滝の音は 55
田子の浦に 4
ただ有明の 81
立たずもあらなむ 73
立ちにけり 41
立ち別れ 16
竜田川の 17
竜田川の 69

たなびく雲の 79
手枕に 67
玉ぞ散りける 37
玉の緒よ 89
手向山 24
たれゆゑに 14
誰をかも 34
ち 38
誓ひてし 38
契りおきし 75
契りきな 42
ちぢにものこそ 23
ちはやぶる 17
つ 81
月ぞ残れる 81
月見れば 23
月宿るらむ 36
月やはものを 86
月やはしかな 59
筑波嶺の 13
綱手かなしも 93
常にもがもな 93
露にぬれつつ 1
露もまだ干ぬ 87
つらぬきとめぬ 37
つれなかりけり 85
つれなく見えし 30

と 60
遠ければ 60
とばかりを 63
苦をあらみ 1
友ならなくに 34
外山のかすみ 73
鳥のそら音は 62
な 100
なほ余りある 100
なほ恨めしき 52
なほ聞こえけれ 55
ながからむ 80
長くもがなと 50
長月の 21
ながながし夜を 3
ながなかに 44
ながむれば 70・81
ながめせしまに 9
長(なが)らへば 68・84
流れもあへぬ 32
渚漕ぐ 93
鳴きつる方を 81
鳴く声に 78
鳴く鹿の 5
鳴くや霜夜の 91
嘆きつつ 53

ね	ね	ぬ	幣	錦	匂	なり	なり	奈	檜	涙	波	難	難	難	名	夏	夏	名	嘆
やのひまさへ	なましものを	れもこそすれ	も取りあえず	なりけり	ひぬるかな	ぬれど	ぬべきかな	良の都の	の小川の	なりけり	越さじとは	波なる	波渦	波江	にし負はば	の夜は	来にけらし	こそ流れて	こそ惜しけれ
85	59	72	24	69	61	55	45	61	98	82	42	20	19	88	25	36	2	55	65・67
一七〇	一六	一四	一〇	一六	一三	一〇	一〇	一三	一六	一四	一四	一四	一六	一六	一〇	一三	一四	一〇	一七

人の恋しき	人の命の	人には告げよ	人に知られで	人づてならで	人知れずこそ	人こそ見えね	人こそ知らね	ひさかたの	光のどけき	ひ	春の夜の	春の日に	春の野に出でて	春過ぎて	花よりほかに	花の散るらむ	花の色は	花ぞ昔の	花さそふ	初霜の	激しかれとは	はかるとも	は	のちの心に
39	38	11	25	63	41	47	92	33	33		67	33	2	2	66	33	9	35	96	29	74	62	43	
一六	一六	一三	一三	一六	一三	一四	一四	一六	一六	一三	一三	一三	一四	一三	一六	一六	一六	一七	一六	一六	一四	一四	一六	

降れる白雪	ふるさとは	ふるさと寒く	古き軒端の	ふりゆくものは	ふりさけ見れば	冬ぞ寂しさ	淵となりぬる	ふしの間も	富士の高嶺に	吹くからに	吹きとぢよ	昼は消えつつ	人をも身をも	人を初瀬の	ひとり寝る夜の	ひとりかも寝む	ひとよゆゑ	人も愛し	人も恨めし	人目よくらむ	人目も草も	人はいふなり	人はいさ
31	35	94	100	96	7	28	13	19	4	22	12	49	44	74	53	88	99	99	18	28	8	35	
一三	一七	一六	一〇〇	一三	一四	一五	一六	一六	一八	一四	一四	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一三	一三	一七	

陸奥の	道こそなけれ	乱れてけさは	乱れそめにし	御袂ぞ夏の	見せばやな	水くくるとは	見しやそれとも	短き蘆の	みかの原	三笠の山に	御垣守	松も昔の	松帆の浦の	まつとし間かば	待ち出でつるかな	まだ宵ながら	まだふみも見ず	またこのごろや	まさりける	まきの葉に	ま	ほととぎす	干さぬ袖だに
14	83	80	14	98	90	17	57	19	27	7	49	34	97	16	36	60	84	28	87	81	65		
一六	一六	一六	一六	一六	一六	一四	一四	一六	一六	一四	一六	一六	一六	一三	一三	一三	一六	一六	一四	一三	一三		

ものをかは知る	もの思ふころは	もの思ふ身は	もの思ふふと	ものをか思ふと	ものをこそ思へ
99	85	99	53	40	49・80
一六	一七	一六	一六	一六	六・一六

紅葉なりけり	紅葉の錦	もみぢ葉は	紅葉踏み分け	燃ゆる思ひを	漏れ出づる月の	もろとも	八重桜	八重むぐら	焼くや藻塩の	やすらはで	八十島かけて	宿を立ち出でて	山おろしよ	山川に	山桜	山里は	山鳥の尾の	山の秋風	山の奥にも	夕暮は	夕されば	夕なぎに	雪ならで
24	24	69	5	51	79	66	61	47	97	59	11	70	74	32	66	28	3	94	83	98	71	97	96
三	三	三	二	一	一	三	三	一	一	二	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

雪は降りつつ	ゆくへも知らぬ	ゆく末までは	行くも帰るも	夢の通ひ路	夢ばかりなる	由良の門を	吉野の里に	夜ぞ更けにける	よに逢坂の	世の中は	世の中よ	夜もすがら	よるさへや	夜は燃え	夜の月影	夜半の月かな	弱りもぞする	世をうぢ山と	世を思ふゆゑに	夜をこめて	わが庵は	わが恋は	わが衣手に	わが衣手に
4・15	46	54	10	18	67	46	31	6	62	93	83	85	18	49	57	68	89	8	62	8	40	15	1	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	

わが袖は	わが立つ袖に	若菜摘む	わが名はまだき	わが涙かな	分かぬ間に	わが身なりけり	わが身ひとつの	わが身世にふる	別れては	別れより	わきて流るる	忘らるる	忘れじの	忘れやはする	渡せる橋に	わたの原	渡る舟人	わびぬれば	わかれても末に	われならなくに
92	95	15	41	86	57	96	23	9	10	30	27	38	54	58	6	11・76	46	20	77	14
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

作者索引 (五十音順)

算用数字は歌番号、和数字はページ数を示す。

Table of author index entries organized by hiragana (あ, い, う, え, お, か, こ, け, さ, た). Each entry includes the author's name, a page number, and a corresponding number in a smaller font.

大僧正行尊 66・一三
 大納言公任 藤原公任 55・二〇
 大納言経信 源経信 71・四三
 大式三位 58・二六
 平兼盛 40・〇八
 高階貫子 54・二〇
 儀同三司母 11・三三
 小野篁 26・五三
 藤原忠平 41・八二
 壬生忠見 76・二五
 藤原忠通 30・〇六
 壬生忠岑 41・八二
 中納言朝忠 藤原朝忠 41・八六
 中納言兼輔 27・五五
 藤原兼輔 6・二二
 中納言家持 16・三三
 大伴家持 6・二二
 中納言行平 在源行平 16・三三
 源経信 源経信 71・四三
 源経信 源経信 71・四三
 列樹 春道列樹 32・〇四
 貫之 紀貫之 35・七〇

定家 藤原定家 97・一四
 眞信公 藤原忠平 26・五三
 天智天皇 1・二二
 道因法師 82・二四
 融 融 14・六
 俊成 藤原俊成 83・六六
 敏行 藤原敏行朝臣 18・三
 俊頼 源俊頼朝臣 74・一四
 友則 紀友則 33・六
 中大兄皇子 1・二二
 天智天皇 1・二二
 仲麿 安倍仲麿 7・二四
 業平 在原業平朝臣 17・五

源等 39・七
 人麻呂 柿本人麻呂 3・六
 深養父 清原深養父 36・七
 藤原頼輔 79・一五
 藤原朝忠 44・八
 藤原敦忠 43・六
 藤原家隆 98・一六
 藤原興風 34・六
 藤原兼輔 27・五
 藤原清輔朝臣 84・一六
 藤原公経 96・一三
 藤原公任 55・二〇
 藤原賢子 大式三位 58・一六
 藤原伊尹 45・六
 藤原定家 97・一四
 藤原定方 25・五
 藤原定頼 64・一三
 藤原実方朝臣 51・一〇
 藤原実定 81・一六
 藤原忠平 26・五
 藤原忠通 76・一五
 藤原俊成 83・一六

藤原敏行朝臣 18・三
 藤原雅経 94・一八
 藤原道信朝臣 52・一四
 藤原道雅 63・二六
 藤原基俊 70・三〇
 藤原義孝 50・一〇
 藤原良経 91・八二
 文屋朝康 37・七
 文屋康秀(文琳) 22・四
 遍昭 12・四
 法性寺入道前閑白 76・三
 太政大臣 藤原忠通 80・一〇
 堀河 待賢門院堀河 76・三
 雅経 藤原雅経 94・一八
 匡房 大江匡房 73・一六
 道真 菅原道真 24・四
 道綱母 右大将道綱母 53・一〇
 道信 藤原道信朝臣 52・一四
 道雅 藤原道雅 63・二六

凡河内躬恒 29・五
 兼昌 78・一五
 実朝 93・一六
 源重之 48・六
 源経信 71・四三
 源融 14・六
 源俊頼朝臣 74・一四
 源等 39・七
 源宗干朝臣 28・五
 壬生忠見 41・八
 壬生忠岑 30・六
 紫式部 57・二四
 元輔 清原元輔 42・八
 基俊 藤原基俊 75・一五
 元親王 20・四
 山辺(山部)赤人 4・八
 祐子内親王家紀伊 72・一四
 行平 在源行平 16・三三
 陽成院 13・三
 良暹法師 70・一四

百人一首の手帖

一九八九年十二月十日第一版第一刷発行 ©

編集尚学図書

東京都文京区後楽二丁目一五一

発行相賀徹夫

印刷所 日本写真印刷株式会社

京都市中京区壬生花井町三

発行所 株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋二丁目三十一

(郵便番号) 一〇一〇一(振替)東京八二〇〇

編集〇三三三〇一五三三三

業務〇三三三〇一五三三三

販売〇三三三〇一五三三三

Printed in Japan

ISBN4-09-504071-8

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合はおとりかえいたします。